

ぼっちではありません、エリートです。

メカニック

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも比企谷八幡が佐々木異三郎みたいになったら……という思いつきネタです。

ただただ思いつく限りのままに書いた小説ですので、それでも構わないという方だけお願いします。

銀魂っぽさはあまり期待しないでください。

## 目次

腐った目はモノクルをかけても腐っている	1
エリートは犬を助ける時もエリート	6
こうしてエリートは凡人教師に目を付けられる	10
たとえば腐っていても、鯛は他の魚とは一線を画す	15
腐った瞳に映るもの	24
パシリ? いいえ、気が利くだけ	29
エリートでも予想できない事もある	34
クッキー作りを通して、彼らの距離は縮まった……のかもしれない	42
後門は崩れ去り、前門から虎と狼が迫りくる	56
(剣豪) 将軍かよオオオオオオオ!	63
エリートの救済と暗躍	77
リア充共の首切り台	96
奉仕部の華麗なる放課後	107
鎖の悪意	116
バカと天使と疑心暗鬼	124
凡人少女の告白	130
エリートの束の間過ぎる休日	137
檻褻切れドレスのシンデレラ (前編)	145
檻褻切れドレスのシンデレラ (後編)	160
姉弟と兄妹	171
やはり比企谷八幡はエリートである。	179
エリートは友を呼ぶ	191
休みに家に集まってやることは大体スマブラ	197

ひび割れの友情（前編）	203
ひび割れの友情（後編）	213
ひびはやがて溝と化す	226
優秀な凡人は少しだけ変わる	232
人生、諦めが肝心	238
魔王と怪物の会遇	255
家族とは、人それぞれ	267
たった一步を踏み出せば、溝はきつと越えられる	272
ほう・れん・そうは大事だって第一話で言ってたじゃないですか	279
世界は狭いようで広いけどやっぱり狭い	289

腐った目はモノクルをかけても腐っている

比企谷小町は考える。人が変わるきっかけとは何なのだろうと。

比企谷小町の兄、比企谷八幡は幼少の頃から友達ができなかった。多少暗い雰囲気醸し出していたからか、人見知り気味だったせいかな、運が悪かったのか、その理由は分からない。

小学生の頃の比企谷八幡の学校生活は、お世辞にも充実していたとは言えなかった。周りからぞんざいに扱われ、常に嘲笑の対象となっていた彼の心は日に日にやせ細り、それを反映するかのようには腐っていた。

それでも比企谷小町にとって、比企谷八幡は自慢の兄だった。両親と喧嘩して家出した時、真つ先に迎えに来てくれたのは兄だった。自分は一切悪くないのに、一緒に謝ってくれたのも兄だった。

引きこもりがちになった兄を何とか元気づけようと、比企谷小町はある日、近所の祭りへ兄を無理矢理連れ出した。本人は乗り気ではないものの、折角の妹の好意を断る事も出来ないのです、そこそこに付き合っさつさと帰ろうと思っていた。

そこでふと目に入ったのが、ヒモくじの屋台。景品がヒモに括り付けられていて、そのヒモの束の中から一本選んで引くというものだ。まあ、折角来たんだし一回くらいやっていこうと思った八幡は、小学生にとっては大金の500円を払ってヒモを引いた。

当たったのはモノクル。視力も特に悪いわけではない八幡にとっては無用の長物であったが、これをかければ自分の腐った目が隠れるかもしれないと考えた八幡は、そのモノクルを付けた。それと同時に、浴衣を着て綿あめを片手に持った小町が合流した。

「あつ、お兄ちゃんヒモくじやったの？あの最新ゲーム機取れた？あれって本当にヒモとつながってるのかな？」

「……ああいう人目を引く景品は客寄せ目的ですから、簡単には取れないように細工されてると考えた方がいいでしょう。とはいえ、全く

取れない細工がされていたとすれば詐欺ですが」

「……へっ？お、お兄…ちゃん…？」

「何ですか、小町さん？」

——このモノクルを付けた瞬間から、比企谷八幡の人生は180°の変化を遂げる。

祭りに行った翌日から、八幡は常にモノクルを付けるようになった。話し方も誰に対しても敬語を使う様になり、学校の成績も瞬く間に学年トップまで上り詰めた。小町と両親は八幡の変貌に戸惑っていたが、じきに慣れていった。

そして八幡が中学生の頃、とある事件が起こった。同級生である折本かおりに八幡が告白。しかし即座に振られてしまう。その際に、

「この事は二人だけの秘密って事にしよ？その方がお互いの為だし…」

とかおりに告げられる。八幡としても断る理由が無いので了承した。だが、その翌日に八幡がかおりに告白して振られた事がクラス中に広まっていたのだ。黒板に書かれた誹謗中傷の言葉を静かに見る八幡。それを見たクラスの人間が笑いながら、キモい、ありえない、勘違い男等と次々と罵る。当事者のかおりも一緒に笑っていた。

八幡は黒板を見るのを止めて振り返る。その表情はいつもと何ら変化は無かった。子供らしからぬ迫力に吞まれてクラスから笑い声が消えると、八幡が黒板を指差して口を開いた。

「これ、書いた人誰ですか？どこでどうやって知ったかは知りませんが、女性の秘密をばらすとは趣味の悪い…。え、私ですか？私は別に

気にしてません。もう終わった事ですから、言いふらされようが何されようが別に構いません。しかし皆さんはご存知ないと思いますが、私が告白したのを秘密にしようと言ったのは折本さんです。いくら振られたとはいえ、告白した相手を晒す行為は看過できません。安心して下さいね折本さん。エリートですから、これ書いた犯人見つけるのなんて道に落とした自転車の鍵を見つかるより簡単です」

胸に手を当て、かおりに言う。かおりは気まずそうに目線を逸らせるが、八幡はそれを気にせず更に続ける。

「さあ、書いた人はさっさと名乗り出て下さい。今正直に言えば半殺しくらいで許してあげますよ。もしかしたら全部殺しちゃうかもしれませんかね。好きだった人の秘密をばらされて、ちよつとばかり機嫌が悪いものですから」

無機質な目がクラスを見渡す。この空気の中で誰かが名乗りを上げるわけもなく、時間だけが刻々と過ぎていく。このまま黙っていれば、この件は有耶無耶になるだろうと考えたクラスの全員は誰も言葉を発しない。しかし、八幡にそんな甘い手は通用しなかった。

「別に言いたくないなら結構です。後ろに飾ってある習字と黒板の文字の筆跡を比較すれば、誰が書いたのかは分かります。エリートですから。まあ、凡人のあなた方でも分かるくらい特徴的な止め払いとかありますから、皆さん知ってて黙ってるんでしょうけどね。このまま黙ってるつもりなら、この書き込みを見て笑っていたあなた方全員を同罪にしてもよろしいんですよ？ 良いんですか、巻き添えを食っても？ 私は別に一人だろうが三十人余りだろうが構いませんが」

数人の顔色が一気に悪くなる。八幡はあえて気づかないふりをし、クラス全員に問いかけた。……そのうち、ぽつぽつと犯人を指差す者が現れ始める。いつしかクラスの悪意が八幡から犯人達へと向

き、八幡は振られてもなおお相手を気遣える良い奴だという評価になった。

「お兄ちゃんは折本さんに振られた後、お父さんに携帯を買ってもらっていろんな人とメルアドを交換して、メールばかりするようになったんだよね…。あの時はお兄ちゃんが本格的にダメ人間になっちゃったと思ってたけど、まさか……」

比企谷小町はリビングのテーブルに座っている、朝からドーナツを頬張っている藍色の長髪に赤い目をした女性に目を向けた。

「……？どうしたの小町。ドーナツ食べたいの？」

「いえいえ、まさかあの兄にこんなに早く嫁候補が出来るなんて、今でも信じられなくて……」

「……小町、私は嫁候補じゃない。未来の嫁」

「ごつくん、と口の中の物を飲み込んだ未来の嫁……今井信女は眼光を鋭くして反論した。

「信女さん……また朝からドーナツですか。来るなら来るって言ってくれれば朝食くらい用意しますから、いい加減ほう・れん・そうの何たるかを覚えてください」

「思い立ったが吉日、斬らないで後悔するより斬って後悔する方が良い。それが私の正義<sup>ジャスティス</sup>。それに私はドーナツさえあれば生きていく」

「いや、死にますよ近いうちに。長生きしたいなら少しはドーナツ離れなさい」

「……………八幡が言うなら」

渋々と、信女は食べかけのドーナツを箱に戻した。八幡は小町と信



女の分の牛乳をテーブルに置くと、自身もMAXコーヒを飲んで一息吐いた。

「まったく、一緒に登校したいというなら前日にそう言ってください。私がエリートだから良いものの、もし凡人だったら一週間持たずに別れていますよ」

「大丈夫、もし八幡が凡人だったら私が八幡の生活に合わせてあげる」  
「……それはどうも」

何を言っても無駄だと感じた八幡は、残っているコーヒを飲み干すと鞆を持った。信女もそれに続く。

「それではちよつと早いですが行くとしますか。小町さん、くれぐれも事故とかに巻き込まれないように」

「それは普通送り出す人の台詞じゃないかな…」

「私達はエリートですが、あなたは凡人ですからねえ。心配でしょうがないんですよ」

「その心配のされ方はポイント低いよ、お兄ちゃん…」

「危なくなったらすぐに斬ればいいわ、小町」

「それできるのは信女さんだけですから!!お二人ともいつてらっしやい!!」

半ば急かすように二人を送り出した小町は、ぜえぜえと肩で息をする。そして、どこか遠い目で二人が出ていったドアを眺める。

「まさか、彼女をすつ飛ばしてお嫁さんができるとは思わなかったなあ…」

学校に行くのを若干気怠く感じながら、小町は自分の登校の準備を進めた…。

## エリートは犬を助ける時もエリート

朝早く、人通りが疎らな道を八幡と信女は並んで歩く。しかし世間一般のカップルのような甘々しい空気は二人の間には流れていなかった。

「……やっぱりこんなに早いと、他に人がいないね」

「エリートですから、凡人と同じ景色を眺めているだけじゃ駄目なんですよ」

「私は八幡と同じ景色を見ていたい」

「プロポーズですか？ ですけど成人するまで結婚はしません」

八幡のドライな反応が気に食わなかったのか、信女の頬がドーナツを口に含んだ時のように膨らむ。だがそれはすぐに元に戻った。何かを見つけた信女が指を車道に向けて指し示す。

「……八幡、犬が……」

「犬？……いますね。あれはミニチュアダックスフントですね。首輪にリードが付いている所を見ると、誰かの飼い犬でしょうか」

「あんなところにいたら危ない。いつ車が通るか……っ！」

信女が指差したのは誰かの飼い犬であろうミニチュアダックスフント。車道に飛び出していったのを信女は心配そうに見ていたが、図らずもその心配は現実のものとなってしまった。

八幡と信女が歩いて来た方向の反対から、黒いリムジンが走ってきた。恐らく運転手は犬の姿を捉えているだろうが、それなりにスピードを出していたためにブレーキを踏んでも間に合わない。犬は足がすくんでしまったのか、その場に伏せてしまい動かなかった。

犬を助けようと駆け出した信女の横を、更に早い人影が追い越す。ガードレールを軽く飛び越え、犬の首根っこを掴んで待ち上げた八幡は、スピードを落としきれずに突進してくるリムジンに向けて飛び上

がり、ボンネットを踏み台にして更にジャンプ。宙返りを披露して綺麗に着地した。

「八幡っ!!」

「どうも、信女さん。この通り怪我はありません。犬も私も」

「……良かった」

八幡は助け出した犬を信女に渡し、後ろで停止したりムジンに向かって歩いていく。運転席の窓をコンコンと叩くと、窓が開いて運転手が顔を出した。

「申し訳ありません、いくらエリートといえどもあれ以外に事故を避ける手段はありませんでした。ボンネットが少々へこんでしまっているようなので、後日弁償させていただきます」

「あ、いえ……こちらの不注意ですからお気になさらずに……。そちらこそ、どこか怪我はありませんでしたか?」

「ええ、問題ありません。低い車体で助かりました」

「は、はあ……」

「……おや、どうやらあの犬の飼い主が来たようですね。それでは、これで失礼させていただきます。今回の事は、お互いに不幸だったということで、くれぐれもご内密に……」

八幡は会釈をすると、踵を返して信女の元へ向かった。しかし彼女の周りの空気が悪い。どうやら飼い主が犬のリードを手放した事を責めているようだった。

「あなたのせいでこの子が死ぬかもしれないなかった。どうしてリードを放したりしたの?」

「それは……えと……サブレがいきなり走り出したから……」

「それはあなたがちゃんと躡けてなかったから。犬のせいにはしないで。飼い犬も満足に躡けられないようならペットなんて飼わないで。」

無責任だから」

「……………」

辛辣な言葉に飼い主の少女は俯く。

「落ち着いて下さい信女さん。凡人にそこまで求めるのは酷というものです」

「凡人の考えなしの行動のせいで、この子が危険な目に遭うのはまちがっている」

「ええ、その通りです。そこでどうでしょう、このワンちゃんを私達に譲りませんか？どうやら凡人のあなたには手に余るようですので」

「……………え？」

予想だにしない八幡の提案に、飼い主の少女は固まってしまった。

「ご安心を。家には猫がいますので、動物の扱いは慣れていきます。このワンちゃんも、凡人に飼われるより我々エリートに飼われるほうが…」

「だ、駄目っ!!」

少女は信女が抱えていた犬を無理矢理ひったくった。その後ハツとしておずおずと後ずさる。

「えっと、サブレを助けてくれたのはありがとうございます…。で、でもサブレはうちの家族だから…」

そう言うと、少女は怯えた様に犬をギュツと抱きしめる。八幡はその様子をじっと見た後、口を開いた。

「そうですね、出過ぎた真似をしまい申し訳ありません。しかしそう仰ったからには、これからは飼い主として責任を持った行動をし

ていただかないと困ります。たとえまた同じような出来事が起きて、偶然にも私達がその場に居合わせたとしても、私達は一切介入しないのでそのつもりでいてください。今回、あなたのワンちゃんが助かったのは、凡人にとって一生に一度あるか無いかの幸運だったということをお忘れずに」

「……はい……」

「よろしい。では信女さん、行きましょうか」

「うん。ばいばい、サブレ」

言いたいことを言い終わった八幡は、サブレに無表情で手を振る信女を待ったのち、再び学校へ向けて歩き出した。

その後、信女が総武校の生徒でないにもかかわらず一緒に入ろうとした事や、

朝助けた犬の飼い主が総武校にいた事や、

携帯をいじくってばかりで一年間友達ができなかった事は、エリートにとっては些事なので語られる事は無いだろう…。

こうしてエリートは凡人教師に目を付けられる

『高校生活を振り返って』

私はこの一年間、実に充実した高校生活を送れました。先生方とても優しく勉強を教えて下さり、クラスメイトの皆さんとも和気藹々と過ごしていました。そのおかげで日々の生活にも活力が湧き、勉学に励んだ結果、学年総合一位を一年間キープすることができました。それもこれも私と仲良くしてくださいました皆さんのおかげです。

今後この結果に満足することなく、より一層尽力していきたいと思えます。そしてこの総武高校で送る高校生活を、もっと充実したものにへと変化させていこうと思います。

とか書いてみましたけど嘘ですから。実際、学年一位をキープした理由は私の実力以外の何物でもありません。クラスの凡人の皆さんは何も関係ありません。和気藹々とも過ごしてませんから。むしろ除け者でしたから。

それに学年一位になったからって良い事なんてありません。あつたことといえ、いわれの無い妬みや恨みをいつの間にかお買い上げしてしまい、執拗に嫌がらせを受けた事ぐらいです。具体的には、○○さんに筆記用具を隠されたり、△△さんからどつかれたり、□□さんに変な噂流されたり……きりがないので全部は書きませんが。まあ、エリートですからこれくらいどうってことはないんですがね。担任の先生にも相談してみました。忙しいようでもしてくれなかった。自分で解決しました。おおよそ二ヶ月程費やしましたが、ゴミ掃除にしては早く終わったと思います。

この一年間を振り返ってみて分かった事は、ここには凡人しかないという事。偏差値が高いので私と同じエリートがいてもおかしくないと予想していましたが、悪い意味で裏切られましたね。これなら偏差値がここより低くても、信女さんと同じ高校にしておけば良かったと誠に後悔しております。何故なら、私がいくらこの学校の為意識改革を行おうと、凡人には到底理解できないでしょうし、そもそも実行すらできないでしょうから。

結論、エリートの持ち腐れですね。

~~~~~

「……なあ比企谷、私が出した課題は何だったかな？」

「おや、ド忘れですか？高校生活を振り返って、というテーマで作文を書けと先日仰ったではありませんか」

「ちゃんと覚えているようだな。で？この舐めた作文はどういうつもりだ？」

職員室で作文を読み上げた後、睨みを利かせる国語教師の平塚静（独身）。そして立ったままの姿勢で受け答えをする比企谷八幡（エリート）。国語の課題である作文に問題があったとして、平塚静が八幡を呼び出したのである。

「舐めているとはとんでもない。ただの事実と、私自身の考えを正直に書いただけです」

「それがどうして、嘘と密告文と全校生徒を見下した文章になるんだ？」

「失礼ですが、密告ではありません。既に私刑を下していますから、この場合は事後報告というのが正しい表現です」

「小僧、屁理屈を言うな」

「小僧……まあ確かに平塚先生の年齢からすれば妥当な表現……」

平塚静の拳が八幡の顔のすぐ横を捉えた。ヒュッ、という風を切る音が聞こえる距離にもかかわらず、八幡は掠めた拳を見るところか表情すら変えなかった。

「……次は当てるぞ」

「でしたら次は避けます。エリートですから」

突き出した拳を戻しながら平塚静は内心、八幡の確固とした立ち振るまいに驚愕していた。今のは当てる気が無かったと分かっていたから、微動だにしなかったというのか？

平塚静はポケットから煙草を取り出すと、火をつけて深く吸い、白い煙をゆっくり吐き出した。

「確か、君は部活には入ってなかったよな？」

「ええ。凡人の皆さんが必死で取り組んでいる事を容易くやり遂げてしまつては反感を買いますから」

「その不快極まりない言い回しはどうにかならないのか……。その口の悪さに加えて腐った魚のような目……友達とか、いるのか？」

「いますよ。メル友なら百人以上登録してあります。ほら」

「ははは、嘘ならもう少しマシなものを……って多いな!？」

静は八幡には友達はいないだろうと予想していたが、八幡の携帯電話の電話帳に登録された人数を見て度肝を抜いた。

こまつちゃん、ノブたす、銀たん、トシちゃん、総ちゃん、みつちゃん、さつちゃん、ツツキー、新ちゃん、とつあん、かぐりん、ツラ、晋ちゃん、むつちゃん、かむりん、タカチン、たまたま、マダオ、あぶさん、妙たん、九ちゃん、ぴららん、くりりん、辰つちゃん e t c ……。

人数もそうだが、普段の言動からは想像できない砕けた名前で登録



してある事が信じられず、平塚静は頭を抱えた。

「……その、彼女とかはいるのか？」

「未来の嫁ならいますが」

「嫁え!？」

勢いよく立ち上がり、八幡に詰め寄る静。相変わらず八幡の表情に動きは無い。自分だけが騒いでいるのに若干気恥ずかしさを感じた静は、咳払いを一回して気を取り直し、八幡に告げる。

「——よし、こうしよう。レポートは書き直しだ」

「はあ……まあ構いません」

「だが、君の心ない言葉と態度が私の心を傷つけたのは事実だ。女性に年齢の話をするなど教わらなかったのか？」

「それは申し訳ありません。凡人の心の脆さを考えて発言するべきでした」

「……まあ、いい。罪には罰を与えないとな」

「分かりました。今、弁護士を呼びますので慰謝料はそちらと話し合って決めて下さい」

「いや違う違う違う!!奉仕活動だ!君には罰として奉仕活動をしてもらうから携帯から手を放せ!!」

携帯電話で弁護士を呼ぼうとした八幡を静は慌てて止める。

「まったく…普通、高校生が弁護士を呼ぼうとするか…?」

「エリートにとっては当たり前のことです。何度もお世話になりましたし……おっとすいません。凡人の平塚先生には縁もゆかりもない話でしたね」

「……君はまた……はあ。まあいい、取りあえず着いてきたまえ!」

無駄に男前な雰囲気醸し出しながら、静は八幡を連れて職員室を

出ていった…。

「平塚先生、折角ですからメル友になりましょう。アドレス、しずちやんで登録しておきます」

「君は教師相手に…っておい！それ私の携帯!?!いつの間にとった!?!」

「寂しかったらいつでもメールしてきていいですよ」

「大きなお世話だ!!」

たとえ腐っていても、鯛は他の魚とは一線を画す

「(渡り廊下を越えた…となると、特別棟にでも向かっているのでしょうか)」

ヒールを鳴らしながら颯爽と歩く静の後に続きながら、八幡は連れていかれる場所を予想していた。中庭を見ると皆がテニスをしている中で一人だけバドミントンをしている男がいたが、どうでもいいのでさっさと記憶から消したところで静の足が止まった。

「——着いたぞ」

何の変哲もない教室のドアを、静は勢いよく開いた。そこにいたのは、パイプ椅子に座って本を読んでいる一人の少女。窓から差しこんだ夕日が彼女の存在を神秘的にしている…そんな彼女を見た八幡が心中で抱いたのは、芸術品の一種のようだという感想であった。

少女は教室に入ってきた静の方を見ると、少し不満げな表情をして口を開いた。

「平塚先生、入る時はノックをお願いしたはずですが…」

「ノックをしても君は返事をしないじゃないか」

「返事をする間もなく先生が入ってくるんですよ。……それで、その入り口にいる人は？」

「ああ、彼は比企谷八幡…おい、いつまでそこにいるつもりだ？ さっさと入ってこい」

静に催促されると、八幡はドアをノックして少女の顔を見た。少女は八幡の意図を理解すると、溜息を吐いてそれに答える。

「…どうぞぞ」

「どうも」

短い受け答えをして八幡はようやく教室に入って静の隣に立つ。プルプル震えている様子の静を無視して、八幡は少女に自己紹介をする。

「初めまして、雪ノ下雪乃さん。先程ご紹介に与りました二年F組所属の比企谷です」

「……私、あなたに名前を教えた覚えが無いのだけれど。ひよっとして私をストーキングしていたのかしら？」

「いえいえ、学力テストの順位で自分の所を見ると、いつも近くにあなたの名前があったから覚えていたんですよ。ついでにそれを見て悔しそうにしているあなたを何度も見かけましたから、あなたが雪ノ下雪乃だということは分かっていました」

相も変わらず無表情で言い切った八幡を、雪ノ下雪乃は悔しさからか鋭く睨む。

「意外だな、君の事だから自分の成績以下の雪ノ下の事など興味ないと思っていたよ」

「心外ですね。確かに興味はありませんが、全校生徒の顔くらいは覚えていきますよ。エリートですから」

雪乃の瞳の鋭さが増したのを肌で感じつつも、八幡は動じない。

「はあ…着いて早々に君という奴は…。これからここに來ることになるのだから、あまり悪印象を与えるな」

「……これから？」

「そうだ。君には罰としてここでの部活動を命じる。異論反論抗議質問口答えは認めない。しばらく頭を冷やして反省しろ」

「では訂正を。いかにあなたが生活指導担当だとしても、あなたの独断で一生徒を強制的に特定の部活へ入部させることは出来ません。

それとも越権行為を承知でごり押しさせますか？良いですよ、私は別に困りませんから」

静はぐつと唇を噛む。言うことを聞かなければ三年間で卒業できないとでも脅そうかと考えていたが、八幡にはどうやら通用しそうにない。他に何か良い考えが無いか模索していた静だったが、意外にもそれは他ならぬ八幡自身の口から提案された。

「……そうですね、なら平塚先生が私のお願いを聞いていただけのならば、私が自分で入部を希望したという事で入部しても構いませんよ」

「何っ!?……こ、こほん…それで一体何を要求する気だ?」

「ドーナツ買ってきてください」

「……ド、ドーナツ?」

「はい。あ、ポン・デ・リング忘れないくださいね。あとフレンチクルーラーも。これ忘れたら入りませんから」

「わ、分かった!比企谷、今の言葉を忘れるなよ!雪ノ下、今から彼を入部させるから、この捻くれた人格の更生を頼むぞ!」

「え、ちよつと……」

言うが早いか、静は八幡と唾然とした雪乃を部室へと残して走って出ていった。

「……ところで、ここは何をする部活なのでしょう、雪ノ下さん」

「……平塚先生から何も聞いてないの?」

「ええ、一言付いて来いと言われただけです。それにさっきは、先生に対する質問を封じられてしまいましたので聞けませんでした」

後半の八幡の捻くれた言い分に呆れつつも、雪乃は無言で本を閉じた。

「そうね、ならゲームをしましょうか。ここが何部か当てるゲームよ。学年一位ならそれくらいできるでしょう?」

「おや、それは面白そうなゲームですね。いいでしょう、受けて立ちます」

面白そうとは微塵も思っていないさそうな表情であったが、八幡は雪乃の提案するゲームに乗ることにした。

「…ふむ、この部屋にはなんら特別な物は無い。あるのは普通の机と椅子。加えて、放課後にもかかわらずいるのは彼女一人：部員が何人いるかは分かりませんが、部室に最低一人いれば成り立つという事でしょうか。本を読んでいたのは活動か趣味か判断できませんから保留にしておきましょう。しかし、凡人の中でもそれなりに知名度はあるであろう彼女が、何かの部活に入ったという話や噂を聞いたことがありますね…。という事は、あまり積極的に活動しない…?それとも、目立たない活動内容…?」

しばらく考え込んでいた八幡だったが、やがて何かを思いつき、腐った目を腐らせたまま答えを言った。

「名称までは分かりませんが、個人の相談事に対応する部活ではないでしょうか?」

「…その心は?」

「あなた一人だけでも問題なく行える活動内容。そして有名な雪ノ下さんが所属しているというのに、私はこの部活動の存在を噂にも聞いた事がありません。加えて人があまり寄り付かない特別棟を拠点にしているというのなら、あまり公にするのは好ましくない活動をしているのでしょうか。そこから導き出される答えは、生徒の悩みを聞いたり個人的な頼み事を引き受ける部活動です」

「…少し違うけれど、概ね正解と言っていていいわね。比企谷君、女子と話したのは何年ぶり?」

八幡は一度雪乃を見ると、次に部室の入り口を眺めだした。

「……平塚先生はカウントしないわ」

「そうですか。なら今朝ぶりですね」

「…家族もカウントしないわよ?」

「まあ、ある意味家族になる予定ではありますが、今はまだ違うのでカウントさせてもらえますか?」

「あら、許嫁でもいるのかしら?」

「未来の嫁です。ほら、この子」

小馬鹿にしたように笑みを浮かべていた雪乃だったが、八幡の携帯の待ち受けに写った八幡の腕に絡む信女の写真を見て真顔になった。

「比企谷君、どんな弱みを握っていたいけな女の子を操っているの? それは犯罪よ。通報されなくなったら今すぐその子を解放しなさい」

「どうぞ自由に。それよりも、肝心の答えをまだ聞いていないんですよが」

「……持つ者が持たざる者に、慈悲の心をもってこれを与える。人はそれをボランティアというのよ。途上国にはODAを、ホームレスには炊き出しを、モテない男子には女子との会話を。——ようこそ奉仕部へ。歓迎するわ」

「奉仕部……それがこの部活の正式名称ですか」

「ええ。平塚先生曰く、優れた人間は憐れな者を救う義務があるのだそうよ」

「成程。エリートである私が、この学校に溢れかえる凡人達の力になってやれという事ですか。罰と言うのも領けます。これほど私にとって時間の無駄と言えるものはありませんから」

一人で納得している八幡を、雪乃が信じられないものを見るような

目で見る。

「あなた、よくそんな自信満々にエリートなんて名乗れるわね。少なくとも、あなたのその腐った性格と目は普通以下だと思っただけだ」

「腐っていても劣っている訳ではありません」

事も無げに言う八幡に雪乃が更に言い返そうとしたところで、静が部室へと戻ってきた。

「雪ノ下、邪魔するぞ。比企谷、この通り買ってきてやったんだから約束は守れよ」

「どうもありがとうございます」

ドーナツの箱を受け取った八幡を見て、雪乃がこめかみを押さええて溜息を吐いた。静はその様子を見て、うんうんと頷く。

「仲が良さそうで結構な事だ。比企谷も、この調子で捻くれた性格の更生と腐った目の矯正に努めたまえ」

「……更生？私なんてつきり凡人の悩みを解決させることが罰だと思っ  
ていましたが……」

「それもあるが、奉仕部の目的は自己変革を促して悩みを解決することが活動内容だ。私は改革が必要だと判断した生徒をここに連れてきている。精神と時の部屋と思ってもらえばいい。それとも少女革命ウテナと言った方が分かりやすいか？」

「あれはエリートだからどうにかなったんです。凡人がそんな所に入られれたら死んで終わりですよ。俺達の戦いはこれで終わりエンドです」

「……雪ノ下、彼の更生には手こずっているようだな」

「本人が問題を自覚していないせいです」

「私は別に問題とは思っていませんし、求めてもいないんですけどね」



雪乃と静が同時に八幡を見る。

「…ふむ？」

「傍から見れば、あなたの人間性は余人より著しく劣っていると思うのだけど。自分を変えたいと思わないの？」

「万人に好かれる性格ではないのは百も承知です。それにあなた方はご存知無いでしょうが、私は幼少の頃に一度大きく変わっているんです。自分ではよく分からないのですが、当時の両親や妹が変わった変わったうるさかったものですから。一度変わってそれでも周りの変化が大したものでなかったなら、何度変わろうと同じでしょう？」

「あなたのそれは、ただ逃げてるだけ」

「それで結構。エリートも逃げの選択肢を選ぶ事もあります。人生は重要な選択肢の連続だと、メル友が言っていました。それに変わるというのは、結局は自身の現状から逃げる為に変わるのでしょう？何故、そこまで変わる事に執着するのでしょうか？」

雪乃の纏う雰囲気、変わった。

「——それじゃ悩みは解決しないし、誰も救われないじゃない」

「——生憎と、こんな私のままでも誰かを救っています。少しはその狭い視野を広げて物を見なさい、凡人」

鬼気迫る表情の雪乃に、八幡はいつも通りの無表情で返した。嫌な空気を変える為に、静が咳払いをして笑顔で喋り出した。

「いやあ、面白い事になってきたな。お互いの正義がぶつかるという展開が私は大好きなんだ！そこでこうしよう、これから君達の下に悩める子羊を導く。彼らを君達なりに救ってみたまえ。そして、お互いの正しさを存分に証明するがいい！」

静は一度言葉を切ると、握り拳を作って気合いを入れ、マイクを持つジエスチャーをしながら天空を指差した。

「どちらが人に奉仕できるか!?ガンダムファイト！レディー……『出なければ、斬りますっ!!』」「すいません平塚先生、電話ですので席を外します」……」

決め台詞的な事を言おうとした所で、八幡の携帯に着信が入る。固まったままの静を置いて、八幡は廊下へ出ていった。

「すいませんねえ信女さん、予期せぬ事態が発生したもので予定より遅れてしまいました。……え？門の外にいるんですか？遅くなら先に戻っていいとメールしたではありませんか。……ええ、お気持ちは大変ありがたいですよ。……はい、どうせもう終わりますから、一緒に帰りましょうか。お土産もありますからね。ええ、それでは」

電話を終えた八幡が部室へ戻る。

「連れがもう外に来てしまっているの、後の事はまた明日という事でよろしいですね？」

「……好きにしろ……。雪ノ下も良いな……？」

「……は、はい」

グロッキーな静とそれに引いている雪乃を置いて、八幡はさっさと信女が待つ門の外へと向かった……。

「お待たせしました。これ、お詫びのドーナツ…」

「はむっ………もむもむ………これは、八幡が買ったやつじゃない」

「ええ、正解です。今日、私がペナルティで入れられた部活の教師に買  
いに行かせました」

「部活？八幡が凡人しかいない学校の部活に入るなんて、明日はアン  
ゴル・モアが十人くらい降ってくるね」

「ですからペナルティですってば…」

「どんな部活？ごらく部？学園生活支援部？GJ部？」

「奉仕部………って言っても通じませんよね」

「ううん、通じる。女が男に屈服して、その体でいやらしくおもてなし  
するんでしょ？でも八幡、そういうのが好きなら言ってくればいい  
のに。私も小町も、八幡が望むならメイドでも奴隷でもめいどれいに  
もなるよ？」

「何故、そのような曲解をするに至ったのか、私が本意で入ったわけ  
はないのを分かってもらえないのか、妹が選択肢に入っているのかと  
言いたい事がありますが…」

「ご主人様、あーん」

「………あーん」

言いたい事は山ほどあるが、信女が差し出したフレンチクルーラー  
を食べる事に比べたら些細な事だったので、八幡は口を喋るのに使う  
のをやめた。

## 腐った瞳に映るもの

比企谷八幡が奉仕部に入部した翌日。その部室にて――

「……勝負？」

「ええ。あなたが傷心の平塚先生を置いて帰った後、私とあなたが勝負するという話になったわ。ちなみに拒否権も棄権も認めないですよ。それと、勝った方のメリットとして、勝者が敗者に何でも命令できる権利が与えられるわ」

「そんなゴミみたいな賞品でエリートが釣れると思ってるんでしょうかね。せめて誓約書の一つでも書かせないと、そんな賞品、口だけ約束になりますよ」

「あら、あれだけ大口を叩いておいて私に勝つ自信がないのかしら？」

「私はあなたと違って罰で入りましたから、勝負とか賞品とかそんな浮ついた気持ちで励める訳ないでしょう」

「…そ、そうね…」

軽い挑発を思いのほか真面目に返された雪乃は、勢いを無くして本に目を落とす。

「昨日もそうやって本を読んでいましたが、部活動を始めなくてもよろしいのですか？」

「依頼人が来るまでは活動できないわ。昨日の説明で理解できなかったのかしら？」

「いえ、ただ時間の無駄遣いだと思ひまして…ああすいません、無駄に時間がある凡人の雪ノ下さんはいくら浪費しようとか気にしませんか」

「……依頼が無いのは生徒が健全に過ごせている証拠よ。この部の活動理念としては喜ばしい事よ」

「その割には嬉しそうではありませんね」

「そうね、性根の腐った男が入ってきてからこの部屋の空気が汚染されてるからかしら」

「おや、この校舎に綺麗で澄み渡った空気など存在していたのですか」

「……あなた、よくそんな態度で今まで生活できたわね」

「あなたと違ってエリートですから。そういうあなたはどうなんですか？」

雪乃は静かに本を閉じ、何かを思い出すように目を閉じた。

「……人に好かれそうにないあなたにとって嫌な話になるかもしれないけれど」

「嫌な話は聞きなれていますので、お気遣いいただきなくて結構です」

「そう……私って昔から可愛かったから、近づいてくる男子は大抵、私に好意を寄せてきたわ。私自身、好かれないと思っただけ事はないのだけ……」

「むしろ自分の意思で周りの男子を片っ端から落としていったとしたら、そのほうが問題でしょう」

「ええ、その通りよ。……でもね、そんなことは関係ないのよ」

「そうですね。あなた以外の女子にとっては」

「察しが良いのね。小学校の頃、六十回程上履きを隠された事があったのだけど、そのうち五十回は女子にやられたわ。おかげで私は毎日、上履きとリコーダーを持って帰る羽目になったわ」

「どうでもいい事を鮮明に覚えてますねえ。ちなみに私は、小、中、高とあなたと似たような目に遭いました。もつとも、すぐに処分しました」

「……それは上履き？それとも犯人？」

「さあ？……想像にお任せします」

無表情で首を傾げ、処分と口にした八幡を見て寒気を感じながら、窓の外に視線を移す。

「あなたも大変だったのでしょうけど、私も大変だったのよ。私、可愛いから」

雪乃はどこか疲れた様に、ふっ、と微かに笑った。

「でも、仕方ないと思うわ。人は皆、完璧ではないから。弱くて心が醜くて、すぐに嫉妬し蹴落とそうとする。不思議な事に、優秀な人間ほど生きづらいのよ、この世界は。そんなのおかしいじゃない。

——だから変えるのよ、人ごとこの世界を」

八幡は腐った瞳で、そう言い切った雪乃を見定める。雪乃は再び本を開いてページをめくりだした。

「その砂粒のように小さな反骨心では、世界どころか幼稚園すら変えられませんよ」

ピタリとページをめくる手が止まる。

「あなたは確かに優秀です。優秀な凡人です。凡人一人がいくら喚いたところで、革命など起こせません。世界はあなたの言葉に耳を傾けようともしないでしよう」

雪乃の瞳が怒りに染まる。八幡はそれを、腐った瞳で見返した。

「……何が…言いたいの…!」

「分からないならその程度だという事です。あなたに世界は変えられない」

「なら、あなたはどうかなのっ!」

「変えますよ。それに足る理由を見つけたのならばね」

暫しの沈黙の後、雪乃の申し出で奉仕部は今日は解散となった。鍵を職員室に戻しに行った雪乃を見送ったのち、八幡は購買の自販機でMAXコーヒーを買って一服していた。

「なんだ、まだいたのか？」

「どうも。このコーヒー、近頃見かけなくなりましたね」

煙草をくわえながら歩いてきた静が、コーヒーを飲んでいる八幡の隣に腰掛ける。

「雪ノ下が自ら部活動を切り上げるとは、珍しい事もあるものだ。…何かあったか？」

「ええ、ありません」

「そうか…まあ詳しくは聞かないでおこうか。君も聞かれたくはないだろう」

「別に話しても構わないのですがね」

「そ、そうか…。ところで君から見て、雪ノ下雪乃はどう映る？」

「…力強い猪、でしょうか」

八幡の意外な回答に、静は目を丸くした。

「猪か…どうしてそう思った？」

「彼女は呆れる程に真っ直ぐです。見ていて清々しくなる位にね。彼女の目の前に立ちふさがるものは、全てその突進で破壊されるでしょう。木の壁を易々と突破し、石の壁をその力で叩き壊す」

そこで八幡は区切り、まだ中身の入っている缶コーヒーを軽く揺らした。

「——そして鉄の壁に激突し、粉々になって碎け死ぬ」

静の口から、火の消えた煙草が落ちた。

「止まる事も曲がる事もしなければ、彼女の未来は破滅が待つのみで

す。私にはそう見えました」

「……そうか。雪ノ下は優秀な生徒だが、持つ者は持つ者の苦悩があるのだよ。本当はとても優しい子だ。優しくして往々にして正しい。ただ、世の中が優しくなくて正しくないからな。さぞ生きづらからう……」

「私に言わせれば、優しくない正しくないではなく、甘くないだけです。みんなを護る警察だから良い人。みんなの上に立つ政治家だから良い人。世の中そんなに単純じゃありません」

八幡は缶に残ったコーヒーを飲み干すと、空き缶をゴミ箱に投げ入れた。

「…君は本当に捻くれているな」

「凡人が見ようともしない物をしつかりと見据えているだけですよ。おかげさまでこんなに腐ってしまいましたかね」

八幡が自分の目を指差すと、静は苦笑を返した。

「なら、そのモノクルはその目を少しでもマシにするためにかけたのか？」

「腐ったものは二度と元には戻りません。私の目が輝きを取り戻す日は来ないでしょう。……それでは、また明日」

そう言つて八幡は踵を返してこの場を去った。静は視界から八幡が消えると、二本目の煙草をくわえて火をつけた……。



パシリ? いいえ、気が利くだけ

「こんにちは、雪ノ下さん。依頼人は来ていますか?」

「……こんにちは、比企谷君。あなたの視界は濁り切っていて部屋の中が見えていないのだろうけど、来ていないわよ」

「そうですか。それは良い事ですね」

八幡は椅子を出して座り、携帯をいじくる。雪乃はそんな八幡を気にすることなく本を読み続ける。昨日、ちよつとした諍いになったとは思えない程に、二人は普通に過ごしていた。

「……昨日」

「はい?」

「昨日、あなたに言われた事を私なりに考えてみたわ。私に何が足りないのか」

八幡が顔を向けるが、雪乃は本に目を落としたまま話し続ける。

「それで、答えは出ましたか?」

「……いいえ。どんなに考えても分からなかったわ。だって私があなたより劣っているとはどうしても思えなかったから」

「凡人らしい発想ですね。現実を見ずに結論を出す所なんて特に」

「……なら、現実を見ているあなたは、私に何が足りないように見えたのかしら?」

「今ここで、私が答えなくてもいずれ身をもって知る事となりますよ。この奉仕部でね」

「それは、どういう…」

雪乃の問いを遮るようにドアがノックされた。雪乃は自身の疑問を飲み込み、ドアの向こうの人間に返事を返す。

「どうぞ」

「…し、失礼しまーす…」

おどおどと入ってきたのは髪をピンクに染めた女子生徒だった。

「平塚先生に言われて来たんだけど…って、なんでヒツキーがここに  
いんの?」

「…どうも、入学式の朝にワンちゃんを助けた以来ですね、由比ヶ浜  
結衣さん。ちなみに私がここにいるのは、あなたをここに招いたであ  
ろう平塚先生から罰を受けたからですよ」

八幡をみて驚きの声を上げた女子生徒、由比ヶ浜結衣。しかし八幡  
の二の句に、歩み寄ろうとした彼女の足が固まった。

「…あ、あたしの事知ってたんだ…」

「ええ、まあ。髪を染めたくらいではエリート目は誤魔化せません  
よ。それよりも、あのワンちゃんは元気になっていますか? 信女さんが  
しきりに心配していたのでね」

「あ、はい…おかげさまで私もサブレも元気にやっています…」

「…もういいかしら? 由比ヶ浜さん、依頼があつて来たのでしょう?」

「あ、そうそう! 実は…えっと…」

結衣が八幡の方を気まずそうに見る。結衣の心情を理解した八幡  
が席を立った。

「雪ノ下さん、ちよつとコンビニまで行ってきます」

「ちよつと待ちなさい。あなたまさか、外に出てそのまま帰る気?」

「そんなことしませんよ。由比ヶ浜さん、飲み物は何がよろしいです  
か?」

「え、そんないいよ! 悪いし!」

「お気になさらず。エリートですから、凡人のあなたに飲み物くらい

恵んで差し上げます」

「……………えっと、カフェオレでお願いします」

「比企谷君、私は野菜生活100いちごヨーグルトミックスでいいわ」

「そんなんでいいんですか？折角おごってあげるんだから、もっと高い物を選んではどうですか？」

「いや、だから悪いし…」

「比企谷君、行くなら早く行きなさい」

「はいはい。では行ってまいります」

~~~~~

由比ヶ浜結衣の依頼内容は、手作りクッキーを食べて欲しい人がいるのだが、料理の腕の自信がないので手伝ってほしいというものであった。雪乃が結衣の話を聞き終わった頃に、八幡がコンビニから帰ってきた。

「ただいま帰りました。すいません雪ノ下さん、野菜生活100いちごヨーグルトミックスが売り切れていたようなので、代わりにいちご牛乳買ってきました」

「……………比企谷君、この際、野菜生活の代わりにいちご牛乳なのはいいわ。どうして1.5リットルサイズを買ってきたの？」

「大丈夫ですよ、保冷材付けてもらいましたから。はい由比ヶ浜さん、これカフェオレね」

「あ、ありがとう…」

「それで雪ノ下さん、由比ヶ浜さんの依頼はどのようなものだったのでしょうか？」

「……………もういいわ」

雪乃は追及を諦め、結衣の依頼の内容を八幡に伝えた。

「はあ、クッキーですか…生憎とドーナツくらいしか菓子作りはやった事ないのですが」

「あなたってそんなにドーナツが好きなの？顔に似合わなくて気持ち悪いわ」

「いえ、私ではなく信女さんがね…あ、おひとついかがですか？美味しいですよ」

コンビニで買ってきたおやつのだーナツを頬張りながら、二人にも差し出す八幡。雪乃は溜息を吐いて一つ受け取り、結衣も恐る恐る受け取った。

「もぐもぐ…あ、これ美味しい…」

「それで具体的にどうされるおつもりで？」

「まずは彼女の料理の腕前を確認するわ。実際にクッキーを作ってもらいましょう」

「今からですか？家庭科室の使用許可が下りますかね…」

「平塚先生に確認を取ってみるわ」

「まあ、あの人が連れてきたんですから、それくらいの融通は利かせてもらわないと困りますがね」

「そうね。それを切り口にしてみましたか。それと比企谷君、ドーナツとはいえ一応は料理の経験があるのだから、やる事が味見だけで済むなんて思わないことね」

「思ってもいませんしその気もありませんよ。むしろ初仕事でいつもよりやる気が満ち溢れていますよ」

「あなたから溢れているのは腐臭だけよ。…由比ヶ浜さん、いつまでもドーナツを頬張ってないで行くわよ」

「もぐもぐ…んぐっ!?!げほっげほっ…う、うん！」

のんきにドーナツを食べていた結衣に釘を刺し、雪乃が職員室へと歩き出す。それを慌てて追いかける結衣と、更に後ろから歩く八幡。

誰もいなくなった奉仕部の部室を、校庭から眺めている人影があった事など、この時は誰も知る由が無かった…。

エリートでも予想できない事もある

雪乃が職員室で静に事情を説明している間、八幡と結衣は廊下で並んで待っていた。八幡は携帯をいじり、結衣はどこかそわそわしている。沈黙が耐えられなかったのか、結衣が八幡に話しかけた。

「ヒ、ヒツキーって部活やってたんだね。知らなかったよー」

「やっていると言われても…奉仕部に入ってまだ今日含めて三日しか経っていないので、何もやっていないに等しいのですがね。あとヒツキーって私の事ですか?」

「あ、うん…あだ名とかあった方が親しみやすいかなー…って。あ、い、嫌だった!?!」

「とんでもない。今までそういう斬新なあだ名で呼ばれた事が無いので、嬉しいくらいですよ」

「…それにしてもヒツキー、嬉しそうじゃないね。教室でもずっとそんな感じで不愛想だし」

「そりやそうです。嘘ですから」

「嘘なんだっ!?!やっぱり嫌だったの!?!」

「いえ、嫌でもありません。ただどうでもいいだけです。ですからどうぞ好きなように呼んでください」

「……じゃ、じゃあヒツキーのまままで…」

「それでよければどうぞ」

八幡のあだ名呼びが決定したところで、家庭科室の鍵を持った雪乃が職員室から出てきた。

「許可が貰えたわ。材料は家庭科室にあるものを使っているそうよ。良かったわね比企谷君」

「何が良かったのかよく…ああ成程、買い出しも私の役割ですか」

「当たり前でしょう? 私は部長だし、由比ヶ浜さんは依頼人。あなたが買い出し係になるのは必然ではないかしら」

「新人が面倒な役割を与えられるのはエリートも凡人も変わりませんね…」

「今のうちに慣れていたほうがいいわ。あなたの人生の主軸になる仕事なのだから」

「ご心配なく。ドーナツならしょっちゅう買い出ししてますから」

視線がぶつかり合って火花が散らされる。それを見た結衣が、瞳を輝かせながら口を開いた。

「なんか…楽しそうな部活だね！」

「……そうですか？」

「別に愉快ではないのだけれど…」

二人から冷たい視線を受けると、結衣は慌てながら両手をぶんぶん振りだした。

「あ、いや、なんていうか自然だなーって思っただけだから！ヒツキーもクラスにいる時よりもよく喋るし！…いっつも携帯いじってて、誰かと話してるところとか見た事無いからさ！」

「クラスの凡人の方々と話すより、メル友とメールしているほうが有意義ですからね」

「…感じ悪いなあ。ヒツキーってクラスに友達いんの？」

「クラスどころか学校中探してもいませんね」

「……えっと、なんかゴメン…」

「別にあなたが謝ることはありませんよ」

「そうよ由比ヶ浜さん。友達がいなのはこの男の人格のせいなのだから、それを指摘してもあなたに非は一切無いわ」

不味い事を聞いてしまったと後悔して顔を背ける結衣。八幡は友達がいらない事を気にしていないので結衣を擁護し、雪乃も罵倒と共にそれに続いた。

「…しかし解せませんね」

「……へ？何が？」

顎に手を当て、八幡は結衣の方を見ながらふと呟く。

「私や雪ノ下さんと違って、あなたには友達がありますよね？こういう事は普通、友達に頼みませんか？」

「うっ……」

今度は八幡が結衣に答えにくい質問をぶつけた。

「その…あんまり知られたくないし、こういう事してたらきつと馬鹿にされるし…。こういうマジっぽい雰囲気、友達とは合わない、から…」

「……はあ」

いまいち同意しかねた八幡が生返事を返す。それを重く受け取ってしまった結衣は俯いてしまい、少しだけ肩を震わせる。

「あはは…やっぱり変だよ…。あたしみたいなのが手作りクッキー渡したいとか、なに乙女ってんだよって感じだよね…。……ごめん、雪ノ下さん。やっぱりいいや」

「あなたがそう言うのなら私は構わないのだけれど……ああ、この男の事なら気にしなくていいわ。人権は無いから強制的に手伝わせるし」

「人権があっても手伝いますよ。エリートは引き受けた仕事はきっちりこなしますから」

「いいのいいの！あたしには似合わないしき……。優美子とか姫菜とかに聞いても、今時そんなの流行らないっていうし…」

「ならあなたは、逆立ちで告白するのが流行っていたらそれに乗っか



るんですか?」

八幡の思いがけない言葉に、結衣と雪乃は困惑の眼差しを八幡に向けた。

「はあ? そんなの流行る訳ないじゃん! 何言ってるの?」

「常識が無いのは理解していたつもりだったけれど、まさかここまでとはね…」

「やるんですか、やらないんですか?」

二人の罵倒をもともせず、再び結衣に聞いた。その不気味な迫力に結衣は思わず一步下がってしまった。どうにか答えを口にした。

「……や、やる訳ないじゃん…」

「ですよ。なら流行など気にしなくてもよいのでは? 自分にとって大事な事を決めるのなら、自分が良いと思った事をやればいいんですよ」

「……そ、そうかな?」

結衣は答えを求めるように雪乃を見る。

「……この男の言う事に同意するのは癪だけど…周りに合わせる必要はないと思うわ」

「そっか…そっか! うん! あたし、頑張るね!」

うんうんと力強く頷き、結衣は気合いを入れなおした。意気揚々と先に歩いて行く結衣を見て、雪乃と八幡は内心で単純だと思いながら後に続いた。

~~~~~

家庭科室に着くと、雪乃は調理器具、八幡と結衣は材料と役割を分担して準備を進める。

「由比ヶ浜さん、桃の缶詰は必要ありませんよ」

「へ？でも隠し味とか入れた方が良いじゃん」

「立場をわきままえなさい。初心者が隠し味なんて手を出したら100%失敗しますよ。黙ってエリートと言う事をききなさい」

「……はい」

不満げに桃缶を戻す結衣を見て不安がよぎる雪乃だったが、それを表には出さずに準備を終える。続いて三角巾とエプロンを身に付ける……のだが、結衣はエプロンを曲がったままで着ていた。

「エプロンの紐の結び方が滅茶苦茶よ。あの男でも出来ることを出来ないのは史上最大級の恥だと思いなさい」

「だそうです。恥ずかしい人ですね」

「ヒッキーうっさいし！エプロンくらい着れるもん！」

そう言って紐を結びなおす結衣だったが、手元がおぼついていて上手くない。見かねた雪乃が呆れながら結衣を手招きする。

「はあ…もういいわ。私が結んであげるから、こっちに来て」

「…いいの？」

「早く」

「は、はい！」

困惑していた結衣を雪乃のイラついているような声が動かした。結衣が雪乃に背中を向ける体勢になり、雪乃が結衣のエプロンの紐を

素早く結びなおす。

「なんか……雪ノ下さんってお姉ちゃんみたいだね」

「私の妹がこんなに出来が悪いわけがないけれどね」

充分姉妹に見えますよ、という台詞を飲み込んで八幡は二人を見守っている。そんな彼に、エプロンをちゃんと着た結衣が遠慮がちに話しかけた。

「あ、あのさ、ヒツキー……家庭的な女の子ってどう思う？」

「別にどうとも思いませんが、少なくとも嫌悪感は抱きませんね」

「……そっか。よーし、やるぞー!!」

服の袖をまくり上げ、両腕を天へ突きあげて再び気合を入れた結衣は料理に取り掛かった。鬼気迫る勢いで迷いなく卵を割り、殻の入ったままの溶き卵を作り上げる。そして大きなボウルにダマが残った小麦粉、溶かしていないバター、伯方のソルト、大盤振る舞いのバラエツセンスと牛乳を入れた。

雪乃は顔を青ざめて額を押さえ、八幡は口を半開きにして硬直している。そんな衝撃を受けている二人の事などつゆ知らず、結衣はインスタントコーヒーを手にとった。そこで八幡が再起動を開始する。

「あの、由比ヶ浜さん。それはどうする気ですか？」

「これ？これは隠し味にいれるの。ほら、男子って甘い物苦手な人が多いじゃん？」

「カレーにりんごや蜂蜜入れるのと同じですね。でもね、さつき初心者が隠し味入れるなど言ったではありませんか」

「だいじょぶだいじょぶ！これはテレビでやってるの見たことあるからー！」

そうして結衣がインスタントコーヒーの容器を一振り。案の定、必

要以上に中身が出てしまった。

「あ、多すぎだ……砂糖入れないと……」

インスタントコーヒーの山の隣に、砂糖の山が構築される。それを異物が入った溶き卵が呑みこみ、形容しがたいクッキーの生地が完成した。既に失敗は確定しているようなものだが、結衣のやる気に押されて焼きあげるのを許してしまう。

結果、黒い何かが焼きあがった。

「……な、何で？」

結衣は愕然と黒い物体を見つめている。

「まあ、気を落とさないで下さい。世の中にはね、寿司を握ってこんな物体作り上げる人もいますから」

「比企谷君、シヨックを受けるのは分かるけど正気を保ちなさい。握っただけで焼き物が出来るわけがないじゃない」

そう咎める雪乃の心中も穏やかではなかった。まさかここまでミスを連発するとは、流石の彼女も予想していなかったのだから。

結衣は黒い物体を、用意されていた皿に盛りつけた。

「見た目はアレだけど、食べてみないと分からないよね！」

「そうね。という訳で比企谷君、味見をお願いするわ」

「コゲの味しかしません。非常に不味いです。作り直しなさい」

「せめて食べてから言つてよ!?!」

「こんな物、凡人どころか犬猫だってどんな味か見ただけで分かりますよ……」

珍しく辟易とした表情を浮かべる八幡だったが、先伸ばしにしてもしょうがないので、クッキー一枚分くらいの分量の黒い物体を手にとつて一気に食した。ぼりぼりと嫌な音を立てて味わい、ごくんと飲み込む。

「……ほらく言ったでしょ？こんな物、コゲの味しかな◎☆#□\$&%?・▼…」

「ヒツキー!?!」

「比企谷君!?!」

途中で呂律が回らなくなり、八幡は後ろに思い切り倒れた…。

クツキー作りを通して、彼らの距離は縮まった……の  
かもしれない

「うう……苦いよ……不味いよ……」

「なるべく噛まずに流し込んでしまったほうがいいわ。舌に触れないように気をつけて。劇薬みたいなものだから。……まさか、比企谷君に一瞬とはいえ感謝の念を抱いてしまうとは思わなかったわ」

「……私もいちご牛乳でこういう感謝されるとは思ってもみませんでしたよ」

泣きながら黒い物体をかじる結衣。泣いてはいないものの、少し瞳を潤ませながら黙々と食べる雪乃。どちらも八幡が買ってきた1.5リットルのいちご牛乳で黒い物体を必死に胃に流し込んでいた。ちなみに八幡はすでに復活し、自分に取り分けられた分の黒い物体はすでに食べ終わっていた。

「一口目は卒倒したのに、その後はよく普通に食べられたわね」

「あれはちよつと驚いただけです。あれより酷い物食べた事ありますから、あれくらいじゃ体調を崩しません。その後は活性の経絡を突いて毒を排しながら食べたので無事でした。クソ不味かったですけど」  
「どこが毒……だよね、うん。毒だし不味いね……」

結衣は力なく呟くと、黒い物体をかじり顔をしかめさせる。雪乃はいちご牛乳のお代わりを注ぎ、また食べ始める。それを黙って見ている八幡は頬杖をつきながら口を開く。

「そんな無理して食べなくてもいいのでは？そんなもの捨てても、もったいないおぼけだって黙りこくりますよ」

「……だって、自分で作ったものだし。ヒツキーと雪ノ下さんだけに任せるのは悪いし……」

「彼女のお願いを受けたのは私よ？責任くらいとるわ。それに何が問題かを把握しなければ正しい対処は出来ないのよ」

八幡のモノクルが一瞬光る。値踏みするように眺める八幡の視線をよそに、結衣と雪乃は黒い物体をようやく食べつくした。いちご牛乳を飲んで一息吐くと、雪乃が早速話し合いの第一声を発した。

「さて、どうすればより良くなるかを考えましょう」

「もう料理しなければいいのでは？」

「全否定された!？」

「それは最終手段よ、比企谷君」

「それで解決しちゃうんだっ!？」

「ではもっと簡単なものに変えてはどうでしょうか。目玉焼きとか」

「お菓子じゃないじゃん!？」

「卵を割る事すらままならないのよ？彼女が満足に作れる料理が存在するとは思えないわ」

「酷い!？」

「酷いのはあなたの料理の腕なのだけれど…」

「ではこういうのはどうでしょう。もう一人女性の協力者を確保して、由比ヶ浜さんがクッキーを渡したい人にさっきの物体よりも不味いクッキーを差し入れさせる。そしてその後、由比ヶ浜さんがクッキーをプレゼントすれば、多少はマシだと受け取られるんじゃないでしょうか」

「あたしただの最低な奴になるじゃん!？」

「比企谷君…それは受け取る人に同情を禁じ得ないわ。それに問題の根本的な解決にはなっていないわ」

頭を捻って考える八幡と雪乃だが、中々妙案が浮かばない。結衣はそんな二人の様子を見ていたたまれなくなり、縮こまって深く溜息を吐いた。

「やっぱりあたし、料理に向いてないのかな…。才能ってゆーの？そういうの無いし…」

「気にしないでください。凡人のあなたに才能なんて最初から微塵も期待していませんから」

二人の言葉……というよりも結衣の言葉を聞いた雪乃が、短く溜息を吐く。

「解決方法が分かったわ。努力あるのみよ」

「でしようねえ…」

雪乃の意見に八幡も肯定的な返事をする。色々提案してはいたが、八幡もこの問題を解決するには練習しかないと考えていたのだ。

「由比ヶ浜さん、あなたさつき才能がないって言ったわね？」

「え？あ、うん…」

「その認識を改めなさい。最低限の努力もしない人間には才能がある人間を羨む資格は無いわ。成功できない人間は、成功者が積み上げてきた努力を想像できないから成功しないのよ」

正論で窘められた結衣は言葉に詰まる。辛辣であったが正しい言いつ分をぶつけられて戸惑いの色を浮かべている。しかし、それを誤魔化すように作り笑いを浮かべた。

「で、でもさ……こういうの最近みんなやんないって言うし……あたしには合っていないんだよ、きつと…」

「才能があるとなかろうと、あなたに合つてようと合わなかろうと、関係ありません。奉仕部が受けた依頼はクッキー作りの手伝いです。あなたがちゃんとしたクッキーを作りたいなら付き合います。やる気が無いならもう辞めますが。いくら暇でも、あなたの気まぐれに付き合う義理はありません」



「…その周囲に合わせようとするのやめてくれるかしら。ひどく不愉快だわ。自分の不器用さ、無様さ、愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの?」

八幡の突き放すような声が、雪乃の嫌悪感が滲み出た声が、結衣に突き刺さる。結衣はスカートの端を握りしめ、俯いて何も言わなくなってしまうた。

「……」

瞳を潤ませている結衣は暫く黙り込む。そして……

「…か……かつこいい……」

「……は?」

「……んあ?」

雪乃の意外そうな声と八幡の間の抜けた声が重なった。結衣は体を震わせながら、二人に向けて熱視線を送る。

「な、何を言っているのかしら、この子は…? 話聞いてた? 私、これでも結構きついことを言ったつもりだったのだけれど…」

「そういう性癖の方でしたか…」

「ちよ、違うし! 確かに言葉は酷かったし、ぶつちやけ軽く引いたけどさ…ちゃんとした本音って感じがするんだ。ヒツキーも雪ノ下さんもひどいこと言い合ってるけど…ちゃんと話してる。あたしって人に合わせてばっかだったから、こういうの初めてで……」

結衣の表情が一変。決意を秘めた真剣な顔になる。

「ごめん、次はちゃんとやる」

謝ってから、結衣は真っ直ぐに雪乃の目を見て教えを乞う姿勢を見せた。予想外の事態に雪乃は声を失ってしまふ。どう返していいかわからないのか、その後も沈黙が続く。

「呆けてないで、実際にクッキーを作つてさしあげてはいかがですか？彼女に足りないのは経験もでしょうが、そもそも作り方もよく知らないようですから」

雪乃はハツとして八幡を見ると、小さく溜息を吐いて頷いた。

「一回お手本を見せるから、その通りに作つてみて」

「……うん！」

雪乃の手際の良さは結衣の比ではなかった。割った卵には異物が入らず、ふるわれた小麦粉にはダマも無い。材料はきっちり必要な分だけ使われ、砂糖と塩も間違えない。当たり前前の事がこんなに素晴らしいのかと、八幡は心の中でしみじみ感じていた。

そうして焼きあがったクッキーはいい匂いを漂わせていた。八幡と結衣は一つ手にとって食べると、八幡は驚きで目を大きく開き、結衣は舌鼓を打った。

「結構なお手前ですね……」

「美味しいよ、すごく美味しい！雪ノ下さん凄い！」

「ありがとう。でもこれはレシピに忠実に作っただけなの。だから由比ヶ浜さんにも作れると思うわ」

「う、うん……ほんとにできるかな？」

「大丈夫よ、私もサポートするから。ちゃんとレシピ通り作つてね」  
「……分かった！」

結衣の再挑戦が始まる……が、その前に八幡が結衣にあるものを差し出す。

「由比ヶ浜さん、これどうぞ」

「えっ？なにこれ？」

「雪ノ下さんのクッキーのレシピです。さっきの作業を見ながら作り  
ました。文章で分かりにくそうなところは絵に描いてありますので、  
活用して下さい」

結衣に手渡したのは一枚の紙。それにはさっき雪乃が作ったクッ  
キーのレシピが書き記されていた。

「ありがとヒツキー！よし、今度こそやるぞー!!」

気合十分な結衣。これだけの事をすれば安心だろうと二人は思っ  
ていたが、そうでもなかった。

「由比ヶ浜さん、そうじゃなくて粉をふるう時は円を描くようにする  
の。ほら、比企谷君の描いた絵を見て？円よ円、分かる？ちゃんと小  
学校で習った？」

「由比ヶ浜さん違います。バターはもう柔らかくなってますから。湯  
煎とかいいですから。なんであなたそういう要らない知識蓄えてる  
んですか」

「かき混ぜる時はボウルを押さえないと駄目よ。ボウルごと回転して  
るから、全然混ぜてないから。回すんじゃないで切るように動かす  
の」

「由比ヶ浜さんそれじゃないです。それじゃなくて隣の絵です。おか  
しいって分かるでしょ？道具違うのに無理矢理やろうとしないで下  
さい」

「違うの、違うのよ。隠し味はいいの。桃缶とかは今度にしましょう。  
大体それ一回戻してたわよね？どうして持ってきたの？馬鹿なの？」  
「由比ヶ浜さん、エリートだってキレルんですよ？」

四苦八苦、満身創痍、艱難辛苦を同時に味わった雪乃と八幡だったが、どうにか出来た生地をオーブンに入れる事に成功。そうして焼きあがったクッキーはさつきとよく似た匂いを漂わせている。しかし一口食べてみると、結衣は残念そうに肩を落とした。

「雪ノ下さんのクッキーとどこか違う…」

「……どう教えれば伝わるのかしら？」

同じくクッキーを食べた雪乃も頭を悩ませる。結衣の成長ぶりは立派なものだが、どうやらそれでも納得がいていないらしい。

「生ゴミがクッキーに昇華したんですから、十分だと思えますがね」

「生ゴミってなんだし！」

「ああすいません。焼いたんですから生ではありませんね。ただのゴミでした」

「結局ゴミじゃん!!」

「大体、全く同じレベルになるまで凝る必要無いでしょう。そこまでやると、今日だけじゃ時間足りませんよ」

「む、むう……」

八幡の言う事も尤もであるとは分かっているのか、結衣は口をつぐんだ。

「どういった理由でクッキーを渡したいのかは存じませんが、食べれるレベルになったのならそれで十分でしょう。あなた方にとっては妥協に近いのかもしれないがね、相手はそんな事知りませんから。それこそ相手が男性なら、手作りというだけでも満足してくれませよ」

「……どういう事？」

「男性というのはね、女性の手作りっていうだけでときめいてしまう生き物なんですよ。クッキーが美味しいかなんておまけみたいなも

んです。アイドルグループの投票権が目当てで、使い道の無い大量のCD買ってしまふのと同じです。おまけ付きのお菓子なんて、実質おまけ目当てですから。入ってるラムネ菓子とかどうでもいいって思ってる人多いですから」

「例えが長い上に気持ち悪くて吐き気がするわ。何が言いたいの？」

「…このクッキーは紛れもない由比ヶ浜さんの努力の結晶です。雪ノ下さんのクッキーより味が劣っていたとしても、それは変わりません。だから自信をもって渡しなさい。これは私の手作りです、つてね。それが伝われば、男心なんて簡単に揺れますよ」

「…それって…」

結衣がもじもじしながら八幡を見つめる。

「ヒツキーも、揺れんの？」

「揺れません、エリートですから」

がつくりと結衣は肩を落とす。雪乃もどこか呆れたように八幡を見ていた。

「…それで、どうするの？まだやるつもりなら、もう一回教えるけれど…」

「…もういいや。あとは自分で色々やってみるから！ありがとね、雪ノ下さん！ヒツキー！また明日ね！」

結衣は何か吹っ切れた様に清々しい笑顔を浮かべ、扉を開けて帰っていった。

「…本当に良かったのかしら」

「良くはありませんね。あの人、エプロン付けたままで帰りましたよ」

「…どうして教えないのよ!?!ちよっと待って、由比ヶ浜さんっ!!」

雪乃が自分の付けていたエプロンを素早く外し、慌てて結衣の後を追いかけていった。八幡は彼女が出ていった後、一人で黙々と後片付けを始めたのであった。

~~~~~

「奉仕部はあくまで手助けをするだけよ。願いが叶うかどうかはその人次第なの。飢えた人に魚を与えるか、魚の獲り方を教えるかの違いよ」

「自己変革を促すというのはそういう事でしたか。しかしそれだと、奉仕部の活動を勘違いして相談に来る依頼者も来そうですね。平塚先生に言われて来た人は特に」

「…実際に来たのよ。由比ヶ浜さんがそうだったのだし。比企谷君が席を外していた時だから知らなかっただろうけど」

「大変ですねえ、あなたも。ああいうだらしない大人が部活の顧問で」

「おあいにく様。あなた程度の人間に心配されるほど柔では無いわ」

「建前を本気で受け取るとは、純粋なお方だ」

結衣の依頼が終わり数日後。八幡は雪乃に奉仕部の活動理念を詳しく教えてもらっていた。

「……由比ヶ浜さんといえば、本当にあれで良かったのかしら」「何がです?」

「私は自分を高められるなら、限界まで挑戦するべきだと思うの。それが最終的には由比ヶ浜さんのためになるから」

「正論ですね。しかし所詮、論理が正しいにすぎない」

「……どういう意味？」

「論理が正しくても、それが当てはまらない人間はいるということですよ。例えば由比ヶ浜さんのケースなら、由比ヶ浜さんのクッキーのレベルを最高まで上げている最中に、その渡したい相手が引越してしまい、クッキーが渡せなくなってしまった。つまり依頼は失敗してしまっただけ。という具合でしょうか」

「それは詭弁だわ」

「なら絶対に無いと言い切れますか？我々はクッキーを渡す相手の事を何も知らないのに」

「……」

雪乃は反論できずに黙り込んでしまった。しかし、雪乃なりに思うところがあったようで、難しい顔で考え込んでいる。

「簡潔に述べれば、あなたは自分のやり方を人に押し付けているんですよ。ただ正しいから、正論だからという理由だけで。あなたは人の立場になって解決法を考えていない。そんな人間が奉仕？手助け？出来るわけないでしょう」

「……世界が変えられないと言ったのは、そのせい？」

「ええ、まあ……一つの要因と私は考えています」

「……そう。だとしても、私は今のやり方を変える気は無いわ。できないからって逃げてしまえば、この間違った社会は永遠に変わらないもの」

「……あなたらしい、実にあなたらしい崇高で愚直な答えですね。ま、その社会に殺されないように頑張ってください」

八幡は携帯を取り出して、いつものようにポチポチいじり始める。雪乃は何か言いたそうな顔であったが、八幡にとりあう気が無いとみて大人しく本を読み始める。

と、ここで奉仕部部室の扉がノックされた。

「やつはろー!」

頭の悪……斬新な挨拶と共に、八幡が来てからの奉仕部利用者第一号が姿を現した。

「……何か?」

「え、なに?あんまり歓迎されてない……?ひよつとして雪ノ下さん、あたしの事嫌い?」

「嫌いではないけれど……ちよつと苦手、かしら」

「それ女子言葉では嫌いと同じだからねっ!」

雪乃の反応が思ったより冷たく、動揺した結衣。しかし心底嫌われていないと分かると、いつもの調子を取り戻した。

「で、何か用かしら」

「や、あたし最近料理にはまってるじゃない?」

「……じゃない?と言われても、初耳なのだけども……」

「それでね?こないだのお礼ってことでクッキー作ってきたの!よければどうかなーって」

雪乃の血の気が引き、八幡が携帯のボタンを打ち間違える。恐らく今の言葉で二人が連想したものは全く同じものだろう。

「いえ、あの……今は食欲わかないから結構よ……お気持ちだけ頂いておくわ」

そんな雪乃のお断りのメッセージを無視して、結衣は鞆の中から可愛くラッピングされた黒い物体を取り出した。

「自分で才能無いか言っちゃったけどさ、やってみると楽しいよね。今度はお弁当とか作ってみよーとか思ってるんだ!あ、でさ、ゆきの



んお昼一緒に食べようよ。いつもどこで食べてるの？」

「部室で一人で食べるのが好きだからそういうのは遠慮してもらえないかしら…。それとゆきのんって呼ぶのはやめて」

「うっそ寂しくない？ならこれから一緒に食べようね、ゆきのん！」

「…ねえ、やめてって言ったんだけど、両方とも。私の話聞いている？」

「あ、それで。これからあたし、この部活のお手伝いするから！や、全然気にしないで！あたし放課後暇だし、この前のお礼だから！」

「…話、聞いている？」

結衣のマシニングントークにタジタジになった雪乃は、視線で八幡に助けを求める。当然、八幡の目は携帯の液晶に釘付けになっているのでそれに応えることは無かった。八幡は空気を呼んで退室しようと、静かに立って扉に手を掛けた。

「あ、待ってヒッキー！」

呼ばれて振り向いた八幡は、結衣から投げられたラッピングされた黒い物体を受け取った。

「いちおーお礼の気持ち？かな？手伝ってくれてありがとね」

八幡は無言で会釈をすると、部室を出て自転車置き場まで移動した。鞆を自転車の籠へ置き、ラッピングを解いて黒いハート型の物体を一つ口へ運んだ。苦い味を噛みしめている八幡の頭には、ある情景が浮かんでいた。

“……だって、自分で作ったものだし。ヒッキーと雪ノ下さんだけに任せるのは悪いし…”

“彼女のお願いを受けたのは私よ？責任くらいとるわ。それに何が問題かを把握しなければ正しい対処は出来ないのよ”

「(……あの時、彼女達の頭には、あの黒い物体を捨てるという考えは  
一かけらも無かった)」

黒い物体を飲み込むと、八幡は僅かにほくそ笑んだ。

「(……全く、面白い方々だ)」

八幡は残りを鞆に詰め込むと、自宅へ向けて自転車を漕ぎだした  
…。

「ね、ねえお兄ちゃん？この炭みたいなもの、何？」  
「私が部活のお礼で貰ったクッキーです」

「……八幡、いじめられてるならそう言って。私が斬りに行くから」  
「いえ、いじめられてませんから。さつきも言ったでしょう？これはお礼なんです。しかも手作りですよ？凄いでしょ？」

「いや、こんな禍々しい物体は自然物じゃないのは確かだけどさあ……」  
「正直、お礼に渡すのにこれは無いと思う」

「何を仰います。これでも前に比べて立派に成長してるんですよ？ほら、ちゃんとハート型って分かる」

「形!?味はどうなの!?見た目が悪くて味が良いならいいけど、見た目悪くて味も悪いなんて最低だよ!？」

「味だって良くなってますよ。活性の経絡を突かずに済みましたから」

「経絡突いたの!？」

「……それ、食べ物？」

この後、クッキーは比企谷兄妹と信女が美味しく頂きました。

後門は崩れ去り、前門から虎と狼が迫りくる

比企谷八幡は普段、ベストプレイスと自分で呼んでいる場所で昼食を食べている。特別棟の一階。保健室横、購買の斜め後ろの位置だ。しかし、残念ながら本日は雨。ベストプレイスは使えないために八幡は珍しく教室で昼食を食べている……筈だったのだが。

「まさか飲み物を買って忘れるとは……。この前の毒を排しきれていなかったのでしょうか」

コンビニでパンを買ったはいいものの、肝心の飲み物を買っていなかったのだ。仕方なく購買へ行き、自販機の前で飲み物を選ぶ。

「……今日はMAXコーヒー以外のものにしましょうかね。いやでも、やっぱり……」

何を飲もうか自販機の前で考えていると、横からナイフのように鋭い声突き刺さってきた。

「何をしているの比企谷君。基本的に不審な存在のあなたに言うのもなんだけれど、そうやって悶えているとまさに不審者よ」

「……雪ノ下さん？これは珍しい。ちなみに私は悶えているのではなく悩んでいます」

腕組みをした雪ノ下雪乃がそこに立っていた。周りの男子は遠巻きに雪乃に見とれ、八幡には嫉妬や憎悪の視線を送る。それを全て無視して二人は会話を始めた。

「あなたも飲み物買いに来たんですか？」

「いいえ。……そういえば、あなたと由比ヶ浜さんは可哀想な事に同じクラスだったわね」

「そうですね。エリートと同じクラスなんて、凡人にとっては比較され続けてさぞ辛いでしょうね」

「…その可能性もあながち否定できないわね…。それよりも、由比ヶ浜さんがどこにいるのか知らないかしら？」

「さあ？教室にいたと思いますけど。どうかしたんですか？」

「部室で一緒にお昼を食べようと誘われたのだけれど、一向に来ないのよ」

「……忘れてるのでは？」

「……まさか」

……嫌な沈黙が流れる。

「……クラス、見に行ってみますか？」

「どうしてあなたと見に行かなければならないのかしら」

「どうせ飲み物買ったら戻る予定ですし、わざわざ別に行くことはないでしょう。案内しますよ」

「…まあ、確かにそうですね。仕方がないから許してあげるわ。身に余る光栄に感謝しなさい」

「したり顔かましてないで早くして下さい。私はコーヒー買いましたからもうここに用事は無いんですから」

「……」

先に行こうとした八幡を、雪乃は早足で追い越した。負けず嫌いの彼女の行動に呆れて頭を掻きながらも、八幡は急いでその後を追った…。

~~~~~

『あの、あたしお昼ちよつといくところあるから…』

『あ、そーなん？じゃさ、帰りにレモンティー買ってきてくんない？あーし、今日飲みもん買ってくるの忘れててさー』

『えと…ほら、あたし戻ってくるの五限になるというか、お昼まるまるいないからそれはちよつとどうだろー、みたいな感じで…』

『は？え、ちよ、なにになに？ユイさー、こないだもおんなじような事言って放課後ばつくれたよね？なんかさ、最近付き合い悪くない？』  
『やー、それはなんて言うかやむにやまれぬというか、私事で恐縮です  
というか…』

『それじゃ分かんないし。言いたい事あんならハッキリ言いなよ。友達でしょ？そーそういうさー、隠し事？とかよくなくない？』

『ごめん…』

『だーからー、ごめんじゃなくて。なんか言いたい事あんでしょ？』

『……』

『……』

教室の外の廊下で二人が目当たりしたのは、金髪の女子、三浦優美子に結衣がいびられているとしか思えない光景であった。結衣達の周りの人間は気まずそうに視線を落とし、教室の中も静まり返っている。

「人との約束すっぱかして、あの子は…」

「まあ、彼女は我々と違って友達付き合いとかありますから…」

「……あれが、友達付き合い？」

「……どうでしょうねエ？」

顔を見合わせ、馬鹿にしたように笑う。

『あんさー、ユイのために言うけど、そういうはつきりしない態度って

結構イラツとくんだよね」

『……ごめん』

『はっ、またそれ?』

鼻で笑われ、結衣は涙目で縮こまる。それを目の当たりにした二人は、どちらともなく教室に足を踏み入れた。

「ね、ユイさー、あんたさつきから謝ってばっかだけど——」

「お取込み中失礼します。由比ヶ浜さん、雪ノ下さんが迎えに来てますが」

「迎えに来たわけではないのだけれど……それより由比ヶ浜さん、謝る相手が違うんじゃないかしら」

優美子の話をぶった切って、八幡と雪乃が割り込んできた。学年一位と二位の突然の登場に、クラス全員の視線が二人に集まる。

「あなた、自分から誘っておいて待ち合わせ場所に来ないのは人としてどうかと思うのだけれど。連絡の一本でも入れるのが筋ではないの? そのせいで会いたくもない男と鉢合わせしてしまったわ」

「私も面倒くさい凡人と会ってしまいました。この責任はどう取られるおつもりですか?」

「ご、ごめん……でもあたし、ゆきのんの携帯知らないし……」

「……そう? そうだったかしら。なら、一概にあなたが悪いともいえないわね。比企谷君、由比ヶ浜さんに全ての責任をなすりつけるなんて恥を知りなさい」

「手の平を返すという言葉、知ってます? どうせ知りませんよね? 今まさにそれをやってるんですよ?」

教室の空気を読まずに展開される言い争い。結衣は奉仕部で見ている二人のやり取りを見て余裕が生まれたのか、表情が柔らかくなった。

「ちよ、ちよつと！あーし達まだ話終わってないんだけどっ！」

我に返った優美子が、机を強く叩いて叫び出した。

「何かしら？あなたと話す時間も惜しいのだけれど」

「は、はあ？いきなり出てきて何言ってるの？今、あーしがユイと話してただけだ」

「話す？がなりたてるの間違いじゃなくて？あれが会話のつもりだったのかしら。ヒステリーを起こして一方的に自分の意見を押し付けているようにしか見えなかったけれど」

「なっ!？」

「駄目ですよ由比ヶ浜さん。彼女は私と違って凡人なので、言いたい事はちゃんとやらないと。友達だからって一挙手一投足を一々制限するな、あんた何様？馬鹿、キモい、死ねば？って」

「……!？」

「ええっ!？そんな事思っていないから！」

「気づかなくてごめんなさいね。あなた達の生態系に詳しくないものだから、類人猿の威嚇と同じものにカテゴライズしてしまったわ」

「ああ、すいません。もしやその彼女はこの程度の会話も出来ない人間でしたか。それが周りにはれないように黙っていたわけですね？ばらしてしまって申し訳ありません」

「っっ!!」

雪乃の毒舌、八幡の結衣に対する話と見せかけての口撃を立て続けに受け、優美子は怒りのままに二人を睨みつける。

「お山の大将気取りで虚勢を張るのは結構だけれど、それは自分の縄張りの中だけにしなさい。あなたのメイク同様、すぐに剥がれるわよ」

「……はっ、何言ってるの？意味分かんないし」



「なら水でもかけて理解させてさしあげましょうか？簡単に落ちますよ、両方。今は水が無いのでこのコーヒードでもいかがでしょう。泥水と揶揄される事もありますからね」

「ま、まあまあ落ち着いて、雪ノ下さんと…ヒ、ヒキタニ君？優美子もそんなに興奮しないで」

優美子の周りにいた金髪の男子生徒…葉山隼人が場を取り持った。優美子はイライラしたように椅子に座りなおして携帯をいじりだす。他の生徒がぞろぞろと外に出ていく中、八幡は自分の席に戻つてのんきにパンをかじる。それを見た雪乃は溜息を吐き、そつと結衣に耳打ちしてから教室を出た。

「先に行くわね」

「…あたしは…」

「…好きにすればいいわ」

「…うん」

結衣はパンを食べている八幡の後ろ姿を見てにっこり笑う。そして意を決して優美子に話しかけた。

「あの、ごめんね。あたしき、人に合わせないと不安っていうか、つい空気読んじやうっていうか…そのせいでイライラさせちゃうこと、あった、よね…。や、昔からこうでき、周りの空気にあわせちゃうっていうかさ…」

「何言いたいのか分かんないんだけど？」

「あはは…だよね…。や、あたしもよく分かんないんだけどさ…：ヒッキーとかゆきのん見てて思ったんだ。ひどい言葉でも、本音で言い合えるのって、楽しそうで良いなって…。それ見てたら、今まで必死になって人に合わせようとしたの、間違ってるみたいで…。ヒッキーとか何考えてるかよく分かんないけど、今だって平気な顔してお昼食べてるし…」

優美子が僅かに目を向けると、パンを食べながらこつちを見ていた八幡と目が合い、慌てて携帯へ視線を戻した。

「優美子の事が嫌だっというんじゃないんだ。ただ、あたしももう少し適当な感じでいいのかなーってだけ…。だから、その、これからも仲良くできるかな?」

「……ふーん。ま、いいんじゃないの」

「……ゴメン。ありがとう」

優美子が携帯をたたんだ音と共に、二人の間にできた問題も解決した。結衣は自分の昼食を持って教室を出る……。前に、八幡の机へ寄った。

「ありがとう、ヒツキー。心配してくれて」

「…怖い雪ノ下さんが待つてますよ。早く行きなさい」

結衣は笑顔を浮かべると、雪乃が待つているであろう部室へと急ぐ。パンを食べ終えた八幡はコーヒーに口をつけ、結衣が走り去った方向を眺めていた…。

(剣豪) 将軍かよオオオオオオオ!

結衣と優美子のいざこざが解決してから数日後。八幡が部室へ赴くと、部室の扉の前で雪乃と結衣が固まっていた。結衣の手にはどこから持ってきたのかモップが握られている。扉が少しだけ開いているところを見ると、どうやら中の様子を窺っているようだった。

「こんにちは」

「ひゃっ!?!」

八幡が声をかけると、短く悲鳴を上げて二人の体が跳ねた。八幡に向けて非難の視線が集中する。

「ヒ、ヒツキーか…びっくりしたあ…」

「いきなり声をかけないでもらえるかしら?」

「それはすいません。で、何をしてらしたんですか?」

「あ、そうそう! 部室に不審人物がいんの!」

「……不審人物?」

八幡が二人を押しつけ、少し開いた扉の隙間から目を細めて中を覗く。中には眼鏡をかけた小太りの男が立っていた。夏も近いのに暑苦しいコートを羽織り、手には指ぬきグローブをはめている。

「……これは確かに、凡人には荷が重い状況ですね。ここはエリートに任せて、ここで待っていて下さい」

そう言うのと八幡は二人を下がらせ、持ってきた鞆から黒光りする物体を抜いた。それを見た二人は明らかに動揺する。

「…え? あの、ヒツキー?」

「いいですか? 私が、良い、と言うまでは絶対に中に入ってはいけません」

んよ」

「あの、比企谷君？」

「一分経っても何も音沙汰が無ければ、すぐに職員室に行つて警察に連絡して下さい。決して自分たちで捕らえようとはしないように」

「いや、あのさ…」

「その、手に持っているものは…」

八幡は空いている方の手で扉を勢いよく開き、部室へと突入した。

「ムツ!?…:ククク、まさかこんなところで出会うと…:ヒイツ!？」

「大人しく武器を捨て、両手を上げて投降しなさい。何の目的でこの部室に侵入してきたんですか?三つ数えるうちに言わないと撃ちますよ。はい、いち」

ズガン!　ズガン!　ズガン!　ズガン!　ズガン!!

「ギヤアアアアア!!？」

けたたましい発砲音と悲鳴が上がり、呆然と立ち尽くす雪乃と結衣。やがて扉が開き、八幡がひよっこり顔を出した。

「不審者は鎮圧しました。もう入ってきて大丈夫ですよ」

「…だ、だつてさ、ゆきのん」

「…:え、ええ」

恐る恐るの中に入ると、中にいた不審者がガタガタ震えながら正座させられていた。八幡は不審者の目の前に椅子を置いて座り、尋問の構えにはいる。

「さて、雪ノ下さんと由比ヶ浜さん、どちらの私物が目当てですか?」「ご、誤解だ我が相棒よ!!我がそんな、女子の所有している物品を漁る

畜生に見えるのか!？」

「見えるからこうして捕まえたんですよ畜生さん。正直に言えば私からは警察に連絡しないであげます。あと相棒って何ですか?」

「くっ、見下げ果てたぞ、比企谷八幡!!相棒であるこの材木座義輝の顔を忘れたとは…」

「不審者通報1、1、0…つと」

「待って!お願いだから待って!!」

携帯を取り出した八幡に必死で食いつく不審者、材木座義輝。一歩引いた距離で警戒しながら、雪乃と結衣が二人の顔を見比べた。

「比企谷君…あちらはあなたの事を知っているようだけれど…?」

「そうだ。貴様も覚えているだろう、あの地獄のような時間を共に駆け抜けた日々を…」

「地獄が好きなら片道切符をプレゼントしますよ。途中で豚箱に宿泊、赤いランプがアクセントのお洒落なモノクロカーの送迎付きです。今呼びますから両手をくくって待っていてください」

「いや待って!!そういうんじゃないから!我マジで泥棒とかやってないから!!」

「ヒツキー、話が進まないからちゃんと説明してよ…」

結衣に促され、八幡は携帯をしまうと義輝を立ち上がらせて紹介に入る。

「前に体育の時間でペアを組んだ、材木座義輝君です」

「左様、我こそは剣豪將軍・材木座義輝だっ!!」

大袈裟な見得を切り、不敵な笑みを浮かべた義輝を三人が冷ややかに眺める。義輝は軽く咳払いをし、コートの襟を正すと八幡の方へ向き直った。

「……時に八幡よ、ここが奉仕部で間違いないな？」  
「ええ、ここが奉仕部よ」

義輝の問いに八幡ではなく雪乃が答える。すると義輝は一瞬雪乃の顔を見て、また八幡の方へ視線を戻した。

「……そうか。では平塚教諭に助言頂いた通りならば、お主には私の願いを叶える義務があるのだな？幾百の時を越えてもなお主従の関係にあるとは……これも八幡大菩薩の導きか……」

「奉仕部にはあなたのお願いを叶える義務は無いわ。あくまでもお手伝いだけ。叶うかどうかは本人次第よ」

「……ふ、ふむ。ならば手を貸してもらおうか、八幡よ。思えば我とお主は対等な関係、かつてのように天下を再び握らんとしようではないか」

「凡人とエリートを同列に扱わないで下さい。それに天下を取るなら、私は真つ先にあなたを斬りますけどね」

「ほう……それは宣戦布告と受け取ってよいのだな？まあ確かに、お主の最大の敵になり得るのは我以外に居らぬからな！ムハハハ！」

「いえ、あなたみたいな手下は邪魔なのでいりませんから」

「フツ……その大口、昔から変わらさか……世は大きく変わったが、貴様は変わっていない様で嬉しいぞ……」

懐かしむように外を眺める義輝。会話が途切れたところで、雪乃が八幡の袖を引っ張って耳打ちをする。

「ねえ……なんなの？あの剣豪將軍って」

「あれは中二病ってやつですね。ご存知ですか？」

「……いいえ、聞いたことが無いわ」

「あたしもしらなーい」

「でしょうね。まあ病と付いていますが、本当の病気ではありませんから。心の病とも言えますか、自分にありもしない力が宿っている

と勘違いしたり、実在しない人物や神様の生まれ変わりだと突然言い出したり、無意味に眼帯付けたり、無意味に包帯巻いたり、無意味に意味深に聞こえる事言ったりする、思春期にありがちな病気ですよ」「……つまり、自分でそういう設定を作り出して、それに基づいてお芝居をしているのね」

「概ねそれでいいと思いますよ。ちなみに剣豪將軍というのは、室町幕府の第十三代征夷大將軍である足利義輝を称した呼び名であり、彼の設定も足利義輝に基づいてアレンジを加えたものだと思われます」「あなたを仲間とみなしているのは何故？」

「さあ……このモノクルのせいじゃないですか？中二病患者の中には、変なアイテムを身に着けているケースもあるようですから。それか私の名前から、八幡大菩薩を連想したのではないのでしょうか。八幡神は武家の守護神として多くの武将に崇敬されていましたから。特に足利義輝は、武術においては歴代の征夷大將軍の中でも群を抜いていましたからね」

八幡が説明を終えると、雪乃が目を丸くして驚いていた。結衣に至っては、若干の尊敬の意を込めて八幡を見つめている。

「随分詳しいのね」

「エリートですから」

「…変なアイテムってさ、モノクルもそうだけど、それもじゃないの？」

結衣が指差したのは、先程から八幡が握ったままの拳銃であった。

「これはエアソフトガンです。本物に近い音が出せるようにちよこつと改造していますが。室町時代には存在してません」

「うわ〜オタクっぽい…」

「オタクではありません、スペシャリスト……いえ、エリートです」

「何故言い直したし……それって危くない？学校に持ってきていい

の？」

「今は空砲ですから怪我の心配はありません。持ってきていいものはありませんが……こうして不審者を確保できたのですから、今回は目をつぶって頂けますか？」

「ま、まあいいけどさ……それでどうするの……アレ」

結衣はゴミを見るような目で義輝を見る。雪乃は小さく溜息を吐くと、迷いなく義輝の眼前へと歩を進めた。目の前に立つ雪乃の迫力に、義輝は息をのむ。

「大体分かったわ。あなたの依頼はその中二病を治す事……でいいのかしら？」

「……八幡よ、余は汝との契約の下、朕の願いを——」

「話しているのは私よ。人と話す時はその人の方を向きなさい。あとその喋り方も止めて」

「……モ、モハハハ。これはしたり……」

「止めて、と言っただけけれど」

「あ、はい……」

尋問の担当者が八幡から雪乃に代わり、義輝はしどろもどろと依頼内容を打ち明けた。

材木座義輝が奉仕部へ来た目的は、雪乃と結衣の私物ではなく、中二病の治療でもなく、自身が書いた小説を呼んで感想を聞かせて欲しいというものだった。彼は学校に小説を読んで感想をくれるような友達はおらず、かといってインターネットの小説投稿サイトで感想を貰うのは、酷評されて死ぬから嫌だということらしい。

取りあえずその場は解散となり、各々家で読んできてから、翌日に感想を聞かせるという事で話がついた。

~~~~~



「……小町、さつきから八幡は何を見てるの?」

「なんでも、部活の依頼で小説を読むように頼まれたみたいですよ」

「……凄くつまらなそうな顔をしてる」

「そうですか? 小町にはいつもと同じ仏頂面に見えますけど……」

「目が現在進行形で腐ってるから分かる」

「元から腐ってるのに更に腐るなんて……どれだけつまらないんでしょうね?」

「……見てみる?」

「……そうですね、ちよつと気になりますし。……お兄ちゃん!! それ小町達にも見せて〜!」

~~~~~

翌日、八幡は目の下に薄く隈を作って学校に来ていた。小町に軽く気味悪がられた事が少しショックであったが、それ以外は特に問題は無く放課後を迎える。

「ヒツキー元気ないね。どしたー?」

「……昨日ほど苦痛に満ちた夜を過ごした事はありません。面白くない物を読むのって辛いですね……」

「……だ、だよねー。私も超辛かったし超眠いし?」

「……まさか読んでないんですか?」

「……は、早く部室行こうよ! ゆきのんきつともう来てるし!」

「由比ヶ浜さん読んでないんですか? ねえ、読んでないんですか?」

早足で先を急ぐ結衣を、八幡は寝不足のイライラのせいか険しい顔をして追いかける。そうして部室に到着すると、中にはうつらうつら

と舟を漕いでいた雪乃が座っていた。雪乃は部室に入ってきた八幡の顔を見ると、目をぱつちりと開かせた。

「…驚いた。あなたの顔を見ると一発で目が覚めるわね」

「お役に立てて光栄です。しかし、その様子だと相当苦勞されたようですね」

「ええ…久しぶりに徹夜までしてしまったわ。この手のものはあまり読んだことないし、あまり好きになれそうにないわ」

「あー、あたしも無理無理」

「別に無理して好きにならなくてもいいんですけどね。あと由比ヶ浜さん、そういう台詞は読んでから言いなさい」

「……はい…」

結衣が小説のページをパラパラめくりだしたところで、義輝が部室の扉をノックして入ってきた。

「頼もうー！」

やけに自信満々な義輝が腕組みをしながら椅子にとっかかりと座り、対面に雪乃、その両隣に八幡と結衣が座る。

「さて、それでは感想を聞かせてもらおうとするか！」

「ごめんなさい、私はこういうのよく分からないのだけれど…」

「構わぬ。凡俗の意見も聞きたいところだったのにな」

「そう。それならハッキリ言わせてもらうけれど…想像を絶するほどにつまらなかったわ。読み進めるのが苦しくて仕方がないレベルよ」  
「げふうっ!!」

一刀両断。慈悲も容赦もない雪乃の評価に義輝は大ダメージを受ける。それでも何とか持ち直し、どうにか言葉を繋げた。

「……さ、参考までに、どの辺りがつまらなかつたのかご教示願えるかな……?」

「まず、文法が滅茶苦茶ね。なぜいつも倒置法なのかしら? てにをは、の使い方を小学校で習わなかつたの?」

「ぬぐう……それは平易な文体でより読者に親しみを……」

「それにルビだけど、誤用が多いわ。幻紅刃閃と書いてなんでブラツダイナイトメアスラツシャーになるの? ナイトメアはどこから来たの?」

「げふっ! うう……違うのだ……最近の異能バトルではルビの振り方に特徴を……」

「それはあなたのただの自己満足でしょう? それにここでヒロインが服を脱いだのは何故? 必然性が皆無で白けるわ」

「ひぎいっ!! し、しかし、そういう要素が無いと……」

「それと……完結していない物語を人に読ませないでくれるかしら。文才の前に常識を身につけた方が良いわね」

「ぴゃあっ!!」

椅子から転げ落ちて倒れ伏した義輝を見て、精神攻撃が物理にも作用しているような錯覚に八幡は襲われた。一通り言い終わつた雪乃は、隣で小説を読んでいるうちに睡魔に体に乗っ取られた結衣に順番を回す。

「じゃあ、次は由比ヶ浜さんかしら?」

「……え? えーつと……む、難しい漢字いっぱい知ってるね!」

「ひでぶっ!!」

図らずも、とどめを刺してしまった結衣。義輝は一抹の希望を託していたものの、それはいとも簡単に壊されてしまった。

「じゃ、じゃあ最後はヒツキーどうぞー!」

「……」

八幡は無言で鞆の中から紙束を取り出した。義輝の小説に別の紙を付け足しているようだ。

「……は、八幡。お主なら分かって……」

「私が今まで見てきた作品の中で、一番くだらない作品でした」

「ごばあっ!!」

「まずヒロインが簡単に落ちすぎです。物語が中盤にすら差し掛かっていない段階でキスをせがむとか、どんなビッチですか」

「ぐほっ!」

「あと主人公ですが、どうして急に目覚めた力を長年慣れ親しんでいたように自由に操れてるんですか?撃った気弾が百発百中とかどう考えてもおかしいでしょう?」

「ぴぎゃあー!」

「そもそもこれ、学園モノにする必要あるんですか?」

「ぶふっ……ぶひ、ぶひひ……」

義輝は床をのたうち回り、壁に激突して動きを止めた。そこで更に、八幡が追撃を仕掛けた。

「あと、私の妹と未来の嫁にも読んでもらったのですが、その二人からも感想を聞いておきました」

「……ま……待て……これ以上聞いたら、我、死んじゃう……」

「えーと、妹からは……『終わってないって事は、まだ続きがあるんですよ!書かなくていいですよ!全然気にならないし、収集つかなくなるのは目に見えてますから!新しいのはこれより良くなっているといいですね!』」

「う……うぐあああ……」

「信女さんからは、『これを見た八幡の目が腐り落ちたらどうするの。またこんな駄作を読ませたら、あなたの○○斬り落とすから』だそうです」

「……………」

義輝は最早何も言う事が出来ず、ただただ床に這いつくばりながら荒い呼吸を繰り返していた。そして暫く時間が経つと、手足をプルプル震わせながら立ち上がった。

「……また、読んでくれるか？」

先程とはうって変わり、しつかりとした口調で義輝は訊いた。その瞳は八幡と、苦手な筈の雪乃の顔をしっかりと見据えている。

「まだやるんですか？あれほど酷評されたというのに」  
「無論だ」

即答した義輝を、八幡はモノクル越しに観察する。

「確かに酷評された。もう死んじやおっかなーどうせ生きててもモテないし友達いないし、もう我以外みんな死ね、と思った。……だが、それでも嬉しかったのだ。自分が好きで書いたものを誰かに読んでもらえて、感想を貰うというのは良いものだ。この想いに何と名前を付ければいいのか判然とせぬのだが……読んでもらえると、やっぱり嬉しいよ」

少し照れくさそうに頬を掻きながら、義輝は笑う。それは剣豪将軍としての笑顔ではなく、ルーキー作家・材木座義輝としての笑顔であった。

「成長の兆しが見えなかったら、その場で破り捨てますからね。それでもよろしいですか？」

「フツ……望むところよ。新作が書けたら持つてくる。世話になった」

後ろ姿で片手を上げ、義輝は悠々と奉仕部を去っていった。

……と思ったら、いそいそと戻ってきた。

「……あの、やっぱり破るのは無しでお願いします…」

その場がやるせない雰囲気になったのは言うまでもないだろう…。

数日後、八幡は静に呼び出しを受けていた。その理由は…

「なあ、比企谷。材木座の依頼があった日に、校内で銃声があったというのは知っているな?」

「知っているも何も、出所は私ですから」

「……あのな?君も男の子だから、そういうのに興味があるのは理解できる。だがな…校内で使うなっ!!部室で使えば私の監督責任にもなるんだぞ!?!それを理解しているのか!?!」

「理解しています。しかし、事態は急を要したものでしたから…」

「言い訳するな!!まったく君という奴は…」

「申し訳ありませんでした」

「……まあいい。次からは気をつけるようにな」

「はい。……では、私からも平塚先生に言いたい事があるのですが」

「……え? な、なんだ?」

「材木座君は平塚先生の紹介で奉仕部にやってきました。それは間違いありませんね?」

「あ、ああ」

「では何故、来客がある事を奉仕部の誰かに伝えて下さらなかったのでしょうか。部室には材木座君しかいませんでしたが、彼は鍵を持っていませんでしたから、恐らく先生が連れてきたんですよね?」

「そう…だが…」

「連れて来たんなら、普通は誰かが来るまで一緒に待っているべきではなかったんですか? あなた顧問でしょう? いくらなんでも、部外者一人置いていくのはどうかと思うのですが」

「い、いやあ……私も色々忙しくてなあ…」

「私か雪ノ下さんか由比ヶ浜さん、誰か一人に伝える事すら出来ない程、貴女忙しいんですか? ……本当は材木座君の相手をしたくないから、ほっといて逃げたんじゃないですか?」

「…ぐっ…!?!」

「あのですね、元々は雪ノ下さんしかいない部活だったんですよ? 雪ノ下さん目当てでいかがわしい事を企んでいる人間がいなくても限らないんですから、男一人を置いていくような真似はしないで頂けますか? 今回の彼なんて滅茶苦茶怪しいじゃないですか。通学路にいたら職質受けるレベルの変人じゃないですか」

「な、なーに、心配はいらないさ。雪ノ下は合気道の心得もあるからな!」

「貴女は本当に女性ですか? だからって危険持ち込んで良いわけないでしょうが。一般的な女性の思考じゃありませんよ」

「ぐっっ!!」

「さつき監督責任と仰っていましたかね、自分でそれを投げだしてどうするんですか。もし雪ノ下さんや由比ヶ浜さんが心身に傷を受けたら責任取れるんですか?」

「そ、それは男の君が彼女達を守って…」

「危険持ち込んだ張本人が何をほざいてるのやら…。勿論守れる範囲で守るつもりではありますがね、こういう事するならまず貴女を駆除しますよ、似非女」

「ぐはあっ!?!」

「そもそも、材木座君の事を誰かに説明していればこんなことにならなかったんですから、先生も反省してくださいよ。厄介ごとを奉仕部に丸投げするような顧問なんていりませんから。クビになりたくないなら、もつと責任を持って行動してください」

「……ぐすつ…はい……」

「よろしい。では、次に何をするかは分かりますね? 軽率な行動で二人に迷惑をかけたお詫びにドーナツ買ってきなさい。そして奉仕部に差し入れなさい。二人とも部屋にいますからさつさと行ってきてください」

「…分かりました……行ってきます……」

半ベソでドーナツを差し入れに来た静を見て、雪乃と結衣が絶句したの言うまでもない…。



## エリートへの救済と暗躍

総武高校の体育は三クラス合同で行われるものであり、本日はテニスとサッカーの二つの種目が選択されている。この前の依頼を受けた後から八幡は義輝と体育でペアを組む事が多かったが、今回は運悪く八幡がテニス、義輝がサッカーに振り分けられてしまった。義輝からの悲しげな視線を無視しつつ準備運動を終わらせた八幡は、ラケットとボールを手にテニスコートへ向かう。

体育教師の厚木からのレクチャーが終わり、それぞれペアになって始めろ、と言われたところで八幡が厚木に話しかける。

「すみません、エリートなので壁打ちをしてもよろしいですか？  
組みたい人間がないので」

本心を隠そうともしない物言いに呆気にとられる厚木をよそに、八幡はさっさと壁打ちを始めた。八幡が過去にクラスメイトから嫌がらせを受け、教師に相談したものの相手にされず、結局自分で解決した事は厚木も知っている事なので、こう理由付けされては無理矢理組めとも言えないのだ。

八幡は黙々と壁に向かってボールを打ち返す。一球打つごとにラケットを右手から左手、左手から右手へと持ち替えながら壁打ちを続けた。途中であさつての方向からボールが飛んできたが、戻ってきたボールを一旦高く打ち上げ、ラケットを左手に持ち替えながら振り向きざまに飛んできたボールを同じ方向に打ち返し、またラケットを右手に持ち替えて落ちてきたボールを壁へと打ち込んだ。

「悪い、ヒキタ二君。ありがとねー」

誰にお礼を言っているのか分からなかったので、比企谷八幡はただ黙って壁打ちを続けた。

~~~~~

昼休みに入り、八幡はいつものベストプレイスで昼食をとる。

「今日は多めに買って置いて正解でした。やはり体育があるといつも以上にお腹が空きます」

壁と打ち合ったテニスコートを眺めながら、八幡はサンドイッチにかぶりつく。傍らには大きめのチョココロネとメロンパンが置いてあった。そしていつものMAXコーヒ―。なんとも甘ったるいメニューである。

「あれ、ヒッキーじゃん。なんでこんなところにいんの？」

心地いい風を堪能しながらパンを食していると、いつからいたのか結衣が声をかけてきた。

「ご覧の通り食事中です」

「いつも外で食べてんの？なんで？教室で食べればよくない？」

「好きなんですよ、外で食べるのが。それよりも、由比ヶ浜さんは何故ここに？」

「あ、そうそう！実はね、ゆきのんとジャンケンして、それで負けちゃったから罰ゲームやってんの！」

「罰ゲーム？校庭十週とかですか？いいですよ、カウントしてあげますから走ってきてください」

「いや違うし!?ただジュース買ってくるってだけだよ！」

結衣は八幡の隣に座ると、ベンチに背を預けて青空を見上げた。

「あたしき、前にも何回か同じ罰ゲームやった事あるんだけど、今日初

めて楽しいって思えたんだ」

「罰なのに楽しいとは、矛盾してますね」

「かもね！だってさ、ゆきのんってば、最初は『自分の糧くらい自分で手に入れるわ。そんな行為でささやかな征服欲を満たして何が嬉しいの？』とか言ってたのに、あたしが『自信ないんだ？』って言ったらすぐに乗ってくるんだよ！」

「……やはり猪ですね」

「猪？まあいいや。でさ、ゆきのんが勝った瞬間、無言で小さくガッツポーズしててさ……すっごい可愛かった…」

「友情をすすくと育んでいるようだなによりですねえ」

えへへ、とはにかむ結衣を横目で眺めながら、八幡はサンドイッチを食べ終わり次のチョココロネへと手を伸ばす。

「あ、さいちゃんだ。おーい、さいちゃーん！」

結衣が立ち上がって大きく手を振ると、丁度テニスコートから出てきた人影が手を振り返しながら向かってくる。

「由比ヶ浜さんと比企谷君？」

「よっす！テニスの練習？」

「うん。うちの部、すっごい弱いからお昼も練習しないと…。お昼休みにも使わせてくださいってずっとお願いしてて、ようやくOK出たんだ。由比ヶ浜さんと比企谷君はここで何してるの？」

「やー、別になにも？」

「あなた罰ゲームの最中でしょうが。私は見ての通り、チョココロネを食べています」

「あはは、そうなんだ」

「さいちゃん、授業でもテニス選んでるのに昼練もしてるんだ…大変だね」

「ううん、好きでやってるから平気だよ。あ、そういえば、比企谷君っ

てテニスうまいよね」

チヨココロネを早くも食べ終え、最後のメロンパンに手を伸ばした八幡を、さいちゃんは尊敬の眼差しで見つめる。

「そーなん？」

「うん！打つ時のフォームがとっても綺麗だし、ボールを打つたびにラケットを持ち替えるなんて僕にはできないよ」

「私は両利きですからね。しかし私の事をよく見ていらっしやいますね、戸塚彩加君」

名前を呼ばれたさいちゃんこと、戸塚彩加は笑顔を見せた。

「僕の事覚えててくれてたんだね。嬉しいなあ」

「最初お見かけした時、何故女子が男子の制服を着ているのか気になっていたものですから。記憶に強く残っていました」

「…あ、あはは…僕ってそんなに弱そうに見えるかな？」

「気にする事はありません。近頃は女性の方が強くなっていますから」  
「落ち込んでるのヒツキーのせいじゃん…」

女子と間違われていたことを知り、彩加は苦笑いを浮かべた。結衣はそんな八幡をジト目で責める。

「それよりさ、比企谷君ってテニス経験者だったりする？」

「まあ、嗜む程度ですが」

「そーなんだ。中学でテニス部だったりしたん？」

「いえ、部活には入ってませんでしたね。…それより、いいんですか？罰ゲーム」

「え？…うわっ!?ちよー忘れてた!!またねヒツキー、さいちゃんー」

慌ただしく走り去る結衣を彩加は手を振って見送る。そして八幡

がメロンパンを食べ終わった頃に、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「あ、もう終わりだね。戻ろっか」

「……ああ、はい。そうですね」

MAXコーヒを一気飲みした八幡は、先に歩く戸塚の後に続いた。

~~~~~

数日後、また体育の授業でテニスを選び、壁打ちをしていた八幡の肩を誰かが叩く。八幡が叩かれた方とは逆側から振り向くと、一瞬びくつとなつてその後に残念そうに笑う彩加の顔があつた。八幡の方に置かれた手は、振り向くと丁度頬に刺さるように人差し指が伸ばされていた。

「あ……えへへ、ひっかからなかったか」

「すみませんね、エリートで。ところで何か御用ですか？」

「うん。今日さ、いつもペア組んでる子がお休みなんだ。だから……よかつたら一緒にやらない？」

「ふむ……まあ、いいですよ」

「ありがとう。……やったあ」

小さくガッツポーズをする彩加を見て、少し微笑ましい気分になりながら八幡は彩加とラリー練習を開始した。八幡は壁打ちの時と同様に、ボールを打つ度に持ち手を変える。

「やっぱり比企谷君、上手だね」

「エリートですから」

「あはは」

「何度も何度も途切れぬラリーを続けていると、彩加がボールをキャッチしてラリーを止め、八幡の下へ走ってきた。」

「少し休憩しようか」

「どうぞ。では私は壁打ちに戻りますので」

「うん！……あ、ちよ、ちよつと待って！比企谷君に相談があるの！」

「……相談？」

壁打ちに戻ろうとした八幡の腕を慌てて彩加が掴み、そのままベンチへ引つ張る。

「で、何ですか相談って」

「うん……うちのテニス部の事なんだけど、すつごく弱いでしょ？それに人数も少なく、今度の大会が終わって三年生が抜けたら、もつと弱くなると思う。一年生は高校から始めたって人が多くてまだあまり慣れてないし……。それに僕らが弱いせいでモチベーションが足りないみたいなんだ。人が少ないと自然とレギュラーだし……。それで、比企谷君さえよければテニス部に入ってくれないかな？」

「……はあ？」

何故そうなるのか、とでも言いたそうな顔で八幡は彩加を見る。彩加は萎縮したように体を縮こまらせながら、理由を話し出した。

「比企谷君、テニス上手だし、練習すればもつともつと上手になると思う。それに強い人が入れば、皆の刺激にもなると思うんだ。……僕も比企谷君と一緒になら、もつと頑張れると思うし……」

「そう言ってくださるのはありがたいのですがね、凡人の集まりにエリートが入ったところでカンフル剤にはならないと思いますよ。私

以外の人間が惨めになるだけです。それに私はもう部活動に入っています。まあ暇を持て余しているような部活ですが、行かないと小うるさいので」

「そっか……それなら仕方ないよね……」

心底残念そうに項垂れる彩加。そこで八幡が二の句を告げる。

「テニス部に入るのは無理ですが、あなたを強くするお手伝いならできますよ」

「……え？」

「私のメル友にそういった事が得意な人いますから呼んであげますよ」

「ホントに!?!」

「ええ。明日明後日休みですからその日に。部活は抜けられますか？」

「うん!今週の休みは顧問の先生が外せない用事があるから部活も休みなんだ!」

「それは結構。詳しい事は後でメールしますから、授業終わったらアドレス教えて下さいね」

「分かった!ありがとう比企谷君!」

こうして八幡のメル友がまた一人増えた。

~~~~~

「と、いう訳でテニス部を強くする方法を一緒に考えて下さい」

「……意外ね。あなたが頼まれごとを進んで引き受けるなんて」

「戸塚君はあなたや平塚先生と違って良識的な凡人ですから。あなたも依頼が無いからって本ばかり読んでないで、その無駄に優秀な頭脳

を人のために役立てて下さい」

放課後、八幡は雪乃に体育の時間の出来事を話し、テニス部を強くするためのアイデアを考えていた。

「戸塚君を強くするのは私の方でどうか出来ますが、部活全体となると話は別です。まさか本当に私が入部するわけにはいきませんし」「身の程を弁えているのね、感心だわ。もっとも、周りを見下すあなたが気に入らなくて、テニス部員が一致団結することはあるかもしれないけど。でもそれは、あなたという敵を排除するための努力をするだけで、それが自身の向上に向けられることはないわ。ソースは私」  
「……実体験ですか」

「ええ。私、中学の時に海外からこっちに戻ってきたの。当然転入という形になるのだけど、そのクラスの女子…いえ、学校中の女子が私を排除しようと躍りになったわ。その中の誰一人として、私に負けないように自分を磨く努力をした人間はいなかったわ。……あの低能ども…」

雪乃の声音が一気に低くなり、背から黒い炎を噴き出している……  
ような錯覚がおきた。

「負けないようにって、どんな努力すればあなたと張り合えるんですか。まさかそれだけのために海外に行くわけにもいかないでしょうに」

「それは極論過ぎるでしょう…」

「まあそうですね。でも越えられない壁があるなら、その壁を崩して低くして乗り越えるのも一つの手だと思いますけどね。大体、雪ノ下さんなら努力の有無に関係なく、目の前に立ちふさがる者は平等に叩き潰しそうなものですけど」

「越えられないなんて、越えようともしないうちに決めてどうするっていうの？そうやって簡単に諦めて、人のせいにして陥れる…馬鹿馬鹿



しい。そんな人間の相手なんてしたくもないわ」

「事実バカなんだから仕方ないでしょう」

「…あなたって人が口に出すのを躊躇するような事もハッキリ言うのね。本来人間に備わっている筈の機能が欠けているのではなくて？」  
「あなたに言われたくはないですね」

会話が少し途切れたところで、部室の扉が勢いよく開かれた。

「やつはろー！依頼人連れてきたよー！」

「こ、こんにちわ…」

入ってきたのは結衣と、その後ろでおどおどと挨拶をする彩加だった。

「あ、比企谷君っ！」

緊張のせいかどこか暗い表情をしていた彩加だったが、八幡の顔を見て笑顔を取り戻して近くへと歩み寄った。

「比企谷君が入った部活ってここだったんだね」

「ええ、まあ…それよりどうしてここに？」

「ほら、ヒツキーも聞いてたでしょ？さいちゃんもテニスの練習頑張ってるの。だからここは奉仕部の一員である私がここを紹介してあげようと思って、連れてきたわけよ！ふふん！」

満足げに腕を組んでドヤ顔を披露している結衣に、雪乃が少し言いにくそうに口を開く。

「あの、由比ヶ浜さん…」

「ゆきのん、お礼とか全然いらないから。部員として当たり前の事をしただけだし？」

「いえ、あなたは別に部員ではないのだけれど…」

「違うんだっ!？」

「入部届も貰ってないし、顧問の承認も無いから部員ではないわね…」

「書くよ、書く書く!入部届くらい何枚でも書くから仲間に入れてよ  
〜!」

涙目になりながら鞆をまさぐり、ルーズリーフを一枚取り出したところ  
で八幡が待ったをかけた。

「別にいいですよ、私がメールしておきますから。私も入部届なんて  
書いた覚えありませんし。新入部員なら歓迎してくれますよ、性格的  
に」

「へ、いいの?てか、ヒツキーって平塚先生のアドレス知ってたんだ  
…」

「殆ど来るのは愚痴ばかりでしたけどね。この前も、合コンで年齢誤  
魔化して出席したら同席していた同級生にあっさり嘘をバラされて  
大恥かいたんですって。笑えるでしょう?」

「うわあ…」

「先生可哀想…」

静からのメールの内容に結衣は引き、彩加は憐れみの念を送った。  
微妙な空気に包まれた部室を、雪乃が咳払いをして仕切りなおす。

「それで、戸塚彩加君。奉仕部に何を依頼したいの?」

「…あ、あの…テニスを強くして、くれるん、だよね?」

「…それは確か、比企谷君が請け負った筈ではないの?」

「えと、休みの日にわざわざ練習に付き合ってくれるのに、学校の昼休  
みにまで付き合ってもらうのは悪いと思って…」

「そう…来た理由は分かったわ。だけど、奉仕部はあくまでもあなた  
の手伝いをして自立を促すだけ。強くなれるかどうかはあなた次第  
よ」

「……そう、なんだ」

「……由比ヶ浜さん、彼に奉仕部をどう説明したかは知らないけれど、あなたの無責任な発言のせいで一人の少年の淡い希望が打ち砕かれたわよ」

「えっ？でもゆきのんとヒツキーならなんとかできるでしょ？」

結衣のこの発言は、意図せず雪乃の闘争心に火をつけた。言った本人は挑発のつもりが無くても、言われた方はそう受け取ってしまったのである。

「……ふうん、あなたも言うようになったわね。いいわ、その依頼を受けましょう。戸塚君、あなたのテニスの技術向上を助ければいいのよね？」

「は、はい、そうです。僕が上手くなれば、みんな一緒に頑張ってくださいと思う、から……」

雪乃の迫力に押され、彩加は八幡の背に隠れながら答える。八幡は静に入部希望のメールを送信すると、携帯をしまって雪乃に問いかけた。

「手伝うと言っても、具体的にどうするおつもりで？」

「死ぬまで走らせてから死ぬまで素振り、死ぬまで練習、ね」

「戸塚君、当日は世界樹の葉を三枚持ってくるか、蘇生呪文を三回以上唱えられる僧侶を連れてきてください」

「ええっ!？」

ニッコリと笑って特訓メニューを告げた雪乃に八幡も乗っかり、彩加は驚きのあまり大声を上げた。

「まあこれは冗談だとして……雪ノ下さん、死ぬまで走らせるの項目は削除して頂いて結構ですよ」

「あら、何故かしら。基礎体力はあらゆるスポーツで必要とされるものなのだけど」

「いえ、体力面は休み二日で恐らくどうにかかります」

八幡からの意外すぎる宣言に、結衣や彩加だけでなく雪乃も目をぱちくりさせて固まった。

「…どういう事？ たった二日で体力が爆発的に増えるわけないでしょう？」

「それができるメル友がいるんですよ。ですから、雪ノ下さんは戸塚君にテニスの技術を身につけさせてください。まあ、急に言われても信じられないでしょうから、証拠は次の週でということだ」

「…：分かったわ。来週の昼休み、楽しみにしているわよ」

「あ、じゃあ雪ノ下さん達も参加しますって先生に言ってくるね。一応、男子テニス部の名前で使わせてもらってるから」

「それなら、奉仕部と共同で使用という形にした方がよさそうね。そのほうがすんなり通ると思うわ」

「分かったー」

こうして無事に許可も取れ、今日は解散となった。

~~~~~

休日が終わって最初の学校、昼休みに雪乃と結衣は部室で手早く昼食を済ませてテニスコートへ向かう。そこにいたのは壁打ちをしている彩加と、それを見ている八幡。そして八幡の隣には袈裟を着た一人の男が同じく彩加を見守っていた。八幡は雪乃達に気が付くと、体の向きをそちらへと向けた。

「おや、ようやく来ましたか。待ちくたびれましたよ」  
「…ヒ、ヒツキー……その人、誰？」

結衣が雪乃の背に隠れながら聞くと、八幡の隣にいる男がゆつくりと振り向く。その男の顔には、斜めに斬られたような傷跡があった。

「ご紹介します。私のメル友であり、経絡気功の達人でもある隴さんです」

「……よろしく」

袈裟を着た男……隴は軽い会釈をすると、彩加の方へ視線を戻した。

「け、経絡気功……？」

「簡単に言えば気の力、人体のツボを熟知した人です。前に由比ヶ浜さんのクツキー食べながら使ってたでしょ？それを戸塚君にも教えてもらいました」

「……それで、体力の方はどうなったの？」

「驚くほどに上がりましたよ。いやはや、まさかこんなに上達が早いとはね」

「戸塚は見て学ぶ能力が優れている。初日に猿真似で効果が不十分とは言え、俺の技を自ら再現した時は己が目を疑った」

「自身の活性の術だけ教えてもらうつもりでしたが、他にもいらぬ事教えてましたものね」

「あれ程の人材を腐らせておくのは惜しい。庭球選手に留めておくのは世の損失だ」

「弟子が少ないからって勧誘しないで下さい。戸塚君、雪ノ下さんが来ましたから本格的な練習を始めますよ」

「あ……はい!!」

それからは雪乃による地獄の特訓が始まった。結衣がライン傍や

ネット際の厳しいコースに向けて球を放り、それを彩加が打ち返していく。これは球出しと呼ばれる練習方法に近い。近いというのは、結衣の投げるボールの方向が結構な頻度で別の方向に逸れてしまっているの、ほとんど滅茶苦茶に投げられたボールにひたすら食いついている状態なのだ。

しかし、彩加にはあまり疲労の色が見られなかった。息は荒いものの、表情には少し余裕が見られる。それを見た雪乃は本気で驚いていた。

「…凄いわね」

「気功で筋繊維の回復を早めていますからね。休み中にも隴さんと信女さんの二人にしごかれていましたから」

「打ち返せた球の数は全体の五分の一……ただの学生にしては中々の好成績だ」

「たったそれだけで好成績なの？少し腑抜けているんじゃないかしら？」

「抜かせ、女。気功も使えん貴様など10分も持たぬうちにへばるだろう。奴はまだ使い方が荒い気功でも五時間耐え抜いたぞ」

「ごっ…!?!」

雪乃は絶句した。彩加に素質があったとはいえ、僅か二日でそれほどの持久力を身につけられるなど夢にも思っていなかったのだから。

「あっ…!?!」

「さいちゃん!!」

結衣の叫びに全員がそちらを向く。どうやら彩加が足をもつれさせて転んでしまったようだった。結衣は慌てて彩加に駆け寄って心配そうに声をかける。

「さいちゃん大丈夫？」

「うん。咄嗟に経絡を歪めたから大したことはないよ。さっ、続けよ？」

「う、うん…」

「……由比ヶ浜さん、少しここをお願い」

「えっ、ゆきのん!?!」

膝を少し擦りむいてしまっていたが、気にすることなく練習を続けようとする彩加を見て、雪乃は顔を顰めさせると結衣に後を任せて校舎に戻ってしまった。

「ど、どうしよ…。僕、何か怒らせるような事、しちやったかな？」

「や、それは無いと思うよー。ゆきのん、頼ってくる人を見捨てたりしないもん」

「まあ、あの人なりに考えがあるのでしよう。私達は練習を続けますよ」

「ね〜ヒツキー、交代してよ。さっきからヒツキー何にもしてないじゃん」

「いいですよ。戸塚君、私の球は由比ヶ浜さんと違って厳しいですからそのつもりで」

「どういう意味だっ!!」

ぶんすか怒る結衣をなだめてその手からボールを受け取ろうとした瞬間、結衣の表情が暗くなった。

「あ、テニスしてんじゃんテニス！」

声のした方を振り返ると、三浦優美子と葉山隼人を中心にした集団がこちらへ向かってきていた。

「あ……ユイ達だったんだね……」

優美子の隣にいた眼鏡をかけた女子生徒がそう呟く。優美子は結衣や八幡の方をちらりと見ると、軽く無視して彩加の方へ話しかけた。

「ね、戸塚ー。あーしらもここで遊んでいい?」

「三浦さん…僕は別に、遊んでるんじゃないくて、練習を…」

「え?何?聞こえないんだけど?」

「だから…練習を…」

彩加は優美子の威圧的な態度に気圧されてしまったらしく、それでも小さな声で反論する。

「ふーん、でもさ、部外者混じってるんだし、別に男テニだけで使ってるってわけじゃないんでしょ?じゃ、別にあーしらも使ってもよくない?ねえ、どうなの?」

「…それは…」

彩加が困ったように八幡の方を見るが……八幡は既に動いていた。

「その部外者が我々だと言っているのなら、それは間違いです。このテニスコートは男子テニス部と我々奉仕部が共同で使えるように許可は取っております。ちなみに我が校の生徒じゃない人も混じっています。これもちゃんと申請を出していますから問題ありません」「はあ?あーしは今戸塚と喋ってるんだから入ってくんなし。つか奉仕部って何?何意味わかんないこと言ってるの?キモいんだけど」「おっとすいません、凡人のあなたにも分かりやすいように意味を噛み砕いて説明したつもりでしたが、どうやらまだ足りなかったようです。すね」

優美子が攻撃的な視線を向け、八幡の腐った瞳がそれを飲み込む。そこに隼人が両手に両手を向けてなだめながら割り込んできた。



「まあまあ、あんま喧嘩腰になんないでさ。ほら、みんなでやった方が楽しいし」

「葉山君、別に我々は楽しかろうが苦しかろうがどうだっていいんですよ。ただ戸塚君のテニス技術が向上できればそれでいいんです」

「ねー隼人ー、何だらだらやってんの？あーし、早くテニスしたいんだけど」

「うーん……あ、じゃあこうしないか？俺達側とヒキタニ君達側で勝負して、勝った方が今後昼休みにテニスコート使えるって事で。もちろん戸塚の練習にも付き合う。強い奴と練習したほうが戸塚のためにもなるし、みんなも楽しめる」

八幡が黙り込み、モノクル越しに隼人達を観察する。そして優美子が獰猛な笑みを浮かべながらそれに賛同した。

「テニス勝負？……なにそれ面白そう」

「…え、優美子やんの？向こう多分男子が出てくると思うけど。そしてたら不利だろ」

「えー？あ、じゃさ、男女混合ダブルスにすればいいんじゃない？うそやだあーし頭よくない？つつつても、ヒキタニ君と組んでくれる子いるの？とかマジウケるんですけど」

優美子が甲高い声で笑うと、周りにいたギャラリーにもどつと笑いが巻き起こった。結衣と彩加は気まずそうに八幡を見るが、当の本人はどこ吹く風。笑っている人間達を冷やかな目で眺めていた。まだ笑いが続く中、八幡は口を開く。

「——人が練習しているところに厚かましくずけずけ入り込んできた挙句、我が物顔してでかい口叩かないでくれませんか？何様のつもりですか、あなた方は。テニス勝負？男女混合ダブルス？それをやるか決める決定権があなた方にあるとでも？勘違いも甚だしい……そ

「それでも高校生ですか？」

さつきとは違う、底冷えするような冷たい声に喧騒が止む。

「とはいえ、理が無い訳でもない。確かに強い人と練習したほうが戸塚君のためになりますからね」

結衣と彩加はその言葉に驚き、隼人は理解を示してくれたのかと息を吐く。

「ただしそれは、あなた方が戸塚君より強ければの話。羽虫を二匹踏みつぶしたところで、脚力が強くなるわけでもなし。練習に付き合うというのなら、まずは自分の強さを証明してくださいよ。葉山君と三浦さん、あなた方二人で戸塚君を倒してみてください。それができたのなら、戸塚君の練習に付き合う権利を差し上げます」

二対一での勝負を提案してきた八幡に、優美子が噛みついた。

「ちよつとあんた、あーしらのこと舐めてんの？」

「いいえ？ただ取るに足らないだけです。文句があるなら倒してみてくださいよ、出来る物ならね」

「……っ！隼人！こうなったらやってやろうじゃん!!」

「あ、ああ……」

そう言つて優美子はテニスウェアに着替えに行った。八幡はそれを見て、彩加に話しかける。

「すいませんね、巻き込んでしまって。しかし、こうでもしないと恐らく引き下がらないでしょうから」

「……ううん、僕がちゃんと断ってればよかったのに、それができなかったし……。それに、任せっぱなしにするのも何か違うと思うし」

「戸塚」

沈黙を保っていた臚が口を開く。

「これは試合ではない、勝負だ。この意味は分かるな？」

「……うん、分かってるよ、臚さん」

「ならばよし。案ずるな、お前が負ける事は無い」

「ありがとう」

ラケットを手にテニスコートへ向かう彩加を、結衣は心配そうに見送る。優美子が着替えを終えて戻ってきて、ぽつぽつとギャラリーも増え始めた。中には隼人にコールを送る者もいる。

——この時すでに、リア充二人が断頭台に頭を固定された状態であったことなど、誰も知る由は無かった……。

## リア充共の首切り台

「二」HA・YA・TO!フウ!HA・YA・TO!フウ!「二」

「……何なの、この馬鹿騒ぎは」

雪ノ下雪乃は保健室から借りてきた救急箱を手に呆然としていた。湧き上がる隼人コールの中、コートでは彩加と優美子、隼人ペアが握手をしている。雪乃は不機嫌そうな顔をして人ごみを掻い潜り、八幡たちの下へ向かう。

「あ、おかえりゆきのん」

「おかえり、ではないわ。私がない間に何があつたのか説明しなさい比企谷君」

「侵略者が現れました」

八幡は雪乃に事の次第を詳しく説明する。全て聞き終わると、雪乃は盛大に溜息を吐いた。

「勝負する理由は理解出来たけれど……それでどうしてここまで人が集まるのかしら」

「葉山君の人望……としか説明出来ませんね」

「あはは……あたし達、完全アウエーって感じだね」

「……由比ヶ浜さん、向こうに行かなくていいの？あなたは……」

「いいんだよ。あたしも奉仕部の一員だし、あたしが持ってきた依頼だもん。投げだせないよ」

「……そう」

雪乃は八幡の隣に立ち、小声で八幡に問いかける。

「彼に勝算があつての事でしょうね」

「勿論ですとも。戸塚君の願いを叶えるため、彼らには釣り餌……い

え撒き餌……ではなく生贄になって頂きますよ」

「……一体、何を企んでいるの？」

「企む時間は終わっています。野次馬が集まってきた時点で、既に実行されているんですよ。……ああ、そうそう。雪ノ下さんにも後で協力を願いますから、私の調子に合わせて下さいね」

「嫌よ。何故私があなたに協力しなければいけないの？」

「おや、おかしいですね。あなたは彼らの傍若無人な振る舞いを黙って見過ごすような方でしたか？」

「……」

「戸塚君の願いは戸塚君自身が叶えます。我々が行うのは……邪魔者の排除です」

「……え？」

急に冷たい声になった八幡の顔を見て……雪乃の顔が強張った。腐った瞳がモノクルを通し、どす黒く光っている。

「あなたが前に言った通り、彼らはお山の大将。居座る山は、脆い砂山。頂上に陣取って偉くなつたつもりならば、その砂を突き崩して現実を教えてやりましょう。凡人は集まったところで所詮、凡人ではないことを」

雪乃はその低い声に悪寒を感じつつ、審判の掛け声とともに始まった試合に目を向けた……。

~~~~~

試合の序盤は互角と言える戦いだつた。彩加は一人というハンデを感じさせない程のプレーでリア充ペアと渡り合っていた。ちなみにルールは本格的なテニス経験者ではない隼人に配慮し、単に打ち

合って点を取り合う、というシンプルなものになった。

しかし、彩加が1ゲーム目を勝ち取ってから、状況は一変する。

「……ハアツ……ハアツ……ハアツ……ハアツ……!!」

「はーっ……はー……くっ……!!」

2ゲーム目の途中から、優美子と隼人の呼吸が著しく乱れ始めたのだ。動きも非常に鈍くなり、彩加はいとも簡単にラブゲームを奪う。その後も形勢は彩加に傾いたまま、次々と得点を奪っていった。最初は騒いでいたギャラリー達も、二人の調子が落ちていくと共に大人しくなっていく。

「…どうしたというのかしら。いくらなんでも体力が尽きるのが早過ぎるわ」

「う、うん…。隼人君はサッカー部だし、優美子だって中学の時に女テニで県選抜選ばれてるのに…」

雪乃と結衣は息切れを起こしている二人を見て怪訝に思い、呟く。そこで八幡と朧が種明かしをした。

「あれも経絡気功の一種ですよね、朧さん？」

「ああ。自身の気功を相手の体に流し、正常な気の流れを乱すことによって弱らせている。恐らく、普段の五倍の負荷が体に掛かっているだろう」

「五倍!?!」

結衣が片手をパーにして五を表しながら驚いた。単純計算で、20m走るだけで100m走った分の体力を消耗する状態になっているのだ。

「で、でも気を流すなんて、いつやったの…?」

「彼らの体に触った時に流したんですよ」

「テニスで相手の体を触る時なんて……あつ!!」

結衣は試合前の時を思い出す。確かに彩加は、二人と握手を交わしていた。

「手を握っただけなのに、あんなになっちゃうんだ…」

「的確に経絡を突いたわけではないが、気を扱えない者に対しては充分効果がある。奴らは乱された氣の流れを正す術を持たぬからな」

「ほえく…」

感心している結衣とは対照的に、雪乃は眉を吊り上げて臙に詰め寄った。

「臙さん…といったかしら。そんなやり方でテニスに勝たせて何になるの？卑怯だと思わないの？」

「……下らぬ。勝負など、勝てばよかろう。それに礼節を弁えぬ者に礼儀を尽くす必要などない。貴様は家に土足であがり込んだ者に対し、茶を出してもてなすのか？」

「……それは…」

「案ぜずとも、試合でそのような真似をする男ではない。だがこれは勝負だ。勝てば全てを得り、負ければ奪われる。奴とてそれを理解しているからこそ、あのような手を使っているのだ。奴にとて、退けぬ理由がある」

臙は雪乃と話している間も、彩加から目を離さずに見守っている。雪乃はそんな臙を見て何も言う事ができなくなり、大人しく試合を見届ける事にした。

くくくくくくくく

勝負の後半。優美子も隼人もへ口へ口の状態であり、最早走るところがラケットすらまともに振れていない。彩加はそんな二人に一切の容赦なくサーブを打ち込み、サービスエースを奪う。葉山グループや葉山目当てのギャラリー達はすっかり静かになり、あるのは隼人には劣る数ではあるが彩加への声援と拍手のみ。そんな中で彩加は最後の得点を奪い取り、見事勝利を決めた。

糸が切れた操り人形のように地面に倒れた優美子と隼人に彩加が駆け寄り、手を貸しながら気を流して乱した気の流れを元に戻す。少し顔色が戻ったところで、彩加が二人に笑顔で言った。

「お疲れ様！良い練習になったよ、ありがとう！」

笑っている彩加とは反対に優美子と隼人の表情に陰りが浮かぶ。圧倒的な差で勝負を決められたにもかかわらず、良い練習になったという。普通なら皮肉にしか聞こえないが、戸塚彩加という人間はそういう事を言わないと彼らは知っている。この場で彩加に向けて罵声が飛ばないのは、彼の日頃の行いの良さが招いた事だ。本心からそう思っている良い奴だからこそ心を抉るのだ。

彩加がコートから出ると共に、入れ違いで八幡が入ってくる。

「いやはや、猛々しく乱入してきたわりにはあっけなかったですね。まあ、これであなた方は二人合わせても戸塚君には足元にも及ばない事が証明されました」

隼人は悔しそうに歯噛みをし、優美子は怒りのままに睨みつけて口を開こうとする。だが、続く八幡の言葉に言おうとした言葉を失ってしまった。

「――では雪ノ下さんも戻ってきたことですし、あなた方がやりた



がってた男女混合ダブルス、始めましようか」

お通夜の最中、更に身内の不幸が重なってしまったように場が凍り付いた。目を点にして八幡を見ていたリア充ペアは、しばらく時間を置いてから再起動する。

「……は、はあ？何言ってるの……？勝負ならもう終わったじゃん……」

「は？いえ、あれは戸塚君との練習する権利を勝ち取るための勝負ですが、何か？」

「待ってくれ……それはおかしくないか？」

「何もおかしくありませんよ。この勝負であなたの方が勝てば戸塚君の練習相手はあなた方になり、戸塚君が勝ったなら練習相手としてふさわしくないあなた方は球拾いでもしてもらおう。ほら、何もおかしくなんてないでしょ？」

「そうじゃない！俺達はテニスコートの使用权を賭けて勝負してたはずだろう!?!」

「そんなこと一言も言ってますんよ。自分に都合の良いように勝手に解釈しないで下さい。それに男女混合ダブルスやりたいって言ったのは三浦さんでしょう？良かったじゃありませんか、お望みのものができるのですから」

そう言って八幡は優美子の方を見る。よどんだ瞳に一瞬怯えながらも、優美子は異議を申し立てる。

「た、確かにあーしがそう言ったけど、一試合した後にもう一回出来るわけないでしょ!?!」

「出来る出来ないではなく、やってもらわなければ困りますよ。その為に我々は貴重な練習時間をわざわざ割いてあげたんですから。まさか自分勝手に男女混合ダブルスやりたいなんて言っておいて、自分が勝てそうにないから自分勝手に逃げるんですか？テニスがやりたいってだけでこれだけ人に迷惑かけたんですから、責任とってちゃん

とテニスして下さいよ」

八幡の剣幕に優美子は数歩後ずさり、それを庇うように隼人が前に出た。

「ヒキタニ君…」

「頭を下げれば丸く収まると思ったら大間違いですよ？」

背筋を正して何かを言おうとしていた隼人の動きが止まる。八幡はそんな隼人に、周りには聞こえないに声のボリュームを落として話し続ける。

「あなたが頭を下げて謝って、それでも試合を強行しようとするれば我々が悪者になるでしょう。だから我々は謝られたら許さざるを得なくなる。それが狙いなんですよ？あなたが謝ろうとしたのは」

「ち、違う…俺はそんなつもりは…」

「そんなつもりが無かろうとそうなるんですよ。だからね葉山君、ごねてないでさっさと所定の位置に戻ってください」

隼人は肩を落とし、優美子と共にスタート位置に戻る。八幡はそれを見届けると、彩加の傷の手当てをしている雪乃へと話しかけた。

「衛生兵…あつ間違えました雪ノ下さん、それが終わったらテニスのユニフォームに着替えてきて下さいね」

「その間違い方にそこはかたなく悪意を感じるのだけれど。それにあれ以上やる必要があるのかしら。彼らはもう使い古されたボロ雑巾のようになってるわよ」

「何を言ってるんですか。ゴミはちゃんと処分しないといけません」

「……そうね」

悪寒に身を震わせながら手当てを終えると、雪乃はユニフォームに

着替えに再び校舎へ戻っていく。

「……優美子、やれそうか？」

「当たり前っしょ……。さつきは何か調子悪かったけど、今は調子いいからいけるし。それに戸塚はテニス部だけど、あいつらは違うから余裕でしょ」

雪乃が着替えている時間で体力を回復させ、いつもの調子に戻った優美子が笑う。だが隼人の顔色は優れなかった。それを不思議に思った優美子が理由を聞こうとしたが、丁度のタイミングで雪乃が着替えから戻ってきた。

「ヒキタニ君と雪ノ下サン……だっけ？悪いけど、あーし手加減とかできないから、怪我したくなかったらやめといた方がいいと思うけど？」

「……あれだけ醜態を晒しておきながら、まだあんなことを言える元気が残っていたのね」

「大方、我々はテニス部ではないから勝てると思っっているのではないですかね」

彩加が申し訳程度に活性の経絡での回復を行っていたため、リア充ペアの体の調子はすこぶる良かった。しかしそれでも、越えられない壁というのは存在するものである。

~~~~~

男女混合ダブルスによるテニスコート使用权の奪い合い。彩加を審判にしたその試合の先手はリア充ペアが取った。ボールをラケットで地面に打ってバウンドさせながら、優美子が攻撃的に笑う。

「あんさあ、あんたらが知ってるかしんないけど、あーし、テニス超得意だから…」

優美子の笑みが深くなり、バウンドさせていたボールを掴む。

「もし顔に傷とかできちゃったらごめんね？」

その言葉が言い終わった瞬間、雪乃の体がビクツと震える。

「(ハツ…安心しなよオジヨウサマ？あんたは狙わないでおいであげるし)」

優美子は敵意を八幡へと向け、サーブを打ち放った。鋭く早い打球はコート内の左ライン際ギリギリに飛んでくる。右手でラケットを持っている八幡では反応できない。そう心の中で確信する優美子は笑みを深くする。

しかし、八幡は動じずにラケットを右手から左手へと持ち替えた。そして優美子の放った高速サーブを、更に早い速度で打ち返す。その打球は優美子の顔のすぐ横を通り過ぎ、ノーバウンドでコート外のフェンスへ突き刺さった。ボールが風を切り裂いて飛ぶ音が耳元を通り過ぎ、切り裂かれた風を肌で感じた優美子は小さく悲鳴を上げて顔を庇う。

「…フ、ファイフティーン、ラブ!!」

この打球は当然相手の得点になる。しかし、得点が入っても喜ぶ様子は無かった。

「おっと、すいません……わざとです」

八幡の声に優美子が震える。

「あなたがご存知かどうかは知りませんが、私、テニスには心得がありません。中学の頃、大会に出てくれて頼まりましたが、信女さんとのデートがあつたので断つた程度の実力はあります」

リア充ペアが驚愕の表情で八幡を見る。

「ですから安心してください。あなたの顔ギリギリを狙い続けても顔には絶対に当たりませんから」

優美子が恐怖で顔を青ざめさせ、隼人が啞然としたまま立ち尽くす。

「……生け贄、ね。確かに妥当な表現ではあるわね」

雪乃は冷たい目でリア充ペアを眺める。勝負という名目で彩加と隼人達を戦わせたのは、隼人達のネームバリューを利用して多くの人間を集め、さらにハンデ付きの勝負で彩加に勝たせて彩加の強さをアピールするため。そうすれば、彩加に憧れてテニスを始めようとする人間がテニス部に来るかもしれないし、部員は彩加と同じ部活だという事で実力を期待され、否応なしに練習に力を入れる。

そしてこの公開処刑は、万が一にも彩加に隼人を倒したという理由で敵意を向けられないようにするためのもの。人当たりが良い彩加とそうとも言えない八幡では、どちらに悪意が向くかは聞くまでもないだろう。

優美子の一言で雪乃が震えたのは、隣にいた八幡から得体の知れない怒気を感じ取ったためである。テニスというスポーツを侮辱されたと思ったのか、雪乃が傷つけられるかもしれないから怒ったのか、真意は分からない。雪乃もそれを聞くとはしなかった。

「……はあ……はあ……はあ……」

「大丈夫ですか雪ノ下さん？まさかここまで体力が無いとは思って  
みませんでしたよ」

何故なら、雪ノ下雪乃は恐ろしい程に体力が無かったので、聞こう  
にも聞けなかったのである。

それでも勝負は一方的な展開だった。最初のわざとの失点以外、八  
幡と雪乃はサービスエースとリターンエースを決めて、すべての得点  
をもぎ取った。

彩加の試合終了の合図と共に、リア充ペアと取り巻き達はそそくさ  
と退散していった。ギロチンを落とされ晒し者になった彼らの後ろ  
姿は、形容し難い程に無惨だったという…。

## 奉仕部の華麗なる放課後

ゴールドデンウィークも終わり、暑さが目立ち始めてきた今日この日。職員室の応接スペースで比企谷八幡と平塚静は向き合って座っていた。

「それで平塚先生、私を呼び出した理由は何なのでしょうか」

「ああ。この職場見学希望調査票なんだがな」

「何か問題でもありましたか？」

「問題は無いんだが、少し意外だったんだ。君が警察官になりたいと書くとはな…」

「……はあ」

静は八幡の書いた希望調査票をしみじみと眺める。

「君の孤独体質から見て、もつと人との関わり合いの少ない場所を選ぶと思っていたからな」

「別に孤独ではないのですが…」

「奉仕部で過ごした日々が、君にも少なからず影響を与えたということかな。私も嬉しいよ」

「奉仕部に入っていないなくとも、私は警察官を選んでいたと思いますがね。……特に問題が無いのなら、私はこれで…」

「まあそう焦るな。時に比企谷、奉仕部はどんな具合かね？」

立ち上がろうとした八幡を静が引き止め、話を続ける。八幡は中途半端に上げた腰をソファに戻し、出されていたお茶を一口飲んで答える。

「どんな具合といわれましてもね…。戸塚君からの依頼が終わってからは何も無し。雪ノ下さんは本を読んで、私と由比ヶ浜さんは携帯いじくってるだけですよ」

「そうか、存外平和だな。由比ヶ浜はともかく、君と雪ノ下は毎日のように激戦を繰り広げているものだとはかり思っていたが…」

「舌戦の間違いでしょう？あの人、体力ありませんから体を使う戦いは出来ませんよ」

「君達二人の舌戦は激戦に等しいものだと思うがね…」

「まあ凡人にとつてはそうなんでしょうね。……まさか先生、奉仕部の話を聞きたいがために呼び出したんですか？調査票を建前にして」

八幡の濁った視線を受けて、静の体が不自然に強張った。額に冷や汗をにじませながら、静はしどろもどろに言い訳をする。

「い、いや違うぞ？別に部室に行くのが面倒だった訳ではなくてな？君の目から見た奉仕部の事を聞きたかったというかなんというか…」  
「……あのねエ、先生はよく自身の年齢の事を気にした言動をしますが、若く扱われたいなら行動指針もそれに基づけてはいかがですか？自分が動きたくないから人に来させるとか、もうお年寄りの発想ですよ」

「ぐっはあ!?!」

言葉の槍が容赦なく静の胸を貫く。心に負った傷を押さえてうずくまった静に目もくれず、八幡は残りのお茶を静かに飲み切った。そして職員室から出ていこうと鞆に手をかけると、騒がしい女の子の声がか八幡の耳へ届いた。

「あー！いたー!!」

八幡を指差しながらやってきた由比ヶ浜結衣と、その後ろで黒髪のツインテールを揺らしながら続く雪ノ下雪乃。

「ゆ、由比ヶ浜と雪ノ下か…悪いが、比企谷を借りていたぞ…」

「べ、別にあたしのじゃないんです！……先生、具合でも悪いん



ですか？」

「いや…何でもない…」

妙に辛そうな静を見て心配そうに尋ねる結衣。静はようやく立ち直ると、心を落ち着かせる為には煙草に火をつけた。

「それで、お二人とも何故ここに？」

「あなたが部活に来ないから探しに来たのよ、由比ヶ浜さんは」

「そうそれ！わざわざ聞いて歩いたんだかね！超大変だった！」

「ほら見なさい。若い人代表の由比ヶ浜さんはこんなに動いてるんですよ。なのに静おばあちゃんとききたら…」

「ぐっは、ごほっ!!ごっほごほっ!!」

再攻撃を食らった上、吸っていた煙草の煙でむせ返った静は再びうずくまった。結衣がその背中を慌ててさすり、雪乃は呆れたような視線を向けていた。

「せ、先生しっかりしてー！」

「ごほごほっ…あ、ああ…。すまない、もう平気だ…。君達は部活に行きたまえ…」

無理矢理笑顔を浮かべて、三人を奉仕部へ送り出した静。その後しばらく、他の先生達から生暖かい視線を受け続ける事になったのであった…。

~~~~~

「…ね、ねえヒツキー。携帯教えて？や、ほら、わざわざ探して回るのもおかしいし、恥ずかしいし…。どんな関係か聞かれるとか、あり

えないし…」

「いいですよ。アドレスはゆいにやんで登録しておきましょうかね」  
「ゆいにやんって何さ!?あれ、てかそれ私の携帯!?いつの間に!」

顔をほのかに赤らませながらアドレス交換を申し出た結衣だが、八幡はそれを聞いて一瞬のうちに結衣の携帯と自分の携帯を手にして手打ちでアドレス登録を始めていた。

「てか、赤外線使えるんだからそっち使いなよ。手打ちなんて面倒でしょ?」

「……それもそうですね。いやはや、いつも手打ちなものでつい…」

そう言つて結衣に携帯を返して、お互いに赤外線を送りあう。八幡の携帯の電話帳に新しく登録されたのは、

☆★ゆい★☆☆

というキラキラした名前だった。

「……ほらね。こういうのがあるから手打ちの方が良いんですよ。何なんですか、この名前は」

「へ?可愛くない?」

「可愛くないですよ。やっぱりゆいにやんに変えときましましょう。この登録名だと、スパムか何かと勘違いして迷惑メールボックスに送ってしまいそうです」

「ちよ、なにそれ!?ゆいにやんの方がもつとキモいでしょ!」

「いやこっちのほうがキモいです。具体的に言うと、顔の上半分を手で隠してピースサインをした写メが添付されてて、内容が『今、彼氏募集中です♪(はーと)』みたいなメールが送られてきそうで怖いです」

「……想像してみて自分でも悲しくなるほど違和感が無い!?でも、それでもゆいにやんは無いから!」

「じゃあ戦場ヶ浜さんで」

「物騒だ!?!それならゆいちゃんの方がマシだよ!」

「ならゆいにちゃんに変えときましようか。まったく、無駄に手間がかかりますね…」

「…え、あたしが悪いの?」

どこか納得のいつていない結衣を放置し、八幡は雪乃に携帯を持っただまま話しかけた。

「雪ノ下さんもアドレス交換しませんか?ほら、一応部長と部員の関係ですし、何らかの連絡手段はあった方がいいでしょう?」

「…そうね。非常に遺憾ではあるのだけれど、あなたの言う事も一理あるわね」

「流石、話が早い。では登録名はゆきのんにしておきますね」

「…気持ち悪いからやめてくれないかしら。あと、人の物を許可なく触るのはやめなさい」

そんな雪乃の言葉を無視して、八幡は雪乃の携帯を手にアドレスを打ち込む。登録名は無論、ゆきののである。

「はい、これでお二人とも私とメル友になりましたね。おめでとうござります」

差し出された自分の携帯を、雪乃は溜息を吐きながら受け取る。注意しても無駄だと察したらしい。

「ヒッキーってさあ、登録してある人全部にあだ名付けてんの?」

「そうですよ。親しみがあっていいでしょう?」

「じゃあ、平塚先生とかにも付いてるの?」

「勿論ですとも。この学校の人なら平塚先生と戸塚君、あと材木座君のでもありますよ」

そう言って携帯の電話帳を開き、二人に見せた八幡。登録されていた名前は、

しずちゃん（独）

さいちゃん（男）

メガネのハム男<sup>お</sup>

であった。

「…な、なんか凄いね…」

「ええ。特に平塚先生のは悩みました。独身28号にしようかとも思ったんですが、流石に可哀想なのでね」

「……へ、へえ…」

どう反応しているのかわからず、結衣はぎこちない笑みを浮かべた。

~~~~~

依頼者も来ず、暇を持って余して各々読書や携帯いじりに精を出している中で、不意に結衣が携帯を見て溜息を吐いた。

「どうかしたの？」

「あ、うん……何でもない、んだけど。ちよつと変なメールが来たから、うわって思っただけ」

「比企谷君、裁判沙汰になりたくないなら今後そういう卑猥なメールを送るのはやめなさい」

「私はそんなセクハラメール送ってません。どんな証拠があつて言ってるんですかね」

八幡が容疑を否認すると、雪乃が勝ち誇った顔になって髪をさらつと掻き上げた。

「その言葉が証拠と言つてもいいわね。犯人の台詞なんて決まってるのよ。『証拠はどこにあるんだ』『大した推理だ、君は小説家にでもなったほうがいいんじゃないか』『何故俺だけ疑うんだ』」

「成程ね。なら事件が起こって最初の探偵の推理は大抵外れる、というのも決まってますよね。特にあなたはかませっぽいですし。頭が良くて、名家の出身で、高飛車で人を子馬鹿にした言動を繰り返す。主人公というより嫌味なサブキャラですね。あ、それとも状況証拠で犯人を決めつける無能な刑事ですかね？」

八幡の反撃に雪乃は勝ち誇った顔を歪ませる。悪くなった空気をどうかかしようと、結衣が慌てて仲裁に入った。

「二人とも落ち着いて！それにこれ、ヒッキーは無関係だと思うよ」

「……証拠は？」

「なんていうか、内容がうちのクラスの事なんだよね。だからヒッキー無関係っていうか」

「そう。なら比企谷君は犯人ではないわね」

「なんだか釈然としませんが、疑いが晴れたのなら良しとしましょうか」

「…まあ、こういうのって時々あるしさ、あんまり気にしないことにするよ」

結衣は携帯をしまうと、座っていた椅子の背もたれに思い切り寄りかかって天井を見つめる。

「…暇だなあ…」

「することがないのなら勉強でもしていたら？もうすぐ中間試験も始

まるのだから」

「…勉強とか、意味なくない？社会に出たら使わないし…」

「由比ヶ浜さんみたいな人ばかりで社会が構成されていたら、今頃勉強なんて無くなってるでしょうね」

「そうだよ、勉強なんて意味ないってば！高校生活短いし、そういうのにかけてる時間もつたないじゃん！」

八幡の皮肉を何故か肯定的に捉えた結衣に、雪乃が手を額に当てて呆れながら物申す。

「由比ヶ浜さん、勉強に意味がないと言っていたけれど、そんな事は無いわ。むしろ自分で意味を見いだすのが勉強というものよ。そこそ人それぞれ勉強する理由は違うでしょうけど、だからといって勉強全てを否定する事にはならないわ」

「ゆきのんやヒツキーは頭いいからいいけどさ……あたし、勉強に向いてないし…」

「言っておきますが、私は数学苦手ですよ」

ネガティブな雰囲気をぶち壊す発言に、結衣だけでなく雪乃も驚きで八幡の顔を見た。

「……に、苦手ってさあ…。ヒツキー、学年トップじゃん…」

「そうですよ。だから死ぬほど勉強してます。勉強にかける時間も数学が一番多いんですよ」

「…意外ね。あなたがそこまで勤勉なんて」

「ま、エリートですから当然ですよ。つまりね、頭が良い人だっけ向いてない教科もあるんです」

「……そうなんだ。あたしもちゃんと勉強しよっかな…。そうだ、ゆきのん勉強会しよー！」

「……どうしてそうなるのかしら」

「一人でやるよりいいじゃん！テスト一週間前から部活も無くなる

し、午後は暇になるでしょ？プレナのサイズで集まって勉強しようよ！」

「まあ：別に構わないけれど」

「ゆきのんと二人でお出かけって初めてだね！」

「そうかしら」

そうしてキャピキャピ騒ぐ一人と静かに受け答えをする一人を放っておき、八幡も信女や他のメル友呼んで勉強会でもしよっかなー、と適当に考えているうちに日がかなり落ちてきていた。時計を見た雪乃が開いていた本を閉じ、部活が終わりの時間だと察した結衣と八幡も帰り支度を始める。

と、ここで部室の扉が叩かれた。

「どうぞ」

雪乃が間髪入れずに返事を返すと、お邪魔します、という爽やかな声と共に全員が見知った顔の人物が入ってきた。

「こんな時間に悪い。ちょっとお願いがあつてさ」

八幡が評したところの侵略者であり、クラスカーソットの最上位に属する爽やかイケメン、葉山隼人が奉仕部を訪れた。

## 鎖の悪意

帰ろうかと思っていた矢先の来客に八幡は少し不機嫌になり、抗議の意を込めた視線を隼人に向ける。隼人はそれを受けて頭を掻きながら苦笑を返した。

「いやー、なかなか部活から抜けさせてもらえなくてさ。試験前は部活休みになっちやうから、どうしても今日の内にメニューこなしておきたかったっぽいんだ。ごめんな」

「能書きはいいわ。何か用件があつてきたのでしよう、葉山隼人君？」

遅くに訪れる事になった理由を話す隼人だが、普段よりも幾分冷たさが増した声で雪乃がそれを切り捨てる。

「ああ、そうだった。奉仕部ってここでいいんだよね？平塚先生から、悩み相談ならここって紹介されたんだけど…。遅い時間に悪い。結衣もみんなもこの後に予定とかあったら改めるけど…」

「予定というか、もう帰るところだったんですがね」

「や、やー、しょうがないよヒツキー。隼人君はサッカー部の次の部長だし…」

「ほお……」

「ああ、ヒキタニ君。このあいだは悪かった。練習に割り込んだりして本当にごめん」

「割り込んでから気付いたところで遅いんですがね。まあいいですよ、凡人ですから分からなくても当然でしょうし。それにあなた方には充分、餌としての役割を果たしてもらいましたから。戸塚君、テニス部にも少し活気が出てきたって喜んでましたよ」

「……は、ははは…」

結衣のフォローも空しく、八幡にバツサリ切られて乾いた笑いしか出ない隼人。



「それより、何の相談があるのでしょうか」

「ああ…それなんだけど、これを見てくれないか？」

隼人は携帯を取り出して素早くボタン操作をし、画面を八幡達へ見せるように向ける。

「何ですか？メル友になりたいんですか？それならそうと言えばよろしいではありませんか」

「え?!いやそうじゃなくて…」

「よく見なさい。相談事はこのメールについてらしいわ」

「あ…これって…」

携帯の画面を見た結衣が自分の携帯を取り出し、隼人と同じく画面を見せるように向ける。その二つの携帯の画面にはまったく同じメールの文面が記されていた。

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間です。西高狩りをしていました』

『大和は三股かけている最低の屑野郎』

『大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをした』

戸部、大和、大岡の三人を悪く言うメール。それが何度も送られていた。

「ほら、さっき言った変なメールだよ…」

「チェーンメール、ね」

「ああ。これが出回ってからなんかクラスの雰囲気が悪くてさ。それに友達のことを悪く書かれてれば腹も立つし」

人の悪意を拡散させるチェーンメール。結衣や隼人だけではなく、他にもクラスの多くの人間に送られているのは、隼人が言っていたよ

うに雰囲気からして間違いない。

「止めたんだよね、こういうのは気持ちのいいもんじゃないから……あ、でも犯人探しがしたいんじゃないんだ。丸く収める方法を知りたいんだ。頼めるかな?」

「お断りします」

間髪入れずに八幡がお断りをいれた。葉山の顔が引きつり、雪乃がむすつとした顔で八幡を睨む。

「ちよつと、どういうつもりかしら。奉仕部の部長は私よ?勝手に断らないで」

「いや、だってこれ、奉仕部が請け負うべき仕事じゃないでしょう。自己変革も何も関係ないですし」

「……それは、確かに……」

「……そ、そこを何とかお願いできないかな?」

「できませんねー」

奉仕部の活動理念とは離れた依頼だと指摘され、雪乃は渋い顔をして考え込む。隼人が再度頼んでみるものの、八幡は聞く気は無いようだ。

「……残念なのだけれど、これは比企谷君の言い分が正しいわね。奉仕部は何でも屋ではないから」

「じゃ、じゃあこのままにしておくの……?」

不安気に結衣が雪乃を見る。すると雪乃は首を横に小さく振った。

「いいえ。だから依頼内容を少し変えればいいのよ。犯人を見つけ出して、二度とこんな事をしないように再教育する。これなら充分奉仕部の活動範囲内よ。構わないわよね、葉山君?」

「…ああ、受けてくれるのなら、それでいいよ」

「と、いうわけよ。何か反論はあるかしら」

「いいえ、別に…」

反論が無いと八幡が答えると、雪乃は得意げに勝ち誇った顔をすする。そしてすぐに表情を引き締めると、チェーンメールが送られるようになった原因を探し始めた。

「メールが送られるようになったのはいつから分かる？」

「ええと、先週末からだよ。な、結衣？」

「うん」

「先週末から突然始まったわけね。それで、先週末に何かあったの？」

「特に、無かったと思うけど…」

「うん、いつも通りだったよね…」

「そう…一応聞くけど、比企谷君は？」

「…先週末といえば、進路調査票の提出と、職場見学のグループ分けの話があったくらい…ああ、成程」

「うわ、それだよ…」

職場見学のグループ分けと聞いて、察しがついた様子の八幡と結衣。それとは対照的に、雪乃と隼人は首を傾げるだけだった。

「え、そんなことですか？」

「いやー、こういうイベントのグループ分けってその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人もいるんだよ…」

陰鬱な表情をしながら話す結衣を、雪乃と隼人は不思議そうに見る。

「葉山君、書かれているのはあなたの友達、と言ったわね。あなたのグループは？」

「あ、ああ…：そういうえばまだ決めてなかったな…。とりあえずはその三人の誰かと行くと思うけど」

「…犯人、分かっちゃったかも…」

「説明してもらえるかしら？」

「うん、グループ分けは三人で一組になるんだけど、それっていつも一緒にいる四人から一人仲間外れができちゃうじゃん。それで外れた人、かなりきついよ」

職場見学は好きな人三人で組む事になっており、普段は四人でいる葉山隼人のグループからは必然と一人ハブられる事となる。その一人に自分がなりたくないのなら、誰かを蹴落とすしかない。結衣の実感のこもった重い声に誰もが黙り込んだ。

「…：では、その三人の中に犯人がいると見てまず間違いないわね」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺はあいつらの誰かが犯人だなんて思いたくない！それに三人を悪く言うメールなんだぜ。あいつらは違うんじゃないか」

「そうですね。その人達、それほど仲が良いとは思えないのですが」

「…：それは、どういうことだ、ヒキタニ君」

八幡の言葉に隼人は憤りと不安を見せる。

「だって、あの人達が三人で仲良く喋っているところなんて見た事ありませんから」

「…：何を言ってるんだ？今日だって俺はあいつらと…」

「あなたが入ってたら四人でしょうが」

「…：…！」

「私が思うに、葉山君抜きの関係は良好とは言えないのではないですかね。少なくとも、互いの悪口を平然と書けるくらいの仲ですよ」

「…：なんかそれ、分かる気がする。会話回してる中心の人がいなくなるって気まずいよね。それでつい携帯いじったりしちゃうし…」

「……そういうものなの？」

雪乃が結衣の服の袖を引きながら聞くと、結衣が困った顔をしながら頷く。隼人は予想だにしていなかった事態に狼狽し、手の平で顔を覆っていた。

「でも、どうして比企谷君がそれを知っているの？財布でも盗む機会でも窺っていたのかしら」

「……逆ですかね。盗まれないように警戒しているというか…無意識に周りの様子を窺ってしまうんですよ」

一年の頃に嫌がらせを受けた経験から、八幡は普段の学校生活でも警戒心を研ぎ澄ませるようになっていた。それがこんなところで役に立つとは本人も思っていなかっただろうが。

「とりあえず、その人達の事を教えてくれるかしら？」

「…分かった。戸部は俺と同じサッカー部で、見た目は悪そうだけど一番ノリのいいムードメーカーだな。文化祭とかでも積極的に動いてくれる、良い奴だよ」

「騒ぐだけしか能の無いお調子者、と…」

削られていた隼人のメンタルを更に削ぎ落す雪乃の人物評価。絶句して黙り込んだ隼人を不思議そうに見て、雪乃は、続きを、と促した。隼人はその一言に気を取り直して続ける。

「大和はラグビー部。冷静で人の話をよく聞いてくれて、マイペースさと静かさが人を安心させてくれるっていうのかな。寡黙で慎重な性格なんだ。良い奴だよ」

「反応が鈍い上に優柔不断…と」

「大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、良い奴だよ」

「人の顔色を窺う風見鶏、ね」

「……」

隼人も結衣も、雪乃の酷評を前に一言も発せず立ち尽くしていた。ちなみに八幡は軽く聞き流し、信女に『奉仕部にこの前さいちやんに茶々入れにきた奴から依頼きたお。ゆきのんギザ容赦ないお(笑)』というメールを送っていた。

三人の特徴を書いたメモとにらめっこをしながら、雪乃がうむむと唸る。

「どの人が犯人でもおかしくないわね。これだけじゃ、犯人を絞り込むのは難しいわね……」

「絞り込む方法ならありますよ」

携帯を閉じてポケットに戻した八幡の言葉に、雪乃の目がメモから離れる。

「……聞かせてもらえる？ 一体、どうしようというの？」

「簡単ですよ。葉山君が三人のうち誰と組もうとしているのかを、それとなく匂わせればいいんです。それでチェーンメールが止まれば組もうとした二人のうちのどちらかが犯人。止まらなければハブラれた人が犯人です」

「なるほど。仲間外れにされるのを恐れてチェーンメールを送っているのなら、仲間外れにならない事が分かれば止まり、仲間外れになっってしまったなら更に続く、というのね」

「ええ。もし三人全員が同じことをしていなければ、ですが」

「……その可能性もあったわね」

当然ながら、チェーンメールのアドレスは全て違うもの。それ故に、容疑者全員が犯人であるという可能性も否定できない。どんどん広がっていく不信感に、隼人は疲弊しきっていた。

「何にせよ、この方法なら最低一人は犯人が分かるんですからやってみましょうよ」

「…そうね。葉山君、それでいいかしら」

「……分かった。けど、一つだけいいかな？もし犯人が分かったら、まずは俺がそいつと話をしてみる。それでチェーンメールが終わればそれっきりって事にしてほしい」

「……どうします？」

「……まあ、再教育を葉山君が請け負うという事なら構わないわ、由比ヶ浜さん、あなたはどうか……由比ヶ浜さん？」

「………え？あ、う、うん、いいと思うよ……」

暗い表情でずっと黙り込んでいた結衣だったが、雪乃に話しかけられてハツとすると、曖昧な笑みを浮かべて頷いた。雪乃も八幡もその事が少し気がかりであったが、それについて触れるでもなく、解散となった…。

## バカと天使と疑心暗鬼

隼人が奉仕部に来た翌日の学校、八幡は教室であるグループを眺めていた。金髪でチャラい男が大げさに肩を落とし、イケメンとデカい男とちっちゃい男が苦笑いをしていた。どうやら、一人仲間外れにされたのは戸部になったようだった。これでチェーンメールが治まれば、犯人は大和か大岡。治まらなければ戸部という線が濃くなる。ないわー、酷いわー、と騒いでいる戸部に興味を無くした八幡は携帯を取り出す。と、ここで携帯の画面を遮るように手が八幡の視界の外から飛び出てきた。

「おはよ」

「おはようございます」

隼人とは違う爽やかさを感じさせながら、彩加が微笑み交じりに挨拶をする。

「比企谷君はさ、もう職場見学のグループ分け、誰と行くか決めちゃったかな?」

「いえ、決まっていませんが…なんなら一緒に行きますか?」

「……いいの?」

着ている体操服の裾をキュツと掴み、上目づかいで彩加が尋ねる。その姿に少し言い知れぬ感情を抱きながらも八幡は頷いた。彩加は不安そうな表情を一変させ、ぱあっと花が咲いた様に笑った。

「良かった、僕もまだ誰と行くか決まっていなかったから…」

「そうですか。あと一人に心当たりはありますか?」

「ううん。比企谷君は?」

「残念ながらいませんね。ま、余り待ちでも構わないでしょう」

「そうだね…」



話は終わったとばかりにまた携帯を取り出す八幡。しかし、彩加はまだ八幡の席から離れず、唐突に手を差し出してきた。

「よろしく、比企谷君！」

笑顔の彩加に押されるように、八幡は差し出された手を握り返す。彩加はそれで満足したのか、手を小さく振って自分の席へと戻っていった。八幡はしばらく呆然とした後、携帯の電話帳機能を開き、『さいちゃん(男)』から『さいちゃん(天使)』へと登録名を変更した。

~~~~~

戸部が仲間外れになってから数日が経った。部室にて、雪乃がチーンメールがまだ続いているかを結衣と隼人に確認する。

「それで、まだ続いているのかしら」

「ううん…めつきりこなくなつたよ。ね、隼人君…」

「……………ああ」

沈痛な面持ちの隼人に、同じく気まずそうな結衣。たとえば続いているようがいまいが、犯人は彼らの身近な人物になるのだから当然なのであろう。

「そう…なら犯人は恐らく大岡君か大和君ということになるわね」

「……………ねえ隼人君、本当に話すの？」

「……………そのつもりだよ」

ふっと、地面に視線を落としながら隼人が嘆息する。八幡はいつも

の仏頂面で隼人を観察していた。

「大丈夫、根は良い奴だから話せば分かってもらえるよ」

「……だといいのだけれどね」

雪乃が冷めた目で隼人を見る。隼人はそれに苦笑いを返すと、荷物を持って部屋から出ていこうとする。しかし、出ていく前に八幡が隼人を呼び止めた。

「葉山君、犯人が二人のどちらか分かっているのですか？」

「…ああ。確証はないけど、な」

「できれば教えて頂きたいのですがね」

「…っ……それは勘弁してもらえないか？ほら、結衣もいるし、犯人が誰か分かったら結衣の反応でばれちゃうかもしれないし……」

「うっ……それは否定できないなあ……」

結衣が苦笑して頭を掻くと、隼人も同じく苦笑しながら片手を顔の前に持つてきて拝む格好をして口を開く。

「頼む、ここだけの話って事にしておいてくれ」

「……分かりましたよ」

「ありがとな」

隼人は胸を撫で下ろし、足早に奉仕部から去っていった。

「由比ヶ浜さん。彼はああ言ったけれど、もしまた同じ内容のチェーシメールが送られてきたなら教えてちょうだい。更生できていないのなら今度は奉仕部の仕事になるわ」

「あ、うん。分かったよゆきのん」

とりあえず依頼が終わり、雪乃は読書を始めてそれに結衣が絡む。

しかし、八幡の濁った瞳は隼人が去っていった方向を見たまま動かなかった。この時、八幡は見逃していなかった。犯人を教えてくれと言った時、隼人が一瞬返答に詰まった事を。それが意味するものは、恐らく……

~~~~~

職場見学のグループが決まっていく中、八幡は隼人達のグループを観察していた。特にギクシヤクしているわけでもなく、隼人は大岡とも大和とも普通に話している。その様子を見た八幡は、奉仕部で隼人が去っていった時に自分が抱いていた疑惑を確信へと変えた。

——葉山隼人は犯人と話をしていない。

元々は犯人探しではなく、丸く収める方法を奉仕部に依頼してきた隼人。恐らく犯人をはっきりさせて波風が立つのを防ごうとしたのだろう。しかし、現実残酷。そんな隼人の思惑とは裏腹に解決するには犯人を見つけ出すしかないと宣告され、さらに容疑者は近い人物達。丸く収めるどころか自分のグループの關係にヒビが入る事は避けられなかった。

だが、容疑者を絞り込む過程でチェーンメールが止んだことで、あの意味丸く収まった状態になった。葉山隼人は犯人を見つけ出すのではなく、放置して有耶無耶にして波風を立てない事を優先した。戸部達と接点のある結衣を引き合いに出せば、雪乃や八幡も下手に介入できず、自分が犯人と話をしていない事がばれる事は無いと見越して。

「……大方、こんなところでしょうかね」

パズルのピースを組み合わせ終わった八幡は頬杖をついた。隼人に尋問すればこの推理が合っているかどうかの確認は無理矢理にでも取れるだろう。しかしする気は無かった。そこまで肩入れする理由は無いらしい、犯人を特定しなくても損をするのは隼人だけなのでどうでもよかった。

「(あんな薄っぺらい友情ごっこがそこまで大切なんですかねエ……)」

比企谷八幡には葉山隼人が守ろうとしたものが理解できなかった。表面だけ笑いあい、奥底では互いを罵っているかもしれない周囲の關係が。犯人が誰なのかはつきりしないまま、疑惑を押し殺して平然と過ぐす環境が。八幡にとって滑稽としか思えない今の状態を何故守ろうとするのが。

「(……そういえば、あと一人どうしましょうか)」

理解出来ないので考えるのを止めたところで、まだ班員が一人決まっていない事を思い出した。クラスのひとつがグループを決めてしまっているの、そろそろ余りになる人が分かってくる頃である。とりあえず彩加に声をかけ、余っている人を誘いに行こうと決めた時――

「ヒッキー!!」

「うおう……」

机に力強く両手をついて、由比ヶ浜結衣が詰め寄った。勢いに押され、八幡は変な声を出しながら後ろへのけ反る。その後ろには、彩加がにこにこしながら立っていた。

「職場見学、あたしも一緒に行くからね！」

「これでグループ完成だね、比企谷君！」

「……………えっ」

本日、総武校にて、比企谷八幡は予想外の出来事に見舞われた。

## 凡人少女の告白

試験期間の一週間が終わり、試験結果が返ってくる日の午後、職場見学は始まった。葉山グループから外された戸部は、結衣の進言で三浦優美子と、メガネ少女の海老名姫奈とグループを組んだ。それ以外のもの、見学場所一ヶ所につき一グループだけは特に決まっていなかったため、グループから外されたとしても隼人と一緒にいることができるからである。この間叩きのめされたのが尾を引いているのか、優美子も結衣が八幡や戸塚と同じグループになることにとやかく言っただけでこなかった。

ちなみに試験結果は八幡が学年一位で雪乃が二位。結衣も雪乃との勉強会が実を結んで大きく点数を伸ばした。

職場見学の場所はそれなりに有名な電子機器メーカー。単なる研究施設だけではなく、近隣に解放されたミュージアム等のアミューズメント性を兼ね備えた企業である。

いつものグループ+αで歩いている隼人と、ひそかにファンが増えつつあり今もまとわりつかれている彩加を眺めながら、八幡は距離を保って後ろから歩く。時折面白そうな物や興味を惹かれたものを写メに撮っては、信女や他のメル友にウザったい口調のメールで送りつけている。一人ではあるが、八幡は八幡なりに職場見学を楽しんでいた。

「……比企谷、こういう時くらいは携帯から手を放したらどうだ？」  
「何か悪いことをしているみたいに言わないで欲しいんですがね」

いつもの白衣を脱ぎ、見回りに来たであろう平塚静が八幡を見て呆れながら声をかけた。

「そんなつもりはないが、傍から見れば良い印象は受けないぞ？」  
「これだから凡人は嫌になります。つまらない事ばかり気にして…」  
「そう言うな、最近のマナーとか色々と目を付けられやすいんだ」

不承不承に携帯をしまう八幡を見て、静は満足そうに頷く。

「そうだ、比企谷。例の勝負のことなんだがな…」

「勝負？……ああ、勝った方が負けた方をどうこう出来るってやつですか。どうでもいいのですっかり忘れてました」

「どうでもいい？勝てばあの雪ノ下雪乃に何でも言うことを聞かせられるんだぞ？」

「どうせ本気じゃないんですよね？そんなのに付き合ってられませんよ」

飾られている多種多様な機械を眺めながら取るに足らない事のように呟く八幡に、静は眉を寄せてムツとした表情を作る。

「本気ではないとはどういう事だ？私や雪ノ下が約束を破る人間だとしても…」

「どうせあれ、その場の勢いで言っただけなんですよ？勝負なのに期間が設けられてませんしね。スポーツみたいに大会とかあればそれで勝敗が決められますが、奉仕部にそんなものある訳無し。何人来るかも分からない依頼人を待ち続け、明確な終わりも決められていない。これで本気だと言われても信用できませんね」

静はぐつと言葉に詰まった後、大きく息を吐き出した。

「君は少し、物事を細かく考えすぎていないか？もう少し適当にしていってもいいと思うがな…」

「適当に生きてるダメ人間の代名詞みたいな事言わないでください」「ぐう……と、とにかくだ！勝負の方は不確定要素があったから、一部

仕様を変更させてもらおうぞ」

「そうですね。好きにしてください」

「……新しい仕様が決まったら改めて連絡する」

「はいはい」

機械の世界に入り込んだ八幡からどうでもよさげな返事しか返ってこないのも、静は軽くへこみながらも他の場所の見回りへと戻った。

~~~~~

思いのほか機械の世界にどっぷりハマってしまった八幡は、だいぶ遅れて出口へと到着する。誰もいないと思っていた八幡の目に入ったのは、近頃よく見かけるお団子ヘアの少女だった。

「あ、ヒツキー……」

「おや、まだいたんですか」

由比ヶ浜結衣が縁石に座り込んでいて、八幡の姿を見つけると立ち上がって傍へと歩み寄る。

「他の皆さんはどうしたんですか？」

「サイゼに行っちゃった」

「そうですね。あなたは行かなくてよろしいので？」

「……うん」

そう言った結衣の顔は、西日に照らされているにも関わらずどこことなく暗かった。八幡はただ黙って、そんな結衣を見ていた。……否、次の言葉を待っていた。



「……あのさ。あたし、ヒツキーに言わなくちゃ……ううん、謝らなくちやなんない事あってさ……」

八幡は頭の片隅で、やつぱりそうか、という思いがあった。グループの中では空気を讀んで自己主張をするタイプではない結衣が、わざわざ自分とグループを組むなんて何かある、と薄々は思っていたのだ。そして、その内容も……

「……一年生の時の入学式の朝にヒツキーがサブレを助けてくれて、そのお礼、すぐにしたかったんだけどさ……ヒツキー別のクラスだし、あたしも自分のクラスで友達作りとかやって……あはは、なんか言い訳っぽいね……」

「構いせんから続けてください」  
「うん。それで、ちよつと時間開いちゃったけど、改めてお礼に行こうと思つてたんだ。でも……」

結衣の言葉が途切れる。そこから先を言うのを躊躇う結衣の心境を讀み取り、代わりに八幡が口を開いた。

「私が嫌がらせを受けていたから、行くに行けなかったんですよね？」  
「っ!!………うん」

結衣が顔を伏せて、弱々しく肯定する。そのコミュニケーション能力の高さから、結衣は一年生の頃から上位カーストの一員だったのだろう。そんな彼女が当初嫌がらせを受けていた底辺カーストと言つても過言ではない八幡の元に向かえば、彼女が今後どんな扱いを受けるのかは両人とも簡単に想像できた。だからこそ八幡は気にしておらず、結衣は罪悪感に押し潰されていた。

「別にそこまで思い悩まなくても結構ですよ。あなたの介入があつて

もさして状況は好転しなかったでしようし」

「……かもしれない。ううん、むしろヒツキーに迷惑かけちゃう結果になったかもしれない。……でも、それでも私は動けなかった……ヒツキーは、他人のあたしの家族を守ってくれたのに、あたしは、ヒツキーのために動くどころか、見て見ぬふり、しちやった……」

由比ヶ浜結衣は後悔していた。手を差し伸べようともしなかった事を。我が身をかえりみずに犬を救った恩人を、我が身可愛さで助けにすら行かなかった事を。

「なのに……今更のこのこ出てきて……何もなかったみたいと話して……あの時……あたしが弱くて……助けに行けなくて……ごめん……」

か細い声を震わせながら言葉を紡ぐ結衣を、八幡はモノクル越しで静かに見ている。目に溜めていた涙が一筋、結衣の頬を流れ落ちた。八幡はため息を吐くと、ハンカチを取り出して結衣に差し出した。

「あれくらいの事をそう深刻に捉えないで下さいよ。それにあなたは凡人で私はエリートなのですから、どうにか出来なかったとしてもあなたを恨んだりしませんよ」

結衣は無言でハンカチを受け取って目元を拭う。

「だから凡人のあなたは凡人のできる範囲の事をしなさい。凡人がエリートの真似をしても辛いだけですから」

「……でも……」

「それに、何かするだけがその人を助ける手段じゃありません。ただ隣に座っているだけでも救われる人がいることを、あなたは知るべきだ」

「……………ふえ？」

結衣が不思議そうに八幡の顔を覗く。八幡の目はいつも通り腐っている。しかし、モノクル越しに覗いた瞳は謎の輝きを放っていた。

「私は助かっていますよ、あなたが奉仕部にいてくれて。そのお蔭で、あの部屋に行くのもさして苦ではなくなりました」

「え、ええっ!? そ、そんな事ないよ…あたし、なんもしてないし…」

「あなたがどう言おうがエリートが言ってるんですからそうなんですよ。エリートは正しい。エリート偉い。はい復唱」

「え、えりーとは正しい…って何言わすのさ!？」

羞恥と怒りで顔を赤く染めた結衣。八幡はそれを無感動を装って見ていたが、口元がほんの少しだけ緩んでいた。

「…じゃ、じゃあ…これからも奉仕部にいていいの? 教室でも、ヒッキーとお喋りしたりしていいの…?」

「お好きにどうぞ。あ、言っておきますけどあなたが奉仕部からいなくなったら、雪ノ下さんが本物のぼっちになりますから」

「…ヒッキーは友達になる気は無いんだ…」

「ありませんね、少なくとも今は…」

「……そっか」

ハンカチを八幡に返し終わった結衣の目は、もう潤んではいなかった。

「じゃあ……これから友達としてよろしくね、ヒッキー!」

「もうメル友なんですが……まあいいか」

「よし! なら友達になった記念にカラオケでも行こう! さいちゃんも今から呼ぼう!」

「なら信女さんと隼さんでも呼びますか…」

「え、隼さんって歌うの!? そんな人に見えなかったけど!？」

「ええ、ヴィクトリーマシンロボとか血の流れとかノリノリですよ。」

信女さんは愉快な晴天の日とか振り付け交えて歌ってます」  
「想像できない!!」

こうして一人のエリートと一人の凡人は本当の意味での友達になつた…。

## エリートとの束の間過ぎる休日

結衣と友達になってから数日後の休日。八幡は信女と一緒に複合商業施設マリンプシアに訪れていた。というのも、奉仕部に入ってから放課後の帰宅時間まで学校にいる事が多くなってしまうので、一緒にいる時間が大きく削られてしまっているのに不満を漏らした信女のご機嫌をとるためである。勿論、八幡も信女と一緒にいたいと強く思っているので渡りに船であるが。

「ごめんね八幡、この間のカラオケに付き合っただけであげられなくて」「いやほんとですよ。臈さんは暇だったから二つ返事で来たのに、綺麗どころが来なくてどうするんですか。戸塚君がいなかったら気まずい感じで終わってましたよ」

職場見学の帰りに八幡と結衣は彩加と臈を誘ってカラオケへと行った。信女も誘っていたが、用事があつたので来られなかった。臈とは一回顔を合わせただけの結衣は微妙な感じになっていたが、そこは彩加が間に入って上手く取り成してくれたのだ。最後は全員で24時間テレビのテーマになった曲を合唱するなど、奇妙な一体感さえ生まれていた。

「とつつきにくい臈とあんなに喋れるなんて、さいちゃんは凄いな」「まったくですね。臈さんもなんだかんだで戸塚君の事を気に入ってるみたいですよ」「あの才能を腐らせるのは勿体ない……とか言ってたよ。八幡の目じゃあるまいし、さいちゃんは腐らないよね?」「むしろどこにいても輝きますよ。私の目と違って」

他愛無い話をしながらモール内を散策する二人。信女がふと目に入ったスカートを手に取る。

「八幡。ロングとミニ、どっちが良いと思う?」  
「ミニですかね」

八幡が即答し、信女は脇目も振らずにレジへと一直線へ向かった。ミニスカートを購入した後も散策を続けると、今度は八幡がブルーレイディスクを手にとった。

「信女さん。SFアクションと恋愛ラブコメディー、どっちが見たいですか?」

「……両方かな」

こんな感じで甘々しきなど皆無の二人のデートは続いていく。一通り周り終ってカフェで一息ついていると、聞き覚えのある声が八幡の名前を呼んだ。

「比企谷君?……あ、やっぱり比企谷君だ!」

「やつはろー!偶然だね!」

私服姿の彩加と結衣、そして雪乃がそこにいた。

「どうも。皆さんそろってお出かけですか?」

「勉強会も兼ねてよ。……由比ヶ浜さんがどうしてもというから」

「由比ヶ浜さんに甘くありませんか?」

「……あなたには関係ないでしょう」

ふいっと顔を逸らした雪乃に、ゆきのん可愛いと騒ぎながら結衣が抱き着く。雪乃は鬱陶しそうにしながらも振り払おうとはしなかった。どうやら雪乃と結衣の仲もそれなりに進展しているようだ。

「今井さんもやつはろー!」

「うん、やつは……ろー?変わった挨拶ね」

「あはは、由比ヶ浜さんが考えたんだってさ」

抱き着くのを止めた結衣と信女の視線が交差する。初めて会ったとき、犬のリードの事で責められた記憶が蘇って、結衣は思わず視線を逸らせた。

「あれから、サブレは元気？」

「……は、はい……」

「そう。なら良かった。八幡から話は聞いている。八幡の友達なら私も友達。そんなに畏まらなくてもいいよ。同い年なんだから」

「……ありがとう」

結衣を安心させるように優しく微笑む信女に、結衣も胸を撫で下ろして笑顔を返した。

「……比企谷君。彼女は確か、前に見せてもらった……」

「覚えていましたか。そうですよ、未来の嫁です」

「……へ、嫁え!？」

「そう、嫁」

雪乃が前に彼女の写真を見せてもらった時のことを思い出し、八幡が答えたところに結衣の絶叫が割り込む。信女は何故か胸を張っていて、彩加はどう反応すればいいか分からずに頬を掻いていた。

「まあ、立ち話もなんですから座ってはいかがですか？あなた方が座れるスペースはありますし」

「……そうしよっか？」

「まあ、構わないけれど」

「あ、その前に飲み物買ってこようよ」

三人が飲み物を買うためにレジに並んだ隙に、信女は八幡の隣へと

移動した。その顔は少し満足そうだ。八幡が信女の顔を眺めていると、三人がコーヒーを手にして戻ってきて信女が座っていた方のソファへ座る。

「さいちゃんとゆいにゃんは知ってるけど、ゆきのんと顔を合わせるのは初めてね。初めまして、今井信女です」

「初めまして、雪ノ下雪乃です。……比企谷君、あとで私達を彼女にどう説明したかを教えてもらおうよ?」

「信女さん、私の携帯の登録名で呼ばないでください」

「冗談。てへぺろ」

につこり笑う雪乃から視線を逸らし、信女に非難の視線を送るも、当の本人は頭に拳骨を当てて舌を少し出していた。結衣と彩加が苦笑いしている中、雪乃が信女に向き直って話しかけた。

「ところで今井さん、あなたに聞きたい事があるのだけど、構わないかしら?」

「聞きたい事?なに?」

「この男に何を握られて一緒にいるのかしら。場合によっては断罪に手を貸すわ」

「ゆきのん!?!」

いきなりとんでもない事を言い出した雪乃に驚愕の声を上げる結衣。一方、信女は顎に手を当てて考え込んでいた。

「何を握られているか、っていうなら…」

「何?何なのかしら?」

「……………私のハート、かな」

真顔で言い切った信女を前に、その場にいた全員がぽかーんとした表情になる。一番早く我に返った八幡が片手で顔を覆ったため息を



吐いた。

「あの、信女さん…恥ずかしいのでそういう事言わないでもらえませんか？」

「何で？聞かれたから答えただけだよ？」

「…わざとですか？」

「言わなくても分かるでしょ？エリートなんだから」

「…あなたは本当にもう…」

やれやれと首を振る八幡と少し悪戯っぽい笑みを浮かべる信女を見て、雪乃と結衣がちよつと悔しそうに、彩加が羨ましそうな表情をした。このままだとずつと見せつけられそうなので、結衣が強引に勉強へと流れを持っていく。

「じゃ、じゃあ勉強しよ、勉強！」

「勉強？確か総武校の試験は終わったんじゃないの？」

「終わったけど、ほら、日ごろの予習復習が大事だってよく言うじゃん？ヒツキーもゆきのんも頭良いし、奉仕部であたしだけ馬鹿なのってなんか格好悪いし…」

「僕は今回の試験、ちよつとだけだけ点数下がっちゃったから一緒にやらせてもらってるんだ。成績が下がったら昼休みにコート使わせてもらえなくなっちゃうし…」

「そうなんだ。あ、そういえば私も昨日、小太郎から問題集を貰ったからやってきたんだ。八幡に答え合わせを手伝ってもらおうと思って持ってきてるから、付き合ってくれる？」

「ええ、構いませんよ。…『攘夷志士採用試験問題集』？また変な名前付けて…」

題名に呆れながらも信女から問題用紙と答えを受け取り、信女は解答用紙を置いて赤ペンを構えた。イチヤイチャはあまり見たくないが、聞きなれない名前前の問題集に興味を湧いた三人が聞き耳をたてて

いる中、答え合わせが始まった。

問題1

次の漢字の読みを答えなさい。

真選組

答え

(カス)

「はい正解」

「やったー」

「いや待って!?!良いのそれで!?!」

「模範解答にそう書いてますから。他にもクズ、ゴミ、由比ヶ浜さんのクッキー等も特別に正解と書いてあります」

「嘘つけ!あたしのクッキーが書いてるわけないじゃん!!それあたしのクッキーがゴミだって言いたいのか!!」

「どうして漢字の読みで漢字が答えに入っているのかしら…」

問題10

攘夷志士五人と真選組七人が鉢合わせしました。斬りかかってくる攘夷志士に真選組は二人斬られ、負けじと真選組は攘夷志士を三人斬りました。途中で攘夷志士が三人応援を読んで真選組を三人斬り、真選組は攘夷志士を二人斬りました。

ジャッキーの鼻はいくつでしょう

答え

(一つ)

「何その問題!?!」

「流石のぶめさん、よくこのひっかけ問題を回避できました」

「えへへ」

「どこがひっかけ!?!どこにひっかかるの!?!」

### 問題23

宇宙を構成している成分を四つ答えなさい。

答え

(ダークエネルギー、水素原子、ヘリウム原子、お妙の卵焼き)

「残念、不正解です」

「なんで!？」

「今井さんどうして正解だと思ってたの!?!卵焼き入ってたけど!?!しかも名指しで!」

「納得できない。みんなお妙の卵焼きの事をダークマターって呼んでるよっ!」

「落ち着いてください。宇宙の年齢は約138億年とされているのは知っていますね?もしお妙さんの卵焼きが宇宙の構成物質に含まれていたとしたら、宇宙の創生時からお妙さんは存在していたことになり、お妙さんの実年齢が138億歳ということになってしまいます。ですからこれは間違いです。ただのダークマターって書いておけば正解だったんですがね」

「なるほど、納得」

「もつと簡単に説明できたよね!?!」

頓珍漢な問題を真面目に解いていく二人に突っ込みまくる三人。そうこうしているうちに問題の数も半分に差し掛かり、尋常じゃない喉の渇きで頼んだ飲み物も空になった。小休憩も兼ねて飲み物のおかわりを全員で貰いに行こうと立ち上がろうとした時、

「あ、お兄ちゃんだ!おーい!」

八幡の妹、比企谷小町が手を振りながら走ってきた。そしてその隣には…

「ど、どもっす…」

見慣れぬ男を目の当たりにし、八幡のモノクル越しの目に殺気がこもった。

## 檻樓切れドレスのシンデレラ（前編）

「……偶然ですな小町さん。それでその男は誰なのでしょうか？返答によっては私が前科者になってしまうかもしれません」

「ちよいちよいちよい！何しようとしているのか知らないけど落ち着いて！ただ話を聞いてあげてただけだから！」

瞳に殺気を漲らせながらゆらゆらと歩く八幡の前で、小町が通せんぼをしながらなだめる。小町に庇われた男は八幡の目を見て少し怯えながらも、おずおずと頭を下げて自己紹介を始めた。

「は、初めまして、川崎太志つす。比企谷さんとは同じ塾なんすけど、ちよつと相談させてもらってて……」

「相談って何ですか？来月までに返すから五万円貸してとかですか？そんな事この兄の目が腐っているうちは許しませんよ」

「それって一生許してもらえないってことじゃん……。ていうか、こうなったらお兄ちゃんも話聞いてあげてよ。ほら、奉仕部って部活やってるんだしさ」

「お願いします、お兄さん！もうお兄さんしか頼れる人がいなくて……」

「あなたに兄と呼ばれる筋合いは……」

「まあまあ、八幡落ち着いて。とりあえず話を聞いてあげようよ。小町とそこの君も座って？」

「信女さーん！」

兄と呼ばれて殺気が増した八幡を信女がなだめ、小町が名前を呼びながら信女に抱き着いた。ソファに座りなおした面々は自己紹介を開始する。

「やー、どうもー。比企谷小町です。兄がいつもお世話になっておりますー！」

「八幡の妹さん？初めまして、クラスメイトの戸塚彩加です」

「あ、同じくクラスメイトの由比ヶ浜結衣です」

「雪ノ下雪乃です。比企谷君の……比企谷君の何かしら……クラスメイトでも友達でもないし……誠に遺憾ながら、知り合い？」

「エリート捕まえて遺憾とはね。むしろ居る事に感謝してほしいんですが」

「やー、エリートエリートうるさいと思いますが、仲良くしていただけるとありがたいです」

「安心していいわ……ええと、小町さんと呼ばせてもらっても構わないかしら」

「あ、はい。同じ比企谷ですからややこしいですよー。皆さんも小町と呼んでくださいー！」

「ありがとう。では小町さん、安心してもらっていいわ。比企谷君の更生は私が請け負っているから」

「おー、それは頼もしいですね！良かったねお兄ちゃん、こんな綺麗な人にかまってもらえてー！」

「ここではない、と答えたら未来の嫁に斬り殺されてしまうんですが……」

慈愛に満ちた笑みを浮かべる雪乃を見てテンションを上げる小町だが、キラーパスを受けた八幡のテンションは逆に下がっていった……。

と、ここで置いてけぼりをくらっていた太志が声を発した。

「あ、あの……俺はどうすればいいすかね？」

「……ああ失礼、君の存在を失念していました。それで、相談とはなんでしょうか」

「はい、あの、比企谷さんと同じ塾に通ってる川崎太志つす。相談っていうのは、最近、姉ちゃんが不良になったっていうか……あつ、姉ちゃんは皆さんと同じ総武高の二年で、川崎沙希っていうんすけど……」

太志の姉を名前を聞いて、何かを思い出したように結衣が手をポンと叩く。

「あー、川崎さんでしょ？ポニテの、ちよつと怖い系っていうか…」

「偶然にも同じクラスでしたか。話したことはありますか？」

「んー、あるけど……あんまし仲良くはない、かな」

「僕も無いなあ……というか、川崎さんが誰かと仲良くしてる所、見たこと無いような…」

「ふむ、戸塚君もそうでしたか…」

結衣が遠慮がちに言い、彩加が顎に手を当てて川崎沙希の記憶を探しだす。八幡も同じく沙希についての情報を思い出すが、答えは彩加と同じものであった。

「あ、でも最近遅刻が多くなったよね。今日もそれで呼ばれてたし」

「そういえばそうだね。不良っていうのかどうかわからないけど…」

「遅刻くらい誰でも……と言いたいところですが、確かに回数が増えていきますね」

遅刻が多い、という新しい情報が出され、雪乃は少し思案してから太志に話しかけた。

「お姉さんが不良化したのはいつぐらいからかしら？」

「は、はいっ！えっと、姉ちゃん、総武高行くぐらいだから中学の時はすげえ真面目だったんす。それに割と優しかったし、よく飯とか作ってくれたんす。高一ん時もそんなに変わんなくて……。変わったのは最近なんすよ……」

年上で美人の雪乃に聞かれて緊張した面持ちの太志だったが、話すにつれて姉への心配が募って表情が曇っていく。

「変わったのは二年生になってから……何か思い当たることはある？」

「無難なところでクラス替えじゃない？F組になつてから」

「つまり、比企谷君と同じクラスになつてからということね」

「さつき川崎さんは誰とも仲良くしてないって言っていましたよね。私  
は原因ではないと思いますが。一緒のクラスにいるだけでおかしく  
なるとか、病原菌じゃあるまいし…」

「あなたが原因なんて言っていないわ。被害妄想が過ぎるわよ、比企  
谷菌」

「懐かしいですね、それ。小学生の頃に鬼ごっこと同じノリで周りが  
やってみましたよ。比企谷菌ってバリア効かないんですつて。バリア  
貫通持ちなんてあらゆるゲームで重宝されますよね」

「そんなゲーム誰も買わないわよ…」

小学校の頃の黒歴史とも言える事を平然と言う八幡。あまりにも  
ポジティブな言い草に雪乃は呆れた表情を浮かべる。

「でもさ、帰りが遅いつていつても何時くらいなん？あたしも割と遅  
かったりするし、高校生ならおかしくないんじゃないかな？」

「はあ、まあそうなんすけど……でも五時過ぎとかなんすよ…」

「遅っ！それもう朝になつてんじゃない！そんなんじや遅刻もするよ  
…」

「そ、そんな時間に帰ってきて、ご両親は何も言わないの？」

「うちの両親つて共働きなんすよ。それに下に弟と妹いるから、あん  
ま姉ちゃんには口うるさく言わないす。それに時間も時間なんで  
滅多に顔合わせないし…。まあ、子供も多いで結構暮らし的にいっ  
ぱいいっぱいなんすよね」

「君は話していませんか？」

「たまに顔合わせでもなんか喧嘩になつちやいますし、俺がなんか  
言つても、あんたには関係ない、つてキレるし…」

「……成程」

深刻そうに肩を落とす太志。八幡は腕を組んで天井を仰ぎ見なが



ら思案を始めた。

「(人との交流がないのなら、誰かに悪い影響を受けて不良化したとは考えにくい。家族である太志君の証言通りの性格なら、自ら悪い道に堕ちたとは考えられない。少なくとも心の底から悪くなつてはないのでしよう。優しい姉があんたには関係ないって言ったのなら、家族を巻き込みたくないか、十中八九その人に関係ある事か……だとすれば……)」

「家庭の事情、ね……。どこの家にもあるものね」

「……雪ノ下さん？」

思案に耽っていた八幡を現実呼び戻したのは、雪乃のいつにない暗い声音だった。その顔はともすれば、今にも泣きだしそうな程に陰鬱なものだった。俯いたせい、太陽を雲が隠したせい、八幡が名前を呼んだタイミングで雪乃の顔に影がかかり、表情を詳しく見る事は叶わない。しかし、力なく肩を落とした様子から、短い溜息が漏れた事は想像がついた。

「何かしら？」

「……ああ、いえ、なんでも……」

「そう……」

顔を上げた雪乃の表情はいつもと変わりなかった。あの一瞬、雪乃の表情に影が差した事を頭の片隅に押しとどめ、再び太志達の話に耳を傾けた。

「それに、最近、なんか変なところから姉ちゃん宛てに電話がかかってくるんすよ……。エンジェルなんとかつていう、多分お店なんすけど……店長って奴から」

「……何か変なの？」

「だ、だって、エンジェルっすよ!? もう絶対やばい店っすよ!」

「え、全然そんな感じしないけど…」

「いやいや、私には分かりますよ、川崎太志君の気持ち」

「太志。男の子なら当然だよ、そう思うのは」

「い、今井さん！お兄さんっ！」

「できれば兄と呼ばないで欲しいんですがね。ついうっかり撃っちゃいそうなので」

エンジェルという単語に過剰に反応する太志を理解できない結衣。しかし、八幡と信女はその単語にほのかに漂うエロティシズムを理解して肯定する。信女に至ってはサムズアップをする始末である。

「とにかく、どこかで働いているのならまずはその特定が必要ね。学生が朝方まで働いているのはまずいわ。早く突き止めてやめさせないと」

「事はそう簡単ではないと思いますがね」

「うん…ただやめさせるだけだと、今度は違う店で働き始めるかもしれないし…」

「ハブとマングースですね」

「……それは、いたちごっこと言いたいのかしら」

「小町さん、馬鹿が露呈するから多人数が集まっている中で不用意に発言するなど言っているでしょう？それにハブとマングースは天敵でも何でもないです。出会ったところでまず戦いません」

見当はずれの事を言った小町の言葉を雪乃が訂正し、八幡が口を開くなど釘を刺す。しかし当の本人は八幡に向けて舌をペロツと出して誤魔化していた。

「つまり川崎さんに対して、対処療法と根本治療を同時にやる必要があるということね」

「……ちよつと待ってください。相談された私はともかく、何故あなたの方が参加するんですか？」

「いいじゃない。川崎太志君は本校の生徒の川崎沙希さんの弟なのだし、ましてや相談内容は彼女自身の事よ。奉仕部の仕事の範疇だと私は思うけれど」

「そうだよ。川崎さんとは仲良くはないけど、もう色々聞いちゃったし、見て見ぬふりなんてできないよ」

「僕は、奉仕部じゃないけど……でも何か力になれるかもしれないし、お邪魔じゃないなら付き合いたい、な……」

「私だつてきつと力になれる。仲間外れはいや」

「みんなでやろうよ。ね、お兄ちゃん？」

矢継ぎ早に繰り出された言葉の波に、さしもの八幡も返す言葉が見当たらず、静かに首を縦に振った。

~~~~~

翌日、奉仕部に集まった四人は早速作戦会議を始める。信女がエンジェルと名の付く市内の店の情報を調べている間、奉仕部は沙希自身に問題を解決させるように動くことになった。ちなみに肝心の沙希は今朝も遅刻をし、遅刻指導で静に呼び出されてお説教をされているためまだ学校にいる。

「それで、具体案は何かあるのでしょうか」

「アニマルセラピーって知ってる？」

「あー、動物と触れ合ってストレス解消！みたいなやつ？」

「ええ。それで誰か猫を飼っている人はいないかしら？」

「えっと……僕は飼ってないなあ……」

「うち、犬ならいるけど……」

「できれば猫の方が好ましいわ」

「その方面は詳しくないので分からないのですが、何か猫の方がいい

理由でもあるんですか？」

「特に無いけれど……とにかく犬は駄目なのよ」

ふいつと視線を逸らした雪乃を怪しんだ八幡だが、特に追及することなく放っておいた。

「なら、うちの猫でも持つてこさせますかね。今の時間なら小町さんも家にいるでしょうし」

「ええ、お願いできる？」

「まあ、大丈夫でしょう」

小町に電話をかけてから二十分ほど校門で待つと、小町がカマクラを入れたキャリアケースを片手に持つて颯爽と現れた。

「ごめんなさいね、わざわざ来てもらって」

「いえいえー、雪乃さんの頼みとあらばこれくらいー！」

キャリアケースの上部を開け、中にいるふてぶてしい顔の猫、カマクラを抱えて小町が笑う。雪乃の立てた算段は、このカマクラを段ボール箱に入れて沙希の前に置いておき、その反応を窺うというものだ。もしも沙希の心が動かされたならば、きつと拾うと予想したらしい。雪乃が司令塔、彩加と結衣が見張り、小町が連絡役、八幡が段ボール箱を沙希の前に置く係と役割を分けて待機する。

校門近くで待機していた、段ボール箱に入ったカマクラの近くにあら人影が近づいてくる。他でもない、雪ノ下雪乃である。雪乃はきよろきよろと周りを見渡し、誰もいない事を確認するとしやがみこんでカマクラに目線を合わせる。

「ニャー」

カマクラが鳴き声を上げる。雪乃は少し頬を赤く染めると、

「にゃー」

と鳴き返した。

「ニャー」

「にゃー」

今度は同時に鳴く。

「ニャー」

「にゃー」

「はい、にゃー」

カシヤツ、というカメラのシャッター音がしたとともに、雪乃が勢いよく振り返る。そこにはいつものように携帯をいじっている八幡がいた。

「うちの猫、そんなに気に入りましたか？ 飼い主として鼻が高いですね」

「比企谷君、盗撮で訴えられたくないなら今すぐ撮ったものを消しなさい」

「別に猫が好きなのなんて恥ずかしい事でもないでしょうに…」

怒りか羞恥か、顔を赤くしながらもその声はいつも以上に冷たかった。八幡はピッピッピッとボタン操作をすると、携帯をたたんでポケットに戻した。

「そもそも、あなたには待機命令を出したはずだけれど、そんな簡単なこと一つ…」

「ああ、そのことですけど、太志君情報で川崎沙希さんは猫アレルギー」

だそうです。だからそれを伝えに雪ノ下さんを探してたんです。どうせあなた、私のメールなんて見ないでしょうから」

八幡に向けた怒りの感情が一気に冷め、固まって棒立ちになる雪乃を後目に八幡は踵を返す。

「由比ヶ浜さん達にはもう伝えてますので、もう中止でもいいですよね、この作戦。私は先に皆さんの元に戻ってますから、十分くらい戯れてもいいですよ」

返事も聞かずに立ち去った八幡。雪乃はカマクラの鳴き声で正気に戻り、たつぷり十五分戯れてから合流した。

~~~~~

雪乃がカマクラの入った段ボール箱を抱えて合流すると、結衣と小町が目を輝かせながら雪乃に熱い視線を送っていた。彩加の視線も心なしか優しい。

「……………何？私の顔に何かついてるの？」

「……………これ！ヒツキーから送られてきたの！」

興奮気味の結衣が携帯の画面を雪乃に向ける。

---

From 八っちゃん

Sub 激写

ゆきのんがうちのカーくんと一緒に鳴いてたお☆(〓・・・・〓)

へにゃー

ギザかわゆす☆☆☆

もうゆきのんじやなくてゆきにゃんだネ。登録名変えようかにゃー？

八幡からのメールには当然、さっきの画像が添付されていた。雪乃はわなわなと震えて八幡を睨むが、感極まった結衣と小町が雪乃に抱き着いた。

「ゆきにゃあああああん!!!」

「ゆきにゃんさあああああん!!!」

「きやつ!?!」

カマクラも交えて揉みくちやになる三人を見て、八幡はまた写メに撮ろうかと思つたが、彩加の諫めるような視線を受けてそつと携帯を閉じた。

しばらくして抱き着いた二人が満足して雪乃を解放し、小町が良い笑顔でカマクラを連れて帰っていった。次の方法を考えていると、彩加が恐る恐る手を挙げて発言する。

「あの、平塚先生に言ってもらつていうのはどうかな? ご両親だと距離が近すぎるから言えないような事でも、他の大人になら相談できるとんじやないかなあ?」

彩加の真つ当な提案に雪乃と結衣は納得する。しかし、八幡は同意しかねていた。

「方法はさておき、平塚先生は……」

「平塚先生は他の教師に比べて生徒への関心は非常に高いと思うわ。」

人選としてはこれ以上ないんじゃないかしら」

「まあ、それはそうなんですけどねエ。あの人、たまに授業でも結婚できないう事とか、未だに独身なの嘆くくらいですから…」

「結局、何が言いたいの？」

「端的に言えば、舐められてるのではないかと」

「……………」

親しみがあると言えば聞こえはいいが、裏を返せば教師としての威厳が無いともとれる。心当たりが無いとも言切れないのか、雪乃だけでなく結衣と彩加も黙ってしまった。

「……………ま、一応連絡しておきますよ」

「……………お願いするわ」

不安な空気の中とりあえず昇降口に静を呼び出して状況を説明すると、不敵に笑って八幡の肩を叩く。

「我が校の生徒が深夜まで働いているのならゆゆしき事態だ。今回に限っては私が解決しよう。なあに、君達は見えていたまえ。来る直前に川崎は解放しておいたから、あと二分ほどでここにくるだろう」

静の宣言通り、沙希は気怠そうな足取りで欠伸を漏らしながら昇降口に現れた。八幡達が隠れて様子を窺う中、静は沙希に声をかける。

「川崎、待ちたまえ」

「……………何か用ですか？」

呼び止められ、振り返った沙希の目は半目に細められていて、まるで睨んでいるような印象を受ける。声も妙に刺々しく、まるで威嚇されているみたいだった。



「君は最近家に帰るのが遅いらしいな。一体、どこで何をしているんだ？」

「それ、誰から聞いたんですか？」

「クライアントの情報は明かせないな。それよりも質問に答えたまえ」

余裕の笑みを崩さない静に対し、沙希は気怠そうにため息を吐いて言葉を返した。

「別に、どこでもいいじゃないですか。誰かに迷惑かけたわけじゃないし」

「これからかけるかもしれないだろう。君は仮にも高校生なんだぞ？補導でもされたら、ご両親も私も警察から呼ばれることになる。君は親の気持ちを考えたことが無いのか？」

「……先生」

真剣な面差しで沙希を真つすぐと見て言葉をぶつける。沙希はその剣幕に一瞬たじろぎ、そして同じく静を真つすぐと見つめた。

「親の気持ちなんて知らない。ていうか、先生も親になったことないからわかんないでしょ？そういうの、結婚して親になってから言えば？」

「ぐはあっー！」

沙希の言葉は静に悪い意味で届いたようだ。精神ダメージを受けた静はバランスを崩してよろめいた。そこに沙希の追撃が襲う。

「あたしの将来の心配より自分の将来の心配した方がいいって、結婚とか」

「……ぐっ、くうう……」

静は瞳をうるわせて返す言葉も出ず、精神ダメージで膝をやられてその場に崩れ落ちた。なまじ敵を倒すためだけの言葉ではなく、本気で何割か心配されているのも効いたようだ。沙希はさっさと駐輪場に消えていき、その場にはすすり泣く静が残された。

「先生可哀想…」

「……比企谷君」

「我々は何も見えていません。そう、結婚していないせいで教え子にズタボロにされた先生なんていませんでした。そういう事にしておきましょう。それがお互いのためです」

雪乃に何とかしろと背中を押されたが、エリートでもどうにもできないので無かったことにした。

「そんな事よりたった今、信女さんからメール来ましたよ。どうやら千葉市内で名前にエンジェルと付くバイトを募集している店は二ヶ所あるようです。一ヶ所は『メイドカフェ・えんじえる』というメイド喫茶。もう一ヶ所は『エンジェル・ラダー 天使の階』というロイヤルホテルの最上階のラウンジバーです」

「そう…なら、そのどちらかでバイトしている可能性があるわけね」

「ええ。恐らくはラウンジバーの方でしょうが」

「え？…なんで？」

「同じ時間帯でも、バーの方がバイト代が良いんですよ。こんな無茶な稼ぎ方するほどお金が欲しいようですから、少しでもバイト代が多く出る方を選ぶはずですよ」

「そっか…」

「なら、一旦家に戻って着替えた後にホテルで落ち合いますよ。こういう場所は大人しめな格好でないと入れないわよ」

「ゆ、ゆきのん…あたし、そういう服持ってないかも…」

「ほ、僕もあるかどうか…」

「……それなら、由比ヶ浜さんには私の服を貸してあげるから一緒に

来て。戸塚君は悪いけれど、家に無かったら諦めて頂戴」

「わ、分かった…」

「ゆきのんの家に行けるんだ…ちょっと楽しみかも」

「じゃ、ホテル・ロイヤルオークラで合流ということだ」

傷を受けた静が駐車場に消えたの知らぬまま、八幡達は着替えに  
一旦家へと戻った…。

## 檻樓切れドレスのシンデレラ（後編）

ホテル・ロイヤルオークラのホールのソファに座り、私は雪ノ下さんと由比ヶ浜さんを待っている。戸塚君はどうやらドレスコードを突破できる服が無いようで、残念ながら行けないというメールがさつき届きました。まあ、普通の高校生にはあまり縁のない場所ですし仕方がないでしょう。とか何とか考えていると、めかしこんだ二人組がこちらに向かつて歩いてきました。

「お、お待ちせ…」

深紅のドレスを着たいつもよりも大人っぽい由比ヶ浜さん。いつも見慣れている童顔の彼女の姿はここにはありませんでした。お団子ヘアはアツプに纏められていて、普段見えないようなじの白さは圧巻です。本当に彼女なのかと疑うレベルです。

「な、なんかピアノの発表会みたいになってるんだけど、変じゃない？」

ああ、よかった。頭の悪さは健在のようです。とはいえ、言わんとする事は分からなくもない。小学生くらいの子がそんな恰好をすれば、まさしく由比ヶ浜さんの言う通りピアノの発表会の格好です。あなた高校生ですけど。

「せめて結婚式くらいのこと言えないの？このレベルの服装をピアノの発表会と言われるのは少し複雑なのだけけど…」

由比ヶ浜さんをコーディネートしたであろう雪ノ下さんが身に纏っているのは漆黒のドレス。滑らかな光沢が彼女の白い肌を引き立て、長い黒髪は一つに纏められて胸元へと垂れ下がる。思い出すのは、初めて奉仕部へと連れてこられたあの日。やはり彼女は芸術品の

ような神秘的な美しさを秘めている。

「だって、こんな服着たの初めてだもん。ゆきのん、マジで何者？おっきいマンションで一人暮らしか凄すぎだよ」

「大袈裟ね、たまに機会があるから持つているだけよ」

確か彼女、建設会社社長で県議会議員の父親がいましたね。……たまに、というのが少し引っかけますね。一人娘なら、後継ぎということで結構色んな場所に連れて行って紹介するものだと思つてましたが。まあ、今は関係ないから忘れるとしましょうか。

「それにしても、ヒッキーの格好つて…」

「何です？私、ベタ塗り忘れた真選組じゃありませんよ？」

「何を言っているのよ…。まあ、見ようによつてはタキシードに見えなくもないけれど…」

はて、そんなにおかしいですかね、私の格好。あ、ひよつとしてこの間こぼしたカレーうどんのシミが残っていたとか？おかしいな、ちやんとクリーニングに出したのに。

「ま、多少のことはエリートが目くらましになりますから大丈夫でしょう」

「……はあ。今更着替えてもらう時間も無いし、行きましようか」

会話を打ち切つて雪ノ下さんがエレベーターの最上階のボタンを押す。……ああ、この浮遊感はデパートのやつとは全然違う。音も無いし、こういうところのエレベーターって気合い入ってますよね。

「由比ヶ浜さん。初めに言っておきますが、バーに入つても初めて遊園地に来た子供みたいにキョロキョロしないでくださいね。みつともないから」

「はあ!? し、しないしそんなん! ヒツキーキモい!」

注意してあげたのに、何故私がキモい呼ばわりされなければならぬのでしようかね。というか、彼女らが使うキモいって明らかに本来の意味以外の意味が隠されていますよね。何でもかんでもキモいで済みますから、ギャルは馬鹿だつて印象が拭えないんでしょう。由比ヶ浜さんはほんとに馬鹿ですけど。

最上階に着いて扉が開き、広がる光景はまさに別世界。薄暗い空間に灯された優しい光が、この店の格式の高さを物語っているようです。雰囲気があるというか、ムードがあるというか、LED電球で明るく照らされている店とは一線を画す内装です。ラウンジバーなんて行ったことありませんが、全部が全部こうなんでしようかね。エリートじゃなければ足がすくんで動けなくなってしまいそうです。現に一般庶民で凡人の由比ヶ浜さんは、セレブっぽい雰囲気にも吞まれてしまったようです。

「由比ヶ浜さん、私と同じようにして」

「うえ? う、うん…」

優秀な凡人セレブの雪ノ下さんが助け船を出したようで、私の右肘をそつと掴んでくれました。それに倣って、由比ヶ浜さんも私の左肘を掴んで指を絡みつけてきます。やれやれ、こういうことは信女さん以外にはしたくないんですがねエ。

歩きながらバーをぐるっと見渡すと、バーカウンターにポニテの女性が一人、グラスを磨いていました。ギャリソンの男性に導かれ、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんを先に座らせた後に私も座る。レディーファーストってここでも有効なんでしょうか。川崎さんのコースターとナッツを差し出した手が、私のところでピタッと止まった。

「……………比企谷?」

「どうやら私に気づいてしまったようです。声音から歓迎していない事は明白ですが、特に慌ててもいいようです。」

「こんばんわ、川崎さん。よく気づきましたね、服がかなり違うというのに」

「片眼鏡かけた珍しい顔なんて、そうそう忘れないでしょ」

「……確かに」

「そっちの二人は由比ヶ浜と……雪ノ下か」

「ど、どもー……」

「こんばんわ。探したわよ、川崎沙希さん」

雪ノ下さんを見る彼女の表情が険しい……。由比ヶ浜さんと呼んだときはそうでもなかったのに、雪ノ下さんと呼んだ声には敵意が込められていた。二人の視線が交差すると、何故だか火花が散っているように見えました。さして繋がりもないのに仲が悪いのでしょうか？別段不思議ではないですけどね。雪ノ下さんは敵を作りやすい人間ですから。

「そっか……ばれちゃったか」

隠し事がばれたにしては、思ったよりも冷静……。いえ、諦めたといった方が正しいですかね。壁にもたれかかって虚空を眺める彼女の瞳……。あれを私は知っている。私がまだエリートとしての自覚がなかった頃、小町さんが家出をしてしまった直前の日の瞳に良く似ている……。

「……何か飲む？」

「私はペリエを」

「あ、あたしも同じのをっ!？」

「MAXコーヒー、ストレートで」

隣の二人が驚いた顔を見ているすが、川崎さんは少し吹き出して、かしこまりました、と言って用意を始める。このエリートジョークが通じるとは、川崎さんは中々できる人間のようです。小町さんに言っても、じゃあ小町はフオークで！とか言いそうだから。

コースターに飲み物を置くと、川崎さんは浅い溜息を吐いて我々を見る。

「で、何しに来たの？まさかそれとデートってわけじゃないんでしょ？」

「まさかね。横のコレを見て言っているのなら、冗談にしたって趣味が悪いわ」

「私もう未来の嫁いますから。それよりも川崎さん。あなた、最近帰るの遅いそうではありませんか。弟さんが心配していましたよ」

もう私の扱いについては何も言わないことにしましょう。時間の無駄です。川崎さんは私の言葉に、ハッと人を小馬鹿にした笑いを返した。

「そんな事わざわざ言いに来たの？ごくろー様。あのさ、ただのクラスメイトのあんたにそんな事言われたくらいでやめると思ってるの？」

「別にやめたくないならやめなくていいですよ。あなたが好きでこういう事やってるならね」

「……なっ……」

私の切り返し方を予想していなかったのか、川崎さんは言葉に詰まってしまったようです。ま、今の反応で彼女が好きでバイトしているわけじゃないって事が分かりましたけど。そもその依頼内容は川崎さんを優しい姉に戻すこと。バイトを続けるかどうかなんて本人次第ですから口出しする気はありません。私は。

雪ノ下さんは私を横目で睨んでいる。私の言い分が納得できない



のでしょようね。川崎さんも負けじと私を睨んでいます。別に怖くもなんとも……やっぱりちよつと怖いです。

「やけに周りが小うるさいと思つてたらあんたたちのせいかな。太志が何言つたか知らないけど、あたしから太志に言つとくから気にしないでいいよ。……だから、太志と関わらないでね」

「そんな言葉鵜呑みにするだけでも？ 弟と口きいても喧嘩や逆切れするよ。うなあなたが言つたところで信用できませんね。エリートに戯言が通じると思わないように」

「……あんたに関係ないでしょ」

喧嘩ばかりという自覚があるのか、川崎さんは目を伏せてしまつた。しかしその声からは、関係ない奴はひっこんでいろ、という意味表示がありありと感じられます。

「止める理由ならあるわ」

雪ノ下さんが左手につけた腕時計で時間を確認する。

「十時四十分……。シンデレラならあと一時間ちよつと猶予があつたけれど、あなたの魔法はここで解けたみたいね」

「なら、最後は王子様が迎えに来てくれるハッピーエンドが待つてるだけなんじゃないの？」

「それはどうかしら、人魚姫さん。あなたに待ち構えているのはバツドエンドだと思ふけれど」

横で繰り広げられる皮肉と当てこすりの舌戦を聞きながら、私は苦い気分を甘いMAXコーヒーで流し込む。

……見ていて痛々しい。川崎さんは王子様が迎えに来てくれると言つてましたが、それはありえない。そんな事は彼女が一番理解している筈なのに。彼女は虚勢を張つてまで、自分一人で抱え込んでい

る。

「……ねえ、ヒツキー。あの二人何言って…ヒツキー？」

由比ヶ浜さんが私に何か聞こうとして、再度私の名前を呼びながら顔を覗きこんでくる。ああ、今の私はさぞかし目が腐っていることでしょう。自覚していますよ。

「やめる気はないの？」

「ん？無いよ。……まあ、ここはやめるにしても他のところで働けばいいし」

酒瓶の手入れをしながらあつさりと言った川崎さんの態度が気に障ったのか、雪ノ下さんがペリエを軽く煽った。ピリピリした空気の中、由比ヶ浜さんが恐る恐る口を開く。

「あ、あのさ、なんでここでバイトしてんの？あ、やー、あたしもお金ないときバイトするけど、年誤魔化してまで夜働かないし…」

「別に、お金が必要なだけだけ」

由比ヶ浜さんはそんな事聞きたいんじゃないよ。あなたは何にお金を使うのか、それが知りたいだけですよ。……なんて、言わなくても分かってますよね、この人。どうやら理由については確固として話す気は無いようです。……いや、もうほとんど分かっているのですが。

「お金が必要なのは分かっているんですがね…」

「分かる筈ないじゃん。あんたに…いや、あんただけじゃない。雪ノ下も由比ヶ浜にも分からないよ。別に遊ぶ金欲しさに働いてるわけじゃない。そこの馬鹿と一緒にしないで」

道化を演じて引き出した情報と、彼女の気持ち。どうせ誰にも理解してもらえないという諦め。理解してほしいという僅かな願望。邪魔をするなという力強い意思。助けてほしいという心の奥底に隠した叫び。彼女の中で相反する感情がせめぎあっているのは、こちらを鋭く睨みつけながらも潤んだ瞳が教えてくれました。

「でも、話してみないと分からない事ってあるじゃない？もしかしたら、何か力になれるかもしれないし、話すだけで楽になれることも…」  
それは道理です。正しい考え方です。しかしね、恐らく彼女はその選択肢を自分の意思で断ち切りました。それは彼女が太志君の言っていた通り、優しい姉だったから。

「言ったところであんた達には絶対分かんないよ。力になる？楽になるかも？そう、それじゃ、あんた、あたしのためにお金用意できるんだ。うちの親が用意できないものをあんた達が用意できるんだ？」  
「そ、それは……」  
「……どうせできないんでしょ？できもしないのに綺麗事ばっか言わないだよ」

……親が用意できない程の大金。それを川崎さんは稼ごうとしている。大人が用意できない額のお金を高校生がバイトで稼ぐ、そんな事は無理だと分かっているはずなのに。

もうこれで確信が持てました。川崎さんは自分の学費のために働いているのですね。太志君によれば、家庭は兄弟が多く共働きでも生活はいつぱいいつぱい。加えて太志君は塾に通っている。しかし、生活はできているし塾にももう通っているのですから、生活費や太志君の塾の費用の足しにするために年齢を詐称してまで働くというのは考えにくい。

……だとすれば、今後必要になるお金のために働いている。総武高校は進学校であり、ほとんどの生徒が大学受験を希望し、また実際に

進学しています。高校二年のこの時期から受験を意識したり、夏期講習を受けようと思う人も多い。川崎さんもその一人だったのでしよう。しかし、大学の学費やその他諸々の費用…生活が厳しい家庭でそのことを切り出すのは難しい。親に言えばさらなる資金の問題に頭を悩ませることになり、太志君に知れば自分が塾に行っているせいだと自分を責めるかもしれない。親にも、弟にも迷惑をかけたくなかった彼女は、一人で解決する道を選んだ。

…そんな道など無いと分かっているても。

薄々感づいてはいたんでしよう。自分がやっていることがどれだけ無謀なことか。いつか破綻すると分かっていたから、彼女の瞳には諦めの感情が映っていた。…あの時の小町さんと同じ、誰にも相談できず、それでも自分が何とかしようと思っただけの悲壮な決意の瞳。

「そのあたりでやめなさい。これ以上吠えるなら…」

…だというのに、何故あなたは彼女を敵視しているのでしょうか、雪ノ下さん。

確かに彼女の行いは褒められたものではない。彼女の態度は悪かったと言わざるを得ない。しかし、誰よりも救いを求めていたのは彼女自身なんです。誰よりも悩み、愚かな行為だと知りつつも突き進んだ。彼女は責められて然るべきでしょうが、それだけで終わってはいけない。あなたの言葉では断罪はできても救済はできない。正しくないからと切り捨てるべきではない。

——分かりませんか？彼女は魔法などかけられていない事が。

——見えないのですか？彼女が来ている檻褻切れのドレスが。

——想像できないのですか？ 舞踏会に行けず、それでも王子様に会いたいと願いつけて、ひたすら雑用をこなす哀れなシンデレラの姿を。

やはり、今のあなたには人を救うなんて不可能だ。世界はあなたの声に耳を傾けない。なぜならあなたもそうだから。氷の女王は庶民の声を聞こうとはしない。

「……吠えているのはあなたでしょう、雪ノ下さん」

横槍を入れられて、雪ノ下さんが私に黙れと目で言っている。由比ヶ浜さんも川崎さんも驚いている。知ったことではない。

「あなたの出る幕ではないわ。邪魔を……」

「邪魔なのはあなたの方なんですけど」

言葉を遮られ、邪魔だと言われた雪ノ下さんの視線がますます険しくなっていく。……こういう言い方、好きではないんですが致し方ありませんね。無理矢理にでも追い出さないと、この人は川崎さんを攻撃し続けそうですから。

「私の記憶が正しければ、あなたの父親は県議会議員で建設会社の社長さんでしたよね？ お金に困ったことのないあなたが、お金に困っている川崎さんの心情なんて分からないでしょう？ だから引っ込んでくれませんかね」

カシャン、とグラスが倒れる音がする。やはり、家族の話題は彼女にとって何らかのタブーに引っかかるのでしょうか。雪ノ下さんは唇を噛みしめ、顔ごと視線を下に落としている。

「ちよつとヒツキー！ゆきのんの家の事なんて今、関係ないじゃん!!」  
「ええ、そうですね。ですがこうでも言わないと黙ってくれそうになかったもので」

由比ヶ浜さんが私に怒鳴る。しかし私の顔を見て何かを察したのか、不承不承という感じで黙った。

「すいませんが、下のホールで待っていてくれませんかね。彼女とサシで話がしたい」

「……………分かった。でも、あとでちゃんと説明してもらってからね。……………いこ、ゆきのん」

由比ヶ浜さんが雪ノ下さん連れ出してくれました。彼女には迷惑をかけてしまいましたね。さて、邪魔者が消えたところでゆっくりと話をしますか、事態についていけずに呆然と立ち尽くしている川崎さん？

## 姉弟と兄妹

「……何のつもり?」

川崎さんが私を怪訝な目で見てきます。まあそうでしょうね。複数人で説得しにきたと思つたら、いきなり喧嘩して帰つたんですから。

「あの人がいると話になりそうになかったのね」

「いなくなったから話すと思つてんの?」

また彼女は人を小馬鹿にしたように笑う。そんな甘い相手ではないのは百も承知ですよ。

「話さなくても結構。分かってますから。川崎さん、あなたはご自分の学費のために働いているのでしよう?」

「……っ、何を根拠に…」

「その台詞が正解と認めているようなものです……なんて馬鹿な事は言いませんよ。あなたの家の経済環境、総武高の進学希望者の多さ、太志君から聞いたあなたの性格を吟味した上で導き出したただけですよ」

「……流石、エリートエリート言ってるだけはある、って事か…」

私つてそんなにエリートエリート言ってますかね?…言ってますね。

「……でも、分かったから何?あんたにだつてどうにか出来る訳ないんでしょ?なら、余計な口出ししないでほつといてよ」

開き直ったのかどうか知りませんが、川崎さんはむしろ饒舌になつて反抗的な目をしながら言い放つ。確かに彼女の言う通り、私は今すぐ学費を肩代わりできるだけのお金を用意できません。……そもそもそ

もそんな事請け負ってませんし。

「とりあえず、この事は太志君にメールで伝えておきますから」

「っ!!太志は関係ないでしょ!余計なことしないでよ」

「余計なこと?彼の不安を取り除いてあげることが、余計なことだど?」

「そうよ……家族でも何でもないあんたに、バイトのこととてやかく言われる筋合いなんてない……」

「……あのねエ、彼がどれだけ心配しているか、あなた本当に分かっています?」

「あんたに言われたくないね。ならあんたは分かっているの?本当は分かっているにせよ、知ったような口きかないですよ」

そうやって、川崎さんはグラスを拭きながらギロリと私を睨む。

……この人、何故太志君が小町さんや我々に相談するまで思い詰めていたのが、まるで分かっているみたいですね。男の私だから分かったんでしょうかね?よく考えたら、この人に遠慮する理由なんてありませんでしたね。この人のせいでここまで駆り出されたとも言えますし。

ならいいか。自分のしでかしたことを、全部突き付けてあげましょう。

「じゃあ言わせてもらいますよ。太志君はね、あなたが夜な夜な援助交際したり、売春したり、お金で○○<sup>ピー</sup>を売ったり、挟んで吸ったり擦ったり、見知らぬおっさんの上で腰振ったり、○○<sup>ピー</sup>とか○○<sup>ピー</sup>とかか拳句の果てに○○○○○○○○<sup>ピー</sup>とかしてんじゃないかって心配だったんですよ」

……なんででしょう、元々静かだった店内が一層静かになったような気がします。まあ気にしてもしようがないのですが。川崎さんは



私を見たまま硬直しています。グラスを拭いていた手が止まり、段々と顔が真っ赤に染まってきました。おお、初々しい反応。そういう耐性はありませんでしたか。

「ば、バカじゃないの!?!いきなり何言い出してんの!?!」

「太志君も年頃ですからねエ。そういう考えに至るのも仕方ないと思います」

「あたしがそんな事するわけ……」

「それ、本気で言ってます?」

川崎さんの言葉を遮る。いや、雪ノ下さんもですがあなたも大概、人の事を考えてませんね。この場合、男の気持ちと言った方が正しいですけど。

「美人の姉が夜に誰にも行き先を告げずに出かけて朝帰り。何を聞いても話してくれない。いかがわしい事してるんじゃないかと勘ぐったって何もおかしくはないでしょうが」

「け、けど……」

「それに加えて、今度は知らない店から電話が来て、その店の名前も怪しい。誰かに相談していなければ、もう彼の頭の中では確定してしまっていますよ」

優しいお姉さんが自分たちのために、体を売ってお金を稼いでるってね。川崎さんの学費については彼は知らないでしょうが、どっちにしろお金には困っていたようですし。私達に相談したから怪しい店云々は笑いごとで済むレベルでしたが、身内の彼は相当悩んだことでしょう。一番頼りになる両親が頼れないのなら尚更ね。

「デリケートな話ですから、他人に話すのには抵抗があったはず……なのに彼は私の妹に相談しました。つまりそれほど追い詰められていたんですよ」

さつきまで赤かった川崎さんの顔色がみるみる青くなっていく。今更気づいたって遅いんですけど。色んな人を巻き込んだお仕置きと二度とこんなことをしないように釘をさすのを兼ねて、もうひと押ししておきましょうかね。」

「川崎さん、確か弟だけでなく妹さんもいらっしやいましたよね？いくつかは知りませんが、例えば妹さんが高校生くらいになったとして、毎晩どこかに出かけて朝に帰ってきて、どこに行っていたか聞いても関係ないの一点張りを通されたらどう思います？」

「……………」

「更に妹さん宛てに聞いたことのない店から電話までかかってきたら、放っておくなんて家族にできる訳ないと思えますがね。……で、川崎さん、余計なことがなりましたっけ？」

顔面蒼白で呆然とする川崎さんを眺めながら、私はナツツをかじってMAXコーヒを飲む。いやはや、ここまで効果があるとはね。家族思いの優しい人だから妹を引き合いに出せば理解できると思いますが、効果は想像以上でした。いつそやり過ぎたまであります。

「……………あ、あたし……………なんてこと……………。そんな、つもりじゃ……………」

なにやらブツブツ呟きだした川崎さん。瞳には先程までの鋭さも力強さも無くなっていました。涙目でオロオロと動き、手にしたままのグラスも落ちてしまっそうです。自分が何をしていたのかを理解して、その罪の意識に潰されているようですね。自業自得なんですが、流石に可哀想になってきました。一応、家族のことを思っただけの行動ですから。

「とにかく、一度ご両親と太志君と話すべきです。このままではいけない」

「……………でも、お金は…」

話し合うよう勧めますが、なおも川崎さんは大学資金の事を言いたくない様子。家族に心配をかけたくない、迷惑をかけたくないという気持ちは分かります。……………ですが、

「例え解決できそうになくても、それでも話すべきです」

悩みを一人で抱え込まれ、頼られない事は辛いんです。もしも奇跡が起きて、川崎さんがバイトで大学に行くためのお金を用意できたとして、それをご両親や太志君に見せたらどのような反応をするのでしょうか？諸手を挙げて喜ぶのでしょうか？

そんなはずはない。きっと自分を責めたててしまう。問題に気づけなかった事を悔やむでしょう。川崎さん一人に押し付けてしまった事を呪うでしょう。

「……………何で、あんたはそこまで…」

俯いていた川崎さんが顔を上げて、私に問いかけてくる。正直、この事言うのは恥ずかしいんですがね…。でも、今の彼女を動かすには嘘を吐くわけにはいきません。

「私が自分がエリートだという自覚がなかった頃…小学生くらいの話なのですが、妹の様子が少しおかしいのに気が付きましたね」

“ ……おい小町、どうかしたか”

“ え？……………やだなーおにいちちゃん、こまちはどうもしてないよ？”

“ ……そうか”

そうか、じゃないでしょう凡人だった昔の私。妹が何かを抱えてい

たのは分かっていたのに、何故それで終わってしまったのですか。きっと大丈夫だろう、だとも思ったのでしょうか。

その翌日、小町さんは両親と喧嘩をして家出してしまいました。原因は小町さんが帰ってきてても家に誰もいないのが嫌だった事。私の両親も共働きで、私も放課後は一人で図書館とか寄り道ばかりしていましたから、小町さんよりも帰りは遅かったんです。小町さんに甘い傾向の私の両親も、その日は偶然にも虫の居所が悪かったようで、喧嘩にまで発展してしまっただけです。

小学生の足で行けるところなんてたかが知れていますから、小町さんはすぐに見つけることができました。しかし、あの時の事を私は一生忘れない。

“ごめんなさいおにいちゃん…こまちのために…ごめんなさい…”

私の胸に飛び込んで泣きじやくりながら、私に謝っていた小町さん。本当なら、回避できたはずなのに。ちゃんと話を聞いて、私が寄り道をするのを止めて早く帰ればよかったただけなのに。私が動かなかったせいで、小町さんを…妹を泣かせてしまった。

小町さんも川崎さんと同じく、家族に心配をかけまいとして黙っていたのでしよう。どうもしていないと言っていた時の瞳は、川崎さんの瞳と同じでした。抱えた問題を何とかしようとしても、自分にはどうにもできないと悟り、絶望に苛まれた瞳。

「……だからですかね。妹と境遇が似ていたせいかな、どうにも放っておけなくなりまして」

「……あんだ、シスコン？」

「否定はしません」

たまにそうかな、と自分でも思いますから。話を聞き終わった川崎さんの顔色は幾分か戻っていました。

「……分かった。あたし、話すよ。ちよつと怖いけど……」  
「ま、こつびどく叱られるのは覚悟した方がいいですよ」  
「……決心が揺らぐから止めてくれない？」

メールは送ってしまいましたから、どの道逃げられないんですけどね。しかし心配はいらないでしょうね。川崎さんの瞳には力が戻っていますから。

先に帰らせた二人の分も含めた三人分の会計を支払ったところで、私は携帯を取り出す。

「川崎さん、私とメル友になりましょう」

「……は？まあ、いいけど……」

川崎さんはすぐに携帯を取り出してくれましたが、顔に何で？って書いてますね。

「あなたの言った通り、私はあなたの親の代わりにお金を用意することとできません」

「……ごめん、あれは……」

「よろしいですよ、事実ですから」

川崎さんは申し訳なさそうに頭を下げてきましたが、私が言いたいのはそういう事ではありません。

「代わりにお金を用意できなくても、あなたが選べる選択肢を増やすことくらいはできますよ。エリートですから」

頼まれたとはいえ、ここまで首を突っ込んでしまったなら責任くらいはとりますよ。後味の悪い結末はご免ですから。

「何かあったらメールしてください。何もなくてもメールしてください」

「どっちにしろメールしろってことね…」

携帯をしまいながら苦笑する川崎さん。まあ依頼抜きでもメル友が増えるのは嬉しいんですけどね。

「……じゃあね、比企谷。また学校で…」

「ええ、それでは」

遠慮がちに少し笑った川崎さんに手を振り返し、エレベーターへと向かう。……あれ、これって問題解決してもしなくても学校で会いたって事ですか？違いますよね。

恥ずかしい勘違いをしながら、私はエレベーターのボタンを押した。

やはり比企谷八幡はエリートである。

川崎さんと別れた私はエレベーターで一階まで降りて、ホールのソファに座っている由比ヶ浜さんと雪ノ下さんの元へと向かう。雪ノ下さんはもう持ち直した様子で、戻ってきた私を睨みつけて……ないようです。こつちを見てはいますが、それほどキツイ視線は感じません。むしろ由比ヶ浜さんの方がキツイです。

「もう、終わったのかしら？」

「ええ、まあ……」

「ヒツキー、ちゃんと説明してよね！」

ドレス姿に似合わぬ剣幕でまくし立てる由比ヶ浜さんをなだめながら、私は川崎さんとのやり取りを全て話しました。もちろん○○も含めてです。その時だけ二人とも顔を朱に染めていましたが、川崎さんの行動がその可能性を否定できないと分かっていたただけたように、キモいだのなんだの罵倒は飛んできませんでした。

「……なら、川崎さんはご両親や弟さんと話をすると聞いたのね？」

「ええ。これにて依頼は達成しました」

「よかった……」

ほつと息を吐く二人。しかし、由比ヶ浜さんがハツとして再び私を睨んできました。

「でも、あの言い方は無いと思う」

「……そうですね。雪ノ下さん、先程はすいませんでした」

追い出すために致し方無いとはいえ、彼女の突いてほしくない部分を抉ってしまったのは事実。言った私も気持ち良くはありません。けじめをつけるために彼女に頭を下げて謝罪しました。

「……いえ、さつきは私も冷静ではなかったわ。あのままだったら、川崎さんを説得できなかったと思う、から……その、私こそ、ごめんなさい」

思わず頭を下げたまま顔を上げると、なんとあの雪ノ下さんが私に頭を下げていました。由比ヶ浜さんもびつくりして目をぱちくりさせています。驚きました。驚きました。大事なことなので二回言いました。きつと好機とばかりに責めたててくるであろうと思っていきましたから。

お互いに頭を下げたまま少したつと、ほぼ同時に頭を上げた。

「それでは、帰りましょうか」

「え、あ、うん、そうだね」

「送りますよ。夜中にドレス姿の女性だけというのは心配ですから」

「あ、ありがとう……」

「……そうね、お願いするわ」

……うーむ、いつもの彼女ではない。いつもなら、『あなたと一緒に歩いていると誘拐と勘違いされるから結構よ。あらごめんなさい、夜中だけでなく日中でもそうだったわね』とか言いそうなんです。持ち直したと思っていました、私の言葉が余程効いたのでしょうか。

雪ノ下さんの自宅は、ホテルからも見えるあの高層マンションの一室だそうです。由比ヶ浜さんが言っていたように一人暮らしらしいのですが、それにしても寮とかではなくマンションとはね……。確かあのマンション、前にテレビのコマーシャルに映ってましたね。詳しくは知りませんが、この辺りではかなりの高級物件のようです。流石、ブルジョワジーは違うと言わざるを得ませんね。

夜の冷たい風を肌を受けながら街灯に照らされた道を歩く。見慣れた街並みでも、夜つてだけで全く別の世界に見えるもんですね。川崎さんはいつもこの景色を見ながら帰宅していたのでしょうか。いや、



帰るのは朝方だからもつと明るいか…。

「……きょうだいつて、ああいうものなのかしらね…」

不意にぽつりと、雪ノ下さんが呟いた。これって私に言ったんでしょうかね？

「……あたしは一人っ子だからよくわかんないなあ…」

由比ヶ浜さんが夜空を見上げながら、その呟きに言葉を返す。雪ノ下さんは隣を歩いている由比ヶ浜さんに一度目をやった後、答えを催促するかにように私を見た。

「きょうだい皆が皆、仲がいいとは限らないのではありませんかね。逆に人から見て険悪そうでも、そこまで仲が悪くなかったりすることもありますし」

沖田総悟さんとミツバさん、志村妙さんと新八君のように誰が見ても良好な関係を築いているきょうだいがいれば、神楽さんと神威さんのようにしよっちゅう喧嘩しても仲がいいきょうだいもいますから。幾松さんの義弟はただのゲス白白バイバイでしたが。

「あなたと小町さんも仲が良さそうなものね。というよりも、あなたの一方的な溺愛に近いけれど」

「だね。ヒツキー、シスコンっぽいし」

「せめてシスコンエリートって言ってくれませんかね」

「せめての意味が分からないわ。……でも、仲がいいのは良い事だと思っわ。少し、羨ましい」

「ひよつとして、あなたにも妹が？」

「……いいえ、姉が一人よ」

「そうなんだ…」

それつきり誰も口を開こうとはしませんでした。雪ノ下さんの、姉について話したくなさそうな空気を由比ヶ浜さんも私も感じてしまいましたから。

マンションに着いて雪ノ下さんと別れ、着替えた由比ヶ浜さんを家まで送る。

「……ゆきのん、お姉さんと上手くいってないのかな？」

「さあ…あれだけでは判断しかねます」

由比ヶ浜さんは心配そうにマンションの方を振り返る。実際、本当に姉との確執があつたとしても、私達がどうこう言うのは難しい。何かを言えるほど、彼女や彼女の家族の事を知らないのですから。

「まあ、それほど気にする事でもないでしょう。下手に気を遣うと変な空気になりますし」

「……そうだね」

空気を読むのに長けている由比ヶ浜さんは、私の言った言葉に大きく頷きました。きっと前にも同じような経験をしたのでしょう。

「……あ、うち、もうすぐそこだからここままでいいよ。送ってくれてありがとね。おやすみ」

「そうですか？では、おやすみなさい」

由比ヶ浜さんは手を振りながら走っていく。私はまだ見ぬ雪ノ下さんの姉がどんな人なのかを考えてみながら自宅へと帰った。

~~~~~

翌日の朝、携帯を見るとメル友になったばかりのあの人からメールが来ていました。

---

From さきさきさん

Sub 話したよ

おはよ。起きてる？

帰ったら珍しく親も太志も起きててさ、凄い怒られた。あんたが言ってた通り、凄い心配かけることしてたって実感したよ。

深夜バイトは止めることになったけど、あたしの学費の事とかはまだ話しあってる途中なんだ。だからさ、あんたの知恵も貸してほしいんだ。選択肢を増やしてくれるんでしょ、エリートさん？

朝、校門で待つてるから。期待してるよ。

---

ふむ、どうやら仲直りはできたようですね。まだ川崎さんの学費という問題は残っていますが。なんか学校で待ち構えているようなんですが、いくらエリートでも昨日今日で完璧な解決策なんて思いつかないのがね。やれやれ、期待されるエリートはつらいですね。

「お兄ちゃん起きてるー？もう信女さん来てるよー」

「さも当たり前のように言ってますが、私は来るなんて聞いてないんですけど」

「未来のお嫁さん待たせるなんてポイント低いよー。早くしてねー」

「…はいはい」

聞いてませんねこの妹は。その日の気分で来る信女さんも信女さんですけど。まあそれはいいか。今は川崎さんです。一応対策はありますけど、うまくいくかどうか…。

「……八幡、どこの女の事を考えてるの？」

「なんで分かるんですかあなたは。別にやましいことはありませんよ。この間の川崎さんの事です」

「そう。ならいいや」

MAXコーヒーを飲みながら考え事をしていると、何故だか信女さんに考えていることを見抜かれました。以心伝心の関係だと喜ぶべきか、考えを読まれたことを怖がるべきか…。

信女さんと途中まで一緒に登校し、総武高へと着くとメール通り川崎さんが校門に背を預けてもたれかかっています。

「おはよ、比企谷。待ってたよ」

「おはようございます、川崎さん」

私を視界に捉えると、片手を上げて気さくに挨拶をする川崎さん。周りに偶然いたクラスメイトが好奇の目を我々に向けてきますが、川崎さんの一睨みですとこらと退散していきました。やっぱりこの人、眼光に迫力ありますよね。

「それでさ、メール見た？」

「見ましたけど…今考えついてるのは確実とは言えないんですが…」

「気にしないで。考えてくれるってだけでありがたいから」

「そうですか。なら、スカラシップってご存知ですか？」

教室に向かいながら、私はスカラシップの説明を続ける。スカラシップとは端的に言えば、成績優秀な生徒の学費の一部、もしくは全部を免除できる制度の事です。奨学金とは厳密には違うものですが、

奨学金と言ったほうがイメージしやすいかもしれませんが。このスカラシップ制度を実施している大学で好成績を納めることができれば、川崎さんの学費の問題は解決します。

しかし、さつきも言った通りこの方法は現実とは言えません。大学すべてにスカラシップ制度があるわけではありませんから、行きたい大学にスカラシップ制度がなかったならこの案は使えなくなります。まあ、スカラシップ制度は広まってきましたから、あまり危惧してはいませんが。

それにスカラシップを取るには好成績を常にキープする必要があります。たとえばスカラシップを取れたとしても、その後の成績が落ち込めば途中で打ち切られる可能性もあります。倍率もそれなりに高いですから、狙うのはハードルが高いでしょう。

「……と、こんな具合ですかね。詳しい事は私より、先生に相談した方が良いと思いますよ」

「うん、分かったよ。……色々ありがとう」

今まで肩にのしかかっていたものが無くなったせいか、川崎さんの微笑みは優しく柔らかいものでした。さつきは眼光に迫力があるなんて思っていました。この人こんな風に笑えるんですね。……なんか教室に着いてから嫉妬の視線を感じましたが、エリートはそんなもの気にしませんとも、ええ。同時に嫉妬の念が遠くから飛んできたような気がしましたが、そっちは覚えておきましょう。

~~~~~

川崎太志君からの依頼を解決してからは、いつも通り暇な放課後を過ごす我々奉仕部。暇なのがいつも通りっておかしいですよ。あれから川崎さんは本格的にスカラシップを狙うらしく、勉強に一層力

を入れています。授業の合間や昼休みに私のところに来ては、分からなかつた部分を教えたり普通に話したり昼食を食べたりしています。……アレ？半分以上勉強と関係なかった。

どうやら川崎さんは予備校にも通っていたらしく、そちらでもスカラシップを狙うみたいです。貪欲なのは良い事です。それで私も予備校に通わないかと誘われましたが、エリートには必要ありませんと断りました。そもそも通うとしたら私もスカラシップを取るようになりますから、川崎さんのライバルになってしまいます。私が薦めたのに私が邪魔になつては元も子もありません。なのに残念そうにしていたのは何ででしょうかね？

考え事に集中していたら、突然ガラツと扉が開かれる。まさか前の材木座君のような不審者が本当に押し入ってきたのかと、偶然持つてきていたエアソフトガンを抜きそうになりましたが、それが我が部の顧問の平塚先生だと顔を見て分かったところで抑えることができま

した。

「邪魔するぞ」

「……はあ」

もう雪ノ下さんは先生に注意するのを諦めたようです。由比ヶ浜さんは溜息を吐く雪ノ下さんを見て苦笑を浮かべています。

「先生、入るときはノックをしてください。不審者かと思つて危うく一発お見舞いするところでしたよ」

「ん？それは雪ノ下の台詞……じゃないな。もう発砲騒ぎは勘弁してくれよ？」

「ケースバイケース、ですよ」

やれやれ、と肩を竦めながら椅子を引いて座る平塚先生28歳独身様。いや、平塚先生の年齢なんて知りませんが。どこかの蛍の従者は真正面から堂々とこんな呼び方してましたが、この人の前で言った

らハエ叩きで潰されますよね。虫に人間の気持ちを分かれということも無茶な話ですが。

「何か、御用ですか？」

「ああ。あの勝負の中間発表をしてやろうと思っただけな」

「しようぶっ」

私と雪ノ下さんは理解しましたが、由比ヶ浜さんは分かっていない様子。そういえば、その時はまだいませんでしたね。平塚先生が由比ヶ浜さんに勝負の事を説明すると、由比ヶ浜さんは雪ノ下さんを見てうんうんと頷いた。恐らく雪ノ下さんが上手く挑発に乗せられたことを理解したのでしょう。流石は友達、良く分かってらっしゃる。

「それで現在の戦績だが、今のところは雪ノ下がリードしている。由比ヶ浜については、二人の勝負とは別にポイントを追加していく。もし二人よりも多くポイントを稼げたなら、それ相応のメリットを用意しよう」

「え？は、はい…？」

おや…私が雪ノ下さんに負けていましたか。独断と偏見ならそれも有り得ますが、私の方が雪ノ下さんよりも働いていると思うんですがね。

「リードしているといっても、これからの巻き返しは十分可能だ。うむ、接戦はバトルマンガの華だ。…個人的には比企谷の死を乗り越えて雪ノ下が覚醒、という流れを期待していたんだが」

そういう言い方されると、私を雪ノ下さんの踏み台にするために入部させようとした風に聞こえるんですけどね。何にせよ、その展開は私にとって気に入らない考え方ですけど。

「……平塚先生、何故私が比企谷君よりも高い評価を受けているのか教えていただけますか？」

「とうとう？」

「認めたくはありませんが、今までの奉仕活動において一番貢献しているのは比企谷君です。なのにどうして、私よりも評価が低いのですか？」

……まさか、雪ノ下さんが異議を申し立てるとは。自分が勝っている事は喜ばしい事であるはずなのに、彼女はこれを良しとしない。本当に呆れるほど真っ直ぐな人ですね。平塚先生も意外そうな顔をした後、しばし押し黙って考え込む。

「確かに結果だけを見れば比企谷は雪ノ下よりも優っている。しかし、比企谷のやり方はなんとというか……非道だ。話は聞いたが、戸塚の依頼では葉山達を利用したり、川崎の説得の際には雪ノ下に辛辣な言葉を吐いて無理矢理退席させたそうじゃないか」

ここで平塚先生は私を睨む。だってしょうがないでしょ、邪魔だったんだから。大人しく引いてくれたんなら、私だってあそこまでしませんでしたよ。

「先生、葉山君達の件はあちらに非があるのは明らかですし、川崎さんの時も、あの時の私は冷静ではありませんでした」

「だとしても、だ。葉山達の件はまだしも、同じ部員の雪ノ下を邪魔者にして追い出すなど、到底褒められたことではない。比企谷をここに置いたのは、あの捻くれた性格の更生もある。なのにこれでは悪化しているようなものだ」

雪ノ下さんが更に食い下がるが、平塚先生は聞き入れる気はないようです。



「やり方に問題があるから、この二件に関しての比企谷のポイントはプラマイゼロとなった。君はもつと人を傷つけないやり方を学べ」

私は内心、失笑していた。

傷つけないやり方？依頼人と邪魔者、どちらを優先するかなんて言うまでもないでしょうに。この人は本気で全ての問題に誰も傷つかない解決方法があるなんて思っているのでしょうか？エリートにすら覆せないものだってあるというのに。

「……申し訳ありませんが、今日は早めに帰らせてもらいますよ。少し考えたいこともありますから」

「……ふむ。まあ今日ぐらい良いだろう」

私がショックを受けているとでも思っているのか、案外快く応じた平塚先生。私は荷物を持ってさっさと部屋を出ていきました。

帰り道、私はこれまでの依頼について腕を組みながら考える。恐らく由比ヶ浜さんと材木座君の依頼の時はまだ同点だったのでしよう。私と雪ノ下さんは同じことをしていましたから。

問題はその後。先生が言っていた葉山君や三浦さんの乱入について、もつと他に良い方法が無かったか考えてみますが……まず無理でしようね。見たところ、三浦さんは自己中心的な性格のようでした。雪ノ下さんとは違うタイプの女王様です。由比ヶ浜さんくらい親密なら説得もできたかもしれませんが、戸塚君や私では無理でしょう。そもそも説明したのに、意味わかんない、キモい、で済ませて人の話を聞きませんでしたから。唯一、意見できそうな葉山君も争いや不和を嫌う性格。三浦さんの機嫌を損ねないようにこちらに妥協を求めらるくらいですから、間違っても三浦さんを抑えこもうとはしません。はた迷惑な人たちです。そんな連中の顔を立てる必要があるのでしょうか。私は無いと思うんですがね。

川崎さんの説得の時も、雪ノ下さんは彼女の都合を考えていたとは思えません。ただ彼女の行為を責めたてただけ。あのま

ま言い争わせても碌な結果にはならなかったでしょう。しかしそれを本人に言ったところで聞こうとはしない。だから強引に黙らせて帰らせました。確かに褒められた行為ではありませんが、そもその問題は雪ノ下さんが話を聞こうとしない事なんです。それに關してのポイントって引かれているのでしょうか？

結局のところ、更生というよりあの人が好む解決方法か否かでポイントが割り振られているようにしか思えませんね。まあ、独断と偏見ですから当然と言えば当然ですけど。

結論、人の話は聞くべきです。そして考えるべき。

私は常に、最善の結果を出すべく行動してきました。そのためなら邪魔者を切り捨て、メル友に協力を求める事だったためらいません。何故なら私がエリートだから。凡人が救えぬものも、エリートなら救う事が出来る。何も見ようとしさない、人を理解しようとしさない人間などに任せられない事を私はする。成長？自立？馬鹿馬鹿しい。無能な人間は失敗を良い経験と言う。愚かな学生は犯罪を若気の至りと言う。そういう連中は決まって、自分のせいで損をしたり傷ついた人間の事を見ようとしさない。彼らの言う青春のページなど、無価値なただの紙切れに過ぎないのに。

申し訳ありませんが、平塚先生。私は自分のやり方を変える気はありません。奉仕部は自己変革を促し、悩みを解決する手助けをする場所でしたが、逆に言えば悩みが解決できるかの責任を放棄している。私はそんなのは認めない。他人の悩みを踏み台にして、成長するなんてことはあつてはならない。だからこそ、最善を尽くしました。やった事には責任を持つべきです。

……果たしてこの奉仕部、いつまで続けることができるんでしょうかね？

エリートは友を呼ぶ

「……暇だなあ」

とある休日の比企谷家。長男の八幡は信女と共に出かけ、両親は仕事でいない。暇を持て余していた小町は膝にカマクラを乗せて、その頭を撫でていた。一人と猫一匹しかない家に、ピンポン、と呼び鈴の音が鳴る。宅配便かと思った小町は判子をポケットにしまつて玄関に向かう。

「はーいー!」

元気よく返事をしてドアを開くと、そこにいたのは宅配便の人ではなく、男三人女一人の四人グループであった。

「やあ小町ちゃん!用事で近くまで来たから顔でも出しておこうと思つてな!」

「あ、近藤さんじゃないですかー!土方さんに総悟さん、ミツバさんもこんにちはー!」

「オウ」

「ちーっす」

「ふふ、こんにちは」

八幡のメル友、近藤勲、土方十四郎、沖田総悟、沖田ミツバが比企谷家へと訪れたのであった。

「いやー、わざわざ来ていただいたのに申し訳ないんですが、生憎と兄はお出かけ中でした…」

「お出かけつつあったって、どーせまたデートだろ?折角来てやったつーのに…」

「あら、未来のお嫁さんと仲睦まじいのは良い事よ?」

「そうそう、嫉妬は見苦しいですぜ近藤さん」

「俺、なんも言ってるねーけど!？」

「まあまあ、折角来ていただいたんですから、是非ともあがって行ってくださいよー！小町も一人で暇してたところですからー！」

「そうか？ならあがらせてもらうか。皆もそれでいいよな？」

特に反対する理由も無く、四人は小町にリビングに案内された。

「待っててください。今、飲み物持ってきますから」

「あ、なら私も…」

「いえ、どうぞ座っててください！お客様ですからね！」

手伝おうとしたミツバを座らせ、パタパタとキッチンに向かう小町の後姿を見て、勲がしみじみと呟く。

「いやー、小町ちゃんはホント気が利く子だよな。あの子は将来、良いお嫁さんになるぞ」

「そうですねエ。少なくともゴリラの嫁にはなりそうにねエや」

「ワツハハハハハ！そうだな、小町ちゃんには俺なんかよりも良い男ができるに決まってるもんない！」

総悟の皮肉を笑い飛ばす勲を見て、十四郎が深い溜息を吐く。

「まったくアンタは…。まあ、小町の気立ての良さは俺も認めてるがな…」

「はい土方さん！マヨネーズどうぞ！」

「おう、サンキュー。ほれ見ろ、マヨをちゃんと小皿に分けるなんてできた子だ」

「いや、それはお前が特殊なだけだから…」

十四郎にマヨネーズを盛った小皿、ミツバにタバスコ一瓶を差し入

れた後、持ってきた飲み物を配る小町。総悟がコップに注がれた茶色い飲み物を見て、眉をひそめた。

「……ていうか、このコーヒーってもしかして、アレ？」

「はい！MAXコーヒーです！」

満面の笑顔で答える小町とは反対に、総悟はげんなりとした表情をしていた。

「うへエ……こんな甘ったるいの出されて喜ぶの、坂田の旦那くらいですぜ……。八幡の野郎、よくこんなモン愛飲してるなア……」

「それは小町も同感です……。この間も50ダースまとめ買いしてましたから……」

「600本!?アイツどんだけ好きなんだよ!!」

「だから皆さんにも消化のお手伝いをしてほしいのです！」

「いくら減らしたって、また買ってくるだけだと思いがな……。こんなモン毎日飲んでんなら、アイツはあの天パーと同じく将来糖尿病確定だな……」

「そうね……まだ若いのに偏食は良くないわ」

「いや、アンタらは自分の食生活改めろよ！何そのマヨフロート?!ミツバ殿、コーヒーってそんなに赤い飲み物じゃなかったよね!」

コーヒーにマヨネーズを浮かべた、通称マヨフロートを一気に飲み干した十四郎は、手持無沙汰そうに部屋を見渡した。

「んで、どうする近藤さん。アイツが帰ってくるのを待つのか？」

「そうだな。どうせこの後やることもないし……」

「じゃあ、お兄ちゃんを待ってる間、ブルーレイでも見ますか？お兄ちゃん、いっぱい持ってますし」

「勝手に見て怒られないかしら……」

「平気でしょ。妹がこっちについてるんだから。……お、これは……」

大量のブルーレイを漁っていた総悟が、一括りに分けられたブルーレイBOXを見つけた。パッケージには何やらキラキラした女の子の絵が書いてある。

「これ、アイツが好きなのプリキュアってやつですかね。試しに見てみましょうか?」

「ガキ向けのアニメだろ?見る気しねエな…」

「まあまあ、たまには良いじゃねエか」

「そうよ、十四郎さん。童心に帰ったつもりで…ね?」

「あー、分かった分かった…」

女兒向けアニメということで見ると見るのを渋る十四郎だったが、勲とミツバに押されて渋々見る事になった…。

~~~~~

「……グスツ……クソ……ガキ向けだと思って舐めてたぜ……近頃のガキはこんなモン見てんのか…」

「はい、十四郎さん」

「ああ…すまねエミツバ…」

全部見ると時間がかかるため、飛ばし飛ばしで最終回を見た後、号泣する十四郎にミツバはそっとハンカチを差し出した。その様子を総悟は冷ややかに眺める。

「まったく土方さんは、心ン中がいつまでも中二のままでもいいねエや」  
「そう言うなよ、総悟。俺だっけちよつとウルつときたぞ?プリキュアってのも案外馬鹿にできないな」

「ま、面白かったのは認めますがねイ…」

「しかしあれだよな、こういう五人組って誰が一番かっていう話題になること多いよな。ちなみに俺はリーダーのピンクの子かな！いつとも前向きで元気いっぱいなところが気に入った！最後、ボロボロになりながらも皆のために戦う姿は素晴らしかったな！」

「多いよな、って自分でその話してちや世話ねエや…」

「なんだよ、そういうお前は好きな奴いないのか？」

「俺ですかイ？俺はあの黄色ですかね。戦ってる時や必殺技出す時のピーピー泣き喚いてる姿がたまらねエ。最後、ボロ雑巾みてエな格好で醜いツラして喚いてるのなんて爆笑ものでさア」

「お前ただけサデイステイックな見方してんだアアアアアアアアアアアア同  
じシーンでもお前の言い方じゃ全く別のモンになってんじやねえ  
かアアアアアア!!」

勲が大声でツツコんだところで、玄関の扉が開く音がした。

「あ、お兄ちゃん帰ってきた！」

「じゃ、全員でお出迎えといきましょうかい」

小町達が玄関へと向かうと、そこには…

「小町さんただいま帰りました……おや」

「ただいま小町。お客さん？……あ」

比企谷八幡と今井信女がいた。そして…

「うーっす、邪魔すんぞー……は？」

「すまない、偶然一緒になってな……む、ぬしらは…」

「お、お邪魔しまーす……え？」

「オウ、遊びにきてやったアルヨ……ん？」

坂田銀時、月詠、志村新八、神樂がその後ろに立っていた…。



休みに家に集まってやることは大体スマブラ

「やあどうも、いらしてたんですか」

「お、おう…用事で近くまで来たんでついにな…」

向こうのまとめ役である勲と挨拶を交わす八幡。その横では…

「オイオイ、なんでこんな所に妖怪マヨ舐めがいるんですかね…」

「誰がマヨ舐めだコラ。テメーこそ人ン家に糖分たかりに来てんじやねーよ」

「は？俺ア八幡がどうしてもって言うから来ただけですけど？テメーみたいに呼んでもないのに家にあがりこんでる奴とは違うからね？」  
「ああ？呼ばれたのに手土産一つ持ってこねエ奴が偉そうに言うな。  
俺はちゃんと来るたびマヨネーズ奉納してんだよ」

銀時と十四郎が睨みあつて攻撃的な視線を交わしていた。険悪な雰囲気は二人の間を流れるが、それを遮るように二人の女性の影が割り込んだ。

「よしなんし、銀時。人様の家でみつともない真似をするな」

「ぐっ……」

「十四郎さんもよ。小町ちゃんや八幡くんの迷惑も考えなさい」

「……チツ」

二人の彼女であり、抑え役の月詠とミツバがその場を治めた。

「いや、流石ですねお二人は。あれに割って入るなんて小町には無理ですよ」

「すいません小町さん。あの二人、会うたびにあんなで…」

月詠とミツバに尊敬の眼差しを送る小町に、新八がペコペコと謝

る。小町は慌てて手をぶんぶん振り、気にしていないと伝える。

「いえいえ、あのやりとりがあればこそその銀さんと土方さんですから！」

「小町ちゃんは優しいアルなー。私だったら塩撒いて出入り禁止にしてるとこアル」

「ゲロ吐いて出入り禁止にされる、の間違いじゃねーのか？」

「あ？」

「は？」

今度は神楽と総悟が睨みあいを始め、流石の小町も苦笑いしか出てこない。

「いつまでも馬鹿やってないでさっさとあがってくださいよ。もうりびングに64もゲームキューブもWiiも用意してありますから」

「え、何そのチョイス？スマブラ狙ってる気しかしないんだけど」

「八幡、Wiiはゲームキューブのゲームもできるからゲームキューブの用意はいらないよ？」

「仲間外れはいけませんよ、のぶめさん。我が家のキューブは今も現役です」

ギャーギャー騒ぎながらも全員がりびングへと移動。ゲーム機がセツトしてあるテレビの前へと集合した。

「それじゃあ早速やりましょうか。ここはエリートの特権で手堅くDXとしやれこみましょう」

「ちよつと待つてくださいエ、DXだと俺の好きな蛇男使えねーじゃねエか。ここはXにしましょうぜ」

「イヤお前ふざけんなよ!!この間スネークで敵味方関係なく爆殺しやがったくせに!!」

「やだなア土方さん。あれはちよつと手元が狂っただけですよ」

「嘘つけエ!!明らかに俺を狙ってセンサーボム起動させただろうが!!  
凄腕エージェントがフレンドリーファイア連発してただろうが!!」  
「スネークだつて事あることにいろんな場所に飛ばされて色々溜まっ  
てるんですよ。察してください」

「ストレス解消で味方吹っ飛ばす傭兵がいてたまるかアアアアア  
!!!」

総悟の嫌がらせの被害者である十四郎が怒り狂って叫びをあげる。  
結果、これ以上の被害が広がるのを防ぐためにDXが選択された。

最初は普通の大乱闘をやることになり、銀時、神楽、勲、八幡がコ  
ントローラーを握る。使うキャラの選択画面になったところで、神楽  
がテレビ画面を指さした。

「見てヨ銀ちゃん。ゴリがテレビの中に入ってるアル」

「あん?アイツいつの間にペルソナ使いになりやがったんだ。ゴリダ  
インとか使っちゃうの?」

「まあ、勲さんったら待ちきれずにテレビの中に入っちゃったのね。  
ネクタイ結んでお洒落までしているわ。ハイカラね」

「いやミツバ殿それドンキーコング!!!お前らスマブラするたびにその  
ネタねじ込んでくるのやめてくれない!」

スマブラをするたびにゴリラネタで弄られる運命の勲。律儀に毎  
回ツツコミを入れているが、段々と疲れてきたようである。

「近藤さんは自分を使うとして、皆さんはどのキャラを使います?」

「オイ俺を使うってどういう意味だ!!」

「俺アロイかな。なんでアイツXでいなくなっちゃったんだろうな」

「Xにはマルスがいるではないか。マルスでは駄目なのか?」

「ばっかお前、よく考えてみろよ。マルスの技なんてピカピカ光って  
るからそれっぽく見えつけど、アレ単に剣を無茶苦茶に振り回してる  
だけだからね?あんな新八でもちよつと頑張ったらできるっての。」

ちよつと頑張った新八なんて誰が使いてーんだよバカヤロー」

「アレ？何か矛先がマルスから僕に向いてんですけど。ていうかアンタ何僕の事デイスってんですか」

「その点ロイは良いよな、剣から火が出るもの。剣先から根元まで炎たつぷりだもの。あれは新八がいくら頑張っても習得できねーよ新八バカヤロー」

「最後ただの悪口じゃねーかアアアアア!!」

「私ミュウツーにするネ！ヒツキーも何かポケモン選んでポケモンバトルするアル！」

「ほう、面白い。エリートが厳選した6Vピカチュウで相手になりますよ」

「スマブラのポケモンに個体値のシステムねーよ!!」

「つーか、6Vでもピカチュウがミュウツーに勝つのは無理だと思うんですがねイ…」

銀時がロイ、神楽がミュウツー、勲がドンキーコング、八幡がピカチュウを選び、大乱闘が開始された。

「つーかオイ、俺以外化け物しかいねーじゃねえか。こりゃ勝つたな、古来よりモンスターは人間に狩られるという宿命を…」

「ホワチヨオオオオオオ!!」

「ウオオオオオオ!?なんかシャドーボール的なのいっぱい撃たれたアアアア!?!」

「何をしておる銀時!!傷は浅いぞ、反撃しろ!!」

「よし、いいぞチャイナ娘！奴の天パーエムブレムを剥ぎ取ってやれ!!」

「オウ!!任せろトシ!!」

「テメー調子に乗んなよ!!人間の恐ろしさを思い知らせてやらアアアア!!」

「あの、神楽ちゃん？ポケモンバトルはどうなったの…?」

「八幡!!コンドーコングがすぐそばに!!」

「コンドーコングって何だアアア!?クソツ、ゴリラなめんなよ!!」  
「霊長類が生態系の頂点の時代は終わりです。これからはげっ歯類最強の時代です」

「頼むぜ近藤さん、ゴリラ代表がこんなところで負けたら恥ですぜ」

「ピカチュウ、頑張れー♪」

「いっけー、お兄ちゃん!!」

声援を受けて奮起する四人が激しくぶつかり合う大乱闘。制限時間五分の間にどれだけ相手を落とせるかが勝利の鍵となる。

飛び道具を恐れず前進し、炎をまとった剣で敵を斬る銀時。

遠くの敵を飛び道具で攻撃し、近くの敵は超能力で相手取る神楽。

素早い動きで翻弄し、雷を叩きこむ八幡。

ネタとして毎回ドンキーコングを強制的に選ばされる勲。

五分間の激戦が終わり、勝負の結果が発表される。

そこには、DKの文字が映し出されていた。

『何だアアアアアアアアア!!』

「エ、エエエエエエエ!!」

予想外の大ブーイングが出て、勲も驚きで声を上げる。

「テメー、ネタキャラのくせにちゃっかり一位取るってどういう事だアアア!!」

「うるせエエエエ!!毎回毎回使ってたらそりゃ上手くなるだろうが!!」

「空気読めよ近藤さん…お笑い担当は勝っちゃいけねエ事ぐらい分かるだろ…」

「誰がお笑い担当だアアア!!」

騒がしく、グダグダで、普通とはかけ離れた日常。  
そんなまちがった日常を、比企谷八幡はそれなりに楽しんでいた  
…。

## ひび割れの友情（前編）

勝負の中間結果が発表されてから三日ほど経った日の放課後。今日も奉仕部は暇を持て余している。八幡は結果にシヨックを受けているかといえはそうでもなく、発表された翌日も普通に部活に顔を出している。結衣は勿論、雪乃も僅かながら気を遣っていたものの、いつもと変わらない八幡を見てそれは不要だと判断した。

それぞれが静かに過ごしている中、部室にノックの音が響いた。

「どうぞ」

読書を中断した雪乃が顔を上げて声をかけた。すると、扉が勢いよく開いて巨大な影が入り込んでくる。

「うおおーん！ハチえもーん！聞いてよ、あいつらひどいんだよ！」

「何ですか、はむ太君。駄キャラが無駄に喋らないでほしいんですけど」

「駄キャラ!？」

携帯から目を離すことなく、八幡が入り込んできた義輝を言葉で斬りつける。結衣はうわあ…と露骨に嫌な顔をし、雪乃は何も言わずに読書に戻った。義輝は咳ばらいを一つすると、近くの椅子を引いてどっかりと座る。

「げふん、実は今日は諸君らに相談があつてまかり越した次第だ。前に、我がゲームのシナリオライターを目指していることは言ったな？」

「言ってますよ」

「え、ラノ何とかじゃなかったっけ…？」

「ぬ、そうだったか…？まあ話すと長くなるのだが、ラノベ作家は収入が安定しないのでやめた。やはり正社員がいいと思ってな」

結衣が小首を傾げて尋ねると、義輝は一瞬結衣を見た後に八幡の方へ顔を向けて答えた。

「で、そのゲームシナリオライターがどうしたんですか、ジュラシックパークでデIROフオサウルスに食べられた人」

「誰だ!?……ばっふんばっふん。それがな、私の野望を邪魔する輩が現れたのだ。恐らくは私の才能に嫉妬しているのだと思うが……」

「それはおかしいですね。君に才能なんてありませんから別の意図があると思いますよ、ドーン・オブ・ザ・デッドで死んだかと思ったらゾンビになって襲ってきた人」

「だから誰なのだ!?……時に八幡よ、お主は遊戯部を知っているか?」「ええ、まあ……名前くらいなら知ってますけど……」

「遊戯部は今年創部された新しい部活よ。遊戯全般、エンターテイメントについて研究することを目的にしているようだけれど」

「そうなんだ……それで、そのユーギ部がどうかしたの?」

「う、うむ、昨日の話なのだが、私はゲーセンで遊んでいたのだ。で、学校とは違ってゲーセンではそこそこ話ができるから、格ゲー仲間にゲームシナリオを書くと言ったわけだ。その場にいた誰もが私の偉大なる野望に平伏した。頑張れよ、応援してるぜ。そこにシビれるあこがれるウー!など賞賛の嵐よ」

ここで義輝は言葉を切ると、大袈裟なジェスチャー付きで己の怒りを表しながら更に続ける。

「だがしかあし!その中で一人だけ、我に向かってこともあろうに、むむむ無理と、ゆゆゆ夢見てんなど言い出した奴がいたのだ!我も大人だからその場では、『で、ですよー』と言っておいたが」

「夢から覚めて良かったですね、エボリューションで割と重要な役割の学生の人」

「いやだから誰のことだ!?……とにかく、私もそんな事言われて引き下



がれるほど大人ではない！なので、きやつめが帰った後にあるかな勢  
千葉コミュという場所でさんざん煽りの書き込みをしてやったわ。  
ふん、あいつ顔を真っ赤にしていたに違いない」

「大人なのか大人じゃないのか、どっちなのかしら……」

雪乃の呆れたような呟きに義輝は一瞬だけ恐怖に満ちた表情をす  
るが、すぐに持ち直して話を続けた。

「そしたら、どうやらそいつ同じ学校だったみたいでな……。今朝コ  
ミュ開いたら、ゲームで決着をつけることになっていたので。周囲が  
煽りに煽ってな……。なあ、俺ってひよつとして嫌われてるのかな？」  
「そうなんじゃないですか？で、ここに来たのはそのゲームで勝てそ  
うにないからどうにかしてくれと……。そういう事ですか？」

「……ほ、ほむん、その通りだ。格ゲーでは向こうの方が全然強くてな  
……。知っているか？一流の格ゲーマーにはプロ契約している人もい  
る。その男もプロという程ではないが、我よりは確実に強い」

悔しそうに義輝が言うと、雪乃が読んでいた本をぱたりと閉じた。

「大体分かったわ。つまり、その格ゲーとやらであなたが勝てるよう  
に手伝えと言いたいよね」

「否っ！八幡貴様っ、格ゲーばなめちよるのかっ!?そない一朝一夕で  
どないかなるほど甘いもんやない！あんさんに格ゲーの何がわかり  
ますのんえ？」

滅茶苦茶に方言を混ぜ合わせながら喚きたてる義輝を、雪乃はゴミ  
を見る目つきで見ている。結衣もかなり引いている様子だった。

「じゃけえ、勝負そのものをなかったことにするか、我が確実に勝てる  
もので勝負したいんじゃ。だからそういう秘密道具を出してよ、ハチ  
えもん」

「そう言われましてもねエ…」

八幡は頭を掻きながら雪乃の指示を仰ぐ。雪乃の反応は当然、いいえ。首を横に振って拒否の意を表した。

「ま、当たり前ですがお断りしますよ。今回の件の発端はあなたにありますし、奉仕部の理念に反しますから。刺される覚悟も無いくせに煽るなっつてことですよ」

「……ほふう、八幡は変わってしまったな。昔の貴様はもつと滾っていたというのに…」

「阿保な事言っつてないでさっさと出て行っつてください。こんなことしてるなら、格ゲーの練習でもしてた方がいいですよ」

既に取り合う気無くした八幡は、再び携帯をいじり始める。しかし、義輝は退こうとせずになやりと笑った。

「はむん、奉仕部などと片腹痛い。目の前の人間一人救えずに何が奉仕か！本当は救うことなどできぬのだろう？綺麗事を並べ立てるだけでなく、行動で我に示してみろ！」

義輝の挑発ともいえるその言葉に反応したのは八幡でも結衣でもなく、奉仕部の部長、雪ノ下雪乃であった。

「……………そう、では証明してあげましょう」

凍てついた眼差しを向けられた義輝は、ひいつ、と悲鳴を上げて真っ青になる。そのまま雪乃は部屋を出ていき、義輝も怯えながらそれに続いた。結衣も慌てて追いかかけようとするが、八幡が動こうとしない事に気づいた。

「ヒ、ヒツキー…行かないの?」

「私達まで行く必要ないでしょう。一度断つたのにあの人が勝手に依頼を受けたんですから、あの人に任せておけばいいんですよ」

「……それは、そう、だけど……でも」

結衣は少しの間、八幡と雪乃達が出て行つた扉を交互に見ていたが、やがて何かを決意すると両手を合わせて八幡に頭を下げた。

「お願いっ、ついてきて！あたしじゃ、いざって時にゆきのん止められないし…」

「……」

「…お願い…」

結衣の弱々しい瞳が八幡の腐った瞳に懇願する。八幡はしばらく目を細めて黙っていたが、やがて溜息を吐いて静かに立ち上がり、結衣と共に雪乃達の後を追いかけた。

~~~~~

遊戯部の部室は奉仕部と同じく特別棟にあり、奉仕部が四階なのに對して遊戯部は二階に位置している。今年創部されたばかりなので、部室には真新しさが見える。扉に貼られている紙にマジックで書かれた、遊戯部という文字がそれを引き立てる。

「じゃあ、行こっか」

結衣が率先して遊戯部のドアをノックする。すると、気だるげな声で返事が返ってきた。入ってもいいという風に受け取った結衣は、扉をガラリと開いた。そこにあつたのは、箱、本、パッケージが積まれてできた山。入室して箱の一つを手にした結衣は、困惑した表情を見

せる。

「ここってユージ部じゃないの？なんかゲームっぽくないんだけど…」

「それも立派なゲームですよ。それはマジック・ザ・ギャザリングというカードゲームのスターターデッキです。他にも海外のボードゲームとか色々ありますね」

「これだけのゲームを揃えるなんて大したものね。それはそうと、部員はどこにいるのかしら…」

「あ、そーだね。声はしたのに、どこにもいない…」

「ぬふう。積みゲーや積読はもつとも多く時間を過ごす場所ほど高く積まれる。ゆえに、一番高いところを目指せばおのずと居場所は分かる」

「そうですか。そういう事は場所を知りたがっているお二人に言うてください」

相変わらず八幡としか会話しようとしないう義輝。アドバイスに従って一番高いゲームの壁を目指すと、本や箱の衝立の後ろから男の声が確かに聞こえた。回り込んでみると、遊戯部の部員であろう男子二人がそこにいた。

「部活動中に失礼するわ。ちょっとお話があるのだけれど、構わないかしら？」

雪乃が話しかけると、男子二人は頷いた後、こそこそと囁き合う。

「あ、あれって二年の雪ノ下先輩じゃ…？」

「た、多分…」

先輩、という単語を聞きつけた義輝がずいっと前が出る。

「む、貴様ら一年坊主であつたか！ふははははは!!久しいな、昨日は随分と大きな口を叩いてくれたが、今さら後悔しても遅いぞ！人生の先輩として、そして高校の先輩として我が灸をすえてやろう！」

「……おい、さっき話してたのってこの人？うはー痛え」

「だろ？マジないよな」

先輩風をふかして威勢よく押し出してきた義輝だったが、遊戯部の二人は委縮するどころか逆に義輝を嘲笑している。

「ぎ、ざい……財津君？遊んでないで本題に入りましょう」

「え、は、はい、わかりました…」

名前を間違われて義輝は素に戻りながらも返事をする。雪乃が遊戯部の二人の方へ向き直ると、二人は緊張からか表情を固くした。

「私達は奉仕部という部活に所属しているのだけれど、この財津君があなた達ともめたと相談してきたので、その解決に来たの。もめたのはどちらかしら？」

「あ、俺です。一年の秦野です。こっちは…」

「一年の相模です…」

秦野と名乗ったほうはやや猫背気味の痩せ型で、フレームなしのシャープなメガネをかけていた。もう一人の相模は白い肌をした中学生のような風貌でこちらも細かい。秦野と同じく眼鏡をかけているが、こちらは丸みを帯びたレンズの眼鏡だった。

「えつとき、ゲームで対決するっていう話になつてゐるみたいなんだけど、秦野君って格ゲー強いんだよね？それだとやる前から勝負が決まっちゃつてゐるようなものだし、別のゲームとかにできないかな？」

「……まあ、いいですけど」

「でも変える以上何か見返りがないと…」

控えめながらも自身が滲んだ返事の後に、遠慮気味な声が続く。見返りをどうしようか、と雪乃と結衣が顔を見合わせていると、八幡が義輝の背を押した。

「なら、この人の土下座でよろしいですか？エリートにとっては一厘の価値にもなりません、君達にとっては気晴らしくらいにはなるでしょう？」

「……え？俺が？」

「……まあ、いいですけど……」

義輝が素に戻って自分を指さす中、とんとん拍子で話がまとまった。

「やるゲームはあなた達に任せるわ」

「あ、でも、あんまし難しいのはやめてほしいかな、って……」

「それなら……みんなが知ってるゲームをちよつとだけアレンジします」

「ふむ、して、そのゲームの名は？」

義輝が質問すると、二人とも眼鏡をくいつと上げた。

「ダブル大富豪ってゲームをやろうと思います」

八幡のモノクルが光り、彼らの眼鏡が放つ怪しい光を捉えた。

~~~~~

ゲームを始める前に、相模が簡潔にルールを説明していく。

- 1、全てのカードをプレイヤー全員に均等に配る。
- 2、ゲームは親から始まる。最初の親が手札から最初のカードを出し、以降順番に次のプレイヤーがカードを出して重ねていく。
- 3、カードには強さがあり、弱い順に3、4、5、6、7、8、9、10、ジャック、クイーン、キング、エース、2となる。ジョーカーはワイルドカード扱いとする。
- 4、プレイヤーが出せるカードは、場にあるカードよりも強いものしか出せない。二枚出したら二枚出さないと駄目。
- 5、出せるカードがない時はパスが許される。
- 6、他のプレイヤー全員がパスし、再び場にあるカードを出したプレイヤーまで順番が回ってきたらそのプレイヤーは親になり、場にあるカードは流される。
- 7、以上を繰り返して一番早く手札が無くなったプレイヤーが大富豪となり、以降は上がった順に富豪、平民、貧民、大貧民という階級がつく。大富豪は大貧民から良いカードを順に二枚取り上げ、好きなカードを二枚交換させることができる。

また、ローカルルールは結衣の中学校のものを参考に、革命、8切り、10捨て、スペ3、イレブンバックあり。都落ち、縛り、階段系、ジョーカー上がりはなしという事になった。

「ローカルルールはそっちの要求を飲みます」

「なので、ダブル大貧民のルールも飲んでもらいます」

二人の眼鏡がまたもや怪しく光る。しかし、次の瞬間にはにこやかな笑みを浮かべていた。

「ど、いっても、ルール自体は普通の大富豪と同じで」

「違うのは、ペアでやる点です」

「ペアということは、二人で相談しながらやるということ?」

「いいえ。一ターン毎に交代で手札を出してもらいます」

「相談するのは禁止です」

「なるほど…」

大富豪未経験者の雪乃は、教えてもらったルールを暗唱している。義輝は不敵に笑いながら腕を組んで、ゲームが始まるのを今か今かと待ち構えている。秦野がまだカードをシャッフルしている最中に、八幡は人差し指と中指を伸ばして結衣を指差し、それを雪乃の方へ振って頷く。八幡の意図を理解し、結衣も大きく頷いた。

「ゆきのん、一緒にやろー！」

「一番強いカードがジョーカー……え、あ。そうね」

結衣が雪乃の肩をがしつと掴むことで、ペアが成立する。残った義輝は八幡に背を向けるように立ち、

「八幡。我に、ついてこれるか？」

と声をかけた。八幡はそれを軽く無視して、遊戯部の用意した椅子に座った。相模、結衣が続けて座り、ダブル大富豪が開始された…。



## ひび割れの友情（後編）

「では、これより遊戯部と奉仕部によるダブル大貧民対決を始めます。勝負は五試合。最終戦の順位で勝敗を決します」

秦野が宣言し、椅子に座っている八幡、結衣、相模の三人がそれぞれ配られた18枚のカードを手に取る。

「実質二対一のチーム戦なので、こちらが先手をもらいますけど…」

「…どうぞ」

「いいよー」

八幡と結衣が返事をする、相模が手札から一枚カードを場に出した。最終的に奉仕部側の2チームのうちのどちらかが勝てばいい勝負なので、先攻を譲る事に特に異論は無かった。順当にカードを出し合って1ターン目が終了し、パートナーと交代して2ターン目が始まる。

「ははははっ！ずっと私のターン！ドロー！モンスターカード！我はクラブの10を召喚！このクラブの10の…」

「早くしてくれませんかね」

「……………ほん。ターンエンド！」

後ろの八幡に急かされて最後の決め台詞だけ言った義輝が、カードを場に出してそっと手札を置いた。場が沈黙に包まれたまま、ゲームは淡々と進んでいく。手札からカードを抜き取るシャツという音と、場に置くぺちつという音だけが続いていく。何順か過ぎたところで、手札の数は八幡達が2枚、結衣達が3枚、遊戯部が5枚となっていた。

ここで八幡は、自らダブル大貧民を提案したにもかかわらず、五枚も手札を残したままの遊戯部に疑問を抱く。しかし今の段階では何とも言えないので、大人しく結衣の出したスペードの6を8切りで流

して、最後の1枚を机に置いて義輝と交代した。

「これで終わりだ！トランプカードオープン！……チエック・メイト」

得意げに最後の1枚を場に出す。更に雪乃が温存していたクラブの2を選択。遊戯部がパスをすると、交代した結衣が残り2枚の手札を2枚出ししてゲーム終了となった。

「ふっはっはっ！まるでたいしたことないわ！どうだ、私の力を思い知ったかあっ！」

圧勝といえる結果に気を良くした義輝が高らかに吠える。ああまで言われてさぞ悔しいだろうと思いい、八幡はちらりと遊戯部の顔を見るが、遊戯部の二人はけろりとした表情だった。

「いやー秦野くん、負けちゃったねー。しまったー」

「そうだなー。相模くん。油断してしまったー」

八幡のモノクル越しの腐った目が、負けたというのに危機感や焦りというものを感じさせない遊戯部ペアを観察する。そうしてじっくりと見ていると、二人はにやつと笑った。

「困ったね」

「困ったな」

「二だって、負けたら服を脱がなきゃいけないんだから」

同時に同じことを言うや否や、遊戯部の二人はしゅばつとベストを脱ぎ捨てた。

「なっ!?!何よそのルールっ！」

結衣が机をばんつ、と叩いて猛抗議する。しかし、遊戯部はにやにやと笑うだけだった。

「え？ゲームで負けたら脱ぐのが普通じゃないですか？」

「そうそう。麻雀もじゃんけんも負けたら脱ぐものです」

「はあ!?何それ意味わかんないし！」

「では、第二回戦参りましょう…」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ちよ、話聞けし！」

結衣の抗議に耳を貸さず、秦野はカードを素早く回収してシャッフルを始める。なおも制止しようとする結衣を取り合わずに、さっさとそれぞれにカードを配りだしてしまった。

「ゆきのん、もう帰ろうよ、付き合おうのアホらしいし…」

「そう？私は構わないけれど。勝てばいいのだし、勝負する以上はこちらにもリスクがあるのは当然だわ」

「え、ええっ!?あ、あたしやだよ!!」

「問題ないわ。このゲームはローカルルールの多さに惑わされがちだけど、数字の力関係が一定である以上は戦略の基本路線は変わらない。場に出たカードを記憶して、相手の残り手札が予想できればそう負けないわ。それに終盤の勝ちパターンもいくつもあるようだし、枚数からの推測もそう難しいものではないもの」

「そ、そうかもしれないけど……。ううーっ！」

雪乃は強固な態度を変えずに自身の考えを述べる。強気である雪乃とは反対に結衣は涙目で唸っている。

「さあ！はよう！はよう始めようではないか！」

雪乃と同じく乗り気な義輝が席に座り、秦野からカードを受け取る。

「では、始めましょう」

雪乃も机から手札を取って、ぱつと広げる。その後ろで結衣が浮かない顔をしながら立っていた。

「じゃあ、まずはカードの交換を」

「うむ…」

一位で抜けて大富豪になった八幡のペアと、最下位で抜けて大貧民になった遊戯部ペアがカードを二枚交換する。遊戯部から献上されたのはジョーカーとハートの2。そして義輝が渡したのはスペードのキングとクラブのクイーンのカード。

「……材木座君、何の真似ですか？」

カードを渡した義輝の後ろから八幡が静かに問いただす。敵である遊戯部にキングとクイーンという強いカードを渡せば、当然生まれる疑問である。義輝は手札を構えて瞳を閉じ、重々しい声で答えた。

「……武士の、情けだ」

義輝からカードを受け取った遊戯部二人がにやりと笑う。それを見た結衣が先程よりも不安を大きくさせ、八幡に助けを求めようと口を開く。

——出かかった言葉が固唾と共に飲みこまれる。

普段、周りの空気を読んで行動し、人の心の機敏に敏感な結衣だからこそ気付くことができた。比企谷八幡がキレている事を。目は口程に物を言うというが、今の八幡がまさにそれだ。腐った目以外は至って普段通り。しかし、腐った目がより一層腐り、蔑んだ目で遊戯部を見下ろしていた。

結衣は普段見られない八幡の感情を見たが、不思議なことに恐怖をそこまで感じなかった。それどころかむしろ、奇妙な安心感を抱いていた。その理由を考えようとしたところで、カードを場に出す音がそれを中断させた。

くくくくくくくく

遊戯部は一戦目とは見違えるほどに鮮やかな戦略をとってきた。リスクを恐れずに三枚出しなどの派手な手を使う秦野、カード効果を利用して堅実に枚数を減らす相模。二人が組むことにより戦術の幅が広まり、奉仕部側は先の手が全く読めない。しかし、負けじと手札を消費していき、遊戯部と結衣達が二枚、八幡達が四枚というところまでできていた。

「……………、これなら…」

どちらかを出すか迷っていた結衣が場に出したのは、切り札として温存していたのである。うクラブの2。ジョーカーは二枚とも八幡の手札にあるため、八幡がパスをして次の雪乃に上がらせればいい。そう頭で結論つけた矢先、後ろから伏兵が現れた。

「おおっとー足が滑ったあー！」

義輝が八幡に勢いよく倒れ掛かり、一枚のカードを場へ弾き飛ばす。絵柄は…ジョーカー。

「はあ!?ちよつと中二!あんた殺すよ!?!」

結衣が勢いよく立ち上がって威嚇するが、義輝はあさつての方向を向きながらぴーひゅーと口笛を吹いて誤魔化した。そして意気揚々とスピードの3を出すと、次の秦野が8を出してあつさりと流す。交代した相模が最後の手札のスピードのエースを出して、遊戯部ペアが一位になる。次の雪乃は当然ながら出せるカードは無く、無念そうにパスをする。順番が八幡に回ってくると、義輝が八幡の肩をがっしりと掴んだ。

「八幡……。私の、いや私たちの夢、貴様に託したぞ……」

爽やかな笑顔を浮かべ、義輝が言う。それに同調するかのようには、秦野が拳をぐつと上に突き上げ、相模が目を伏せて静かに手を組んだ。

「H A ・ C H I ・ M A N ……。 H A ・ C H I ・ M A N ……」

誰かが発した小さいコール。それが段々大きくなり、義輝と遊戯部は歡喜の雄たけびをあげ続ける。一方で雪乃は冷たい視線を八幡へ

と向けて、結衣はうーつと口を真一文字に引き締めて八幡を睨む。

「パス」

それらを全てシカトして、八幡はどうでもよさげに手札を投げ捨てるとさっさとブレザーを脱いだ。その場にいた全員が、あっけらかんとしている八幡を見てぼかーんとしている。やがて、ハツとして我に返った義輝が怒号を轟かせた。

「八幡っ！貴様、なんのつもりだ！これは遊びではないのだぞ！」

義輝が八幡の胸倉を掴みあげようとする。が、八幡は立ち上がってそれを払いのけると、片手で義輝の胸倉を掴み上げた。

「材木座君」

若干持ち上げられた形になり、義輝はつま先立ちのような状態でプルプル震えている。雪乃も結衣も、八幡が滅多に見せない迫力に圧されて何も言えず、いつもよりも腐った目をした八幡の顔を見る事しかできなかった。

「次、ふざけた真似したら——殺しちやうぞ」

無表情の顔と抑揚のない声が恐怖心をかきたてる。八幡が手を放すと、義輝はガタガタ震えながら二、三步後退り、降参するように両手を上げた。

「ま、ま、まあ落ち着くのだ、は、八幡よ。い、今は我らが仲間割れをしている場合では、な、ないぞ？そ、それに、だ。ゲ、ゲームとは楽しむものだ。もっと余裕を持つのだ」

負けたので靴下を脱ぎながら八幡をなだめようとする義輝。八幡はその言葉には答えず、溜息が一つ返ってきた。

「……なるほど、そういう感じのスタンスなんですね」

その溜息の主は秦野だった。これまでの控えめで穏やかな印象とは違う、攻撃的な色が透けて見える声であった。

「その、ユーザー視点っていうんですか？まあ、悪い事じゃないんですけど、それに終始してるっていうのはちよつとねー」

更に相模が言葉をかぶせる。義輝は彼らの鼻にかかるその言い方に何か言おうとしたものの、二人の顔を見て止まる。彼らの表情には明らかな侮蔑が混じっていた。

義輝、雪乃、相模が椅子に座って臨戦態勢を整える。大富豪となった遊戯部ペアが、手札から二枚選んで義輝に渡す。その時に秦野が義輝にある事を聞いた。

「……剣豪さん、なんでゲーム作りたんですか？」

「ふむ、好きだからな。好きなことを仕事にしようと思うのは当たり前。前の考えだと思うが。ゲーム会社の正社員なら生活安定してるし」

同じくカードを二枚を選んで渡しながら義輝が答える。最後に本音が漏れていた答え。それを聞いた秦野は鼻で笑う。

「はっ、好きだから、か。最近多いんですね、それだけでできる気になつちやう奴。剣豪さんもそういう人間の一人でしょ？」

「何が言いたい」

カチンときたのか、義輝はカードを二枚叩きつけるように場に出し、荒々しく椅子を鳴らして立つと八幡に手札を渡す。雪乃もそれに



続いて二枚出しをして、結衣に手札を渡して交代する。

「あんたは夢を言い訳にして現実逃避してるだけなんですよ」

「な、何を根拠に…」

「剣豪さん、薄っぺらいんすよね。さっきの話じゃないけど、ユーザー視点っていうか、ユーザーどまりっていうか。表面だけをなぞってきやつきやしてるだけっつーか」

「ぐぬぬぬ」

カードを出しながら言い放った相模の言葉に、雪乃は同意しているのかこくこくと頷き、義輝はただ唸っている。八幡は顎に手を当てて、何を出そうかと手札とにらめっこを始めた。その悩んでいる顔をちらりと見て、秦野が冷笑を浮かべた。

「ゲームのなんたるかも知らないでゲームを作ろうだなんて笑わせるよな。最近の若手ゲームクリエイターにも多いんですよ。TVゲームしかやった事ないのにゲーム作ろうとする奴。考え方がワンパターンで何も革新的な事が出来ない。斬新な発想を生む土壌が養われていないんだ。好きだからって作れるわけじゃないんですよ」

「剣豪さん、何か得意なこととか人に誇れること、無いでしょ？だからゲームとかに縋ってるだけなんですよ」

嘲笑が混じった声で、相模が追い打ちをかける。義輝はそれに答える術を持たず、ただ悔しげな表情をして黙り込む。八幡は片手で頭をガシガシと掻き巻く。まだ戦略が練り終らないらしい。

「ところで剣豪さん、好きな映画ってなんですか？」

「……むう、そうだな。『魔法——』」

「おっと、アニメ以外で」

「ぬお!?!」

この間デートした時に買って家で見たジュラシックパーク面白かったな。ティラノサウルスもいいけどラプトルも良いな。ロストワールドも買っちゃおうかな。と、アニメを封じられて黙り込んでしまった義輝を横目で見ながら八幡は思った。

「ほら、やっぱ言えないんだよな。じゃあ、好きな小説は？」

「……ふむう、最近なら『俺の彼——』」

「ラノベ以外で」

「あうふ！」

エイリアンVSプレデターの文庫本は面白かったな。プレデターに愛称があったとか映画じゃなかったもんな。続編も買っちゃおうかな。と、舌を噛んでしまって仰け反った義輝を無視しながら八幡は思った。

「結局さ、あんた偽物なんだよ。エンターテインメントの本質も分かってないし。俺達はちゃんとゲームの源流、エンターテインメントのスタート地点から勉強してるんだ。あんたみたいな半端者がゲーム作るとか言い出すの、見てて恥ずかしいんだよね」

遊戯部の二人が蔑むような目で義輝を見る。雪乃はさつきから悩みっぱなしの八幡に向けて微笑を浮かべ、言葉を投げかけた。

「双方の話を聞いてみたけれど遊戯部のほうが正論のようね。比企谷君、あなたもその財津君のことを考えるなら、正しい道を示してあげるべきだわ」

八幡はふう、と息を吐き、カードに釘づけだった腐った瞳を義輝、雪乃、結衣へと順番に向け、最後に冷笑を浮かべている遊戯部の方へと動かした。

「そうですか。なら、エンターテイメントを勉強したというお二人にお聞きしたいのですがね。このゲーム、世の中の女性の何%がやりたかって言うんでしょうか」

雪乃の微笑が固まり、遊戯部の二人が顔を引きつらせる。遊戯部の努力は理解した。義輝の怠慢さも理解した。だが、もうそんな事はどうでもいい。八幡にとってこのゲームは、雪乃と結衣を脱がせようとし、義輝がそれに便乗した時点で両者の勝敗なんてどうでもよくなつたのだ。

「由比ヶ浜さん。このゲーム、このルールで遊びたいと思えますか？」  
「絶対やだし！」

「そうですか。雪ノ下さんはどうですか？男女混合グループ内のパーティーゲームとしてやりたいですか？」

「……………いいえ」

結衣がむくれながら答え、雪乃は気まずそうに顔を逸らして呟く。

「ほらね？声高々に正論語ったところで、それが全く活かされていない。正論なんてものは論理が正しいだけって前にも言いましたよね？使う人間によってその本質はいくらでも捻じ曲がるんですよ。エリートにとっては、材木座君も秦野君も相模君も等しく凡人です。笑っちゃいますよね、あなた方は鏡に映った自分を指差して笑っていただけですよ。ほんとに滑稽だ」

八幡は秦野と相模を腐った瞳で射抜いた。

「材木座君が偽物ならあなた方は面汚しです。ゲームが強いのを良い事に二人の女性を脱がそうとしたセクハラ野郎ですよ。え、どっちがマシかって？どっちも屑なんじゃないですかね」

「い、いや…あれは…」

「何です？本気じゃないとでも？ただの戦略だとでも？すでに2チームが脱いでいるこの状況で、そんな言い逃れが通用するとでも？」  
「それは…そもそも先輩方から勝負をしかけてきたんでしょ…」  
「もう材木座君の土下座というメリットは差し上げましたよね？それ以上、こちらが譲歩する理由などないのですが」

秦野も相模も、返す言葉も無く沈黙する。八幡はしばらく俯いている二人を見た後、不意に結衣の方へ顔を向けた。

「由比ヶ浜さん、あなたはアホですからこのエリートが特別にハンデをあげます。こちらの手札はクラブの2、ハートのキング、スペードの——」

八幡は唐突に自分の手札の内容すべてを暴露した。全員が八幡を信じられないものを見るような目で見るなか、結衣が八幡の意図を察して反撃する。

「バカにすんなし！そっちがその気ならこっちだってハンデあげる！あたし達の手札は——」

「由比ヶ浜さん!?!」

雪乃の制止の声も聞かず、結衣は八幡と同じように自分の手札の中身を読み上げる。

「ちよ、ちよっと待ってくださいよ！それはナシでしょう!?!」

「何がですか？別に自分の手札を公開してはいけないなんてルールはありませんよね？」

「た、確かにそうですけど…!?!」

抗議の声を上げた秦野を八幡が黙らせる。この3チームしかない状況において、2チームが手札の情報を公開するという事は、必然的

に残り1チームの手札も分かってしまうという事になる。実質二対一のチーム戦だからこそできる作戦である。黙らされた秦野に代わり、相模が更に抗議をした。

「で、でもルールって色々ありますから、そっちでは良くても俺達の間では駄目だって決まってるんですよ…」

「そ、そうそう!」

愛想笑いを浮かべる二人に対し、八幡はふむ、と唸って手を顎に添えた。

「なら、審判として第三者の人間でも呼ぶとしますか。……この部活の顧問とか」

遊戯部ペアの顔が一気に青ざめた。脱衣ルールで大富豪をしていた、なんて教師にばれたらどうなるかは想像に難くない。もはや逃げ場が無くなった部室の中で、八幡のモノクルが遊戯部の姿を映し出す。

「——さあ、残り三ラウンド、続けましようか」

ひびはやがて溝と化す

「はい終わり。つまらないゲームはこれでおしまいですね」

大富豪の最終戦。結衣ペアは良い手札のおかげか早々に上がり、八幡ペアも二枚出でて綺麗に上がった。遊戯部のまだ残っていた手札がポロポロと床に落ちた。一回戦、三回戦、四回戦に敗北した遊戯部はベスト、靴下、ワイシャツを脱いだ状態。この最終戦の敗北で女子の前にパンツ一丁の姿を晒さなければならぬのである。その現実を目の前にして、二人の顔から血の気が引いていく。

それでも、自らこのルールを言い出したので逃げるわけにもいかず、ゆつくりとズボンに手をかけたところで八幡の声がそれを止めた。

「あ、別に脱がなくてもいいですよ。見たくありませんから。さて、勝負も終わりましたから帰るとしましょうかね」

その言葉にあっけにとられている遊戯部ペアを後目に、脱いだブレザーを着なおす八幡。

「はい、確実に勝てる勝負にして勝ちましたよ。これで文句はないですよね、ハムの人」

「……え、ハム?」

「どうなんです?」

「……う、うむ……それはもちろん……」

まともに名前を呼ばれていない剣豪将軍が返事をする、八幡は雪乃と結衣に帰ろうと目配せをする。三人が出て行った後、扉に手をかけた八幡が一回振り返り、

「お邪魔しました。それではゲームの勉強頑張ってくださいね。将

来、面白いもの作れるといいですね。私は期待してませんが」

最後に毒を混ぜた応援メッセージを残していった。ピシヤリ、と扉が閉められたあとも、遊戯部の二人は服を着るのも忘れ、机に広げられたカードをただ見つめていた…。

~~~~~

日が暮れ始め、夕日が赤く照らす廊下を四人は歩いていた。不意に義輝が足を止め、小さな声で喋りだした。

「……その、八幡……いや、奉仕部の衆。本日は、迷惑をかけてしまい、申し訳なかった……」

おどおどしながらも、顔を雪乃と結衣に向けて話す義輝。

「あ、謝って済む問題でないのは重々承知だが……ご、ごめんなさい……」

声は尻すぼみになっていったが、義輝は奉仕部に頭を下げた。八幡は携帯をいじりながら横の二人の様子を窺う。雪乃はいつも通り冷たい目を向けていた。結衣は義輝と顔を合わせようとはしなかったが、張り付けた笑みを浮かべて雪乃を振り返る。

「ま、まあいいんじゃないかな？ ヒツキーのおかげで脱がずに済んだんだし……ね、ゆきのん？」

「……由比ヶ浜さんがいいなら、それで構わないわ」

「だ、そうですね。良かったですね。謝ってなかったら、君のメルアド消去してるところでした」

一応許してもらえて、安堵の息を吐く義輝。もし謝罪が無ければ、奉仕部との繋がりは絶たれていただろう。

「ほ、本当にすまなかった。それでは、我はこれで失礼する。……で、ではな…」

そう言っただけでも頭をペコペコ下げながら、義輝は退散していった。今日の部活動はこれで終わり、部室に荷物を取りに行った後、雪乃が部室に鍵をかける。

職員室に鍵を返しに行く途中、雪乃が携帯をいじっている八幡を見て口を開く。

「……どうして、あんな真似をしたの？」

雪乃の目は静かな怒りを秘めている。八幡は一瞬目を合わせ、すぐに液晶画面に視線を戻した。

「あんな真似とは？」

「自分の手札の内容を言った事よ。ルール違反ではないのだろうけど、到底褒められた行為ではないわ」

「絶対に勝つ必要があったからやったまですよ」

「あら、勝つ自信が無かったの？それとも勝てないと思ったの？二回戦の時は財津君が余計な事をしたせいで負けてしまったけれど、それが無ければ勝敗は分からなかったわ。なのに、あんな反則すれすれのことまでやって…」

「……自信とか、そういう問題じゃないんですがねエ…」

八幡は呆れたように溜息を吐きながら自分の頭を掻く。雪乃はここで、さつきから前を歩いている結衣に視線を向けた。



「由比ヶ浜さんも由比ヶ浜さんよ。どうしてこの男に協力したの？私では勝てないと思ったの？私が比企谷君より劣っているというのかしらっ…」

「……そういうんじゃないけどさ……」

結衣は話しかけられても、顔は俯き気味で目を合わせようともしない。その態度にイラついたのか、雪乃の眉がピクリと動いた。

「なら、どういう事なの。さつきも言ったけれど、まだ勝敗が決まっていないのにあんな手を使うなんて、人として恥ずかしく……」

「……ゆきのんは凄いよね」

決して大声ではないものの、語気が少しだけ強くなった結衣の声。羨望と憤りが混じり合った声音に雪乃は口をつぐみ、八幡のメールを打つ手が止まる。

「いつも自身満々で、かつこよくて、強くて……あたしができないこと、なんでもなさそうにやっちゃおうし」

結衣の肩がふるふると震え、スカートの裾が強く握られている。

「あたし、ゆきのんのそういうところ好きだし、尊敬してる。ゆきのんと友達になれて良かったって思ってるし、これからもゆきのんとヒツキーと奉仕部で頑張りたいと思ってる……」

「……由比ヶ浜さん……？」

雪乃が今の状況を把握しきれず、不安そうに結衣の表情を窺おうと顔を覗きこもうとする。しかし、その前に結衣が二人の方を振り返った。

——涙で濡れた瞳を見て、雪乃が啞然とする。

「ゆきのんは、怖くなかったの？一回でも負けたら、服を脱がなきゃならないんだよ…?」

「…怖くないといえば嘘になるけれど、でも、それは勝てばいいだけで…」

「…あたしは怖かった。よく知らない男の人に、もしかしたら、下着を見せる事になるかもって…」

「っ!!」

目に見えない何かから身を庇うように自分を抱きしめた結衣を目にした雪乃は、突如心の底から湧き出てきた罪悪感に蝕まれた。

「ヒッキーが守ってくれたから、あたし達のために怒ってくれたから、あたし達は無事だったんだよ…?」

「…それは」

「ゆきのんはさ、勝って当然みたいな事言うし、きつとこれまでも勝ってきたんだと思うんだ。だからああいう、りすく?を背負ってても普通にできるんだろうけどさ…」

結衣は何かを拒むように頭を横に何度も振り、でもさ、と続ける。

「あたし、ゆきのんみたいに強くないよ…」

「…それは逃げよ。できないからって逃げていては、何も変わらないわ」

「…いきなり、変われると思うの？凡人のあたしが、明日からヒッキーみたいなエリートになれると思うの!?!ゆきのんみたいにかっこよくなれると思うの!?!」

溜めこんでいた感情が爆発し、普段の優しい結衣とは思えぬほどの剣幕で叫ぶ。

「変わろうと思ってたって、すぐには無理なんだよ…。ゆきのんはあ

たしより頭良いのに、どうして、それが分からないの…？」

「…ゆ、由比ヶ浜さ…」

「もつと、周りの人の気持ちとか、考えてよ…っ！」

涙声で絞り出すように言葉を吐き出した結衣。悲痛な叫びを受けて雪乃は呆然自失で立ち尽くす。

「こんな事が続くなら…もう一緒にいけないよ…ごめん」

「あ……」

結衣は踵を返すと、雪乃達の方を振り向かず走り去ってしまった。雪乃は結衣に向けて手を伸ばしたが、その手は彼女には届かず、結衣の姿が見えなくなるとその手を胸に置いてぎゅっと握りしめた。

「…あーあ、友達泣かせちゃいましたね」

無遠慮な声が投げかけられ、雪乃の体がピクリと反応する。しかし、雪乃は声の主の顔を見る事ができなかった。

「もうあの人、部活に来ないかもしれませんね。万が一にも無いでしょうが一応言っておきますけど、私を恨むのは筋違いですよ」

雪乃はただ俯いて黙りこくり、唇を強く噛み締めている。

「まあ安心してください。同じクラスですからメンタルケアぐらいはしてあげますよ。奉仕部に来るかどうかは彼女次第ですがね。それでは」

八幡は携帯をしまい、両手をポケットに突っ込んで雪乃の横を通り過ぎる。雪乃は何かを言い返す気力も失い、窓から差し込んだ夕焼けの光の中に消えていく八幡を見送っていた…。

優秀な凡人は少しだけ変わる

「……あんたさ、由比ヶ浜となんかあった？」

「……ふあい？」

昼休み、教室で一緒に弁当を食べている沙希に聞かれ、八幡はふりかけご飯を頬張ったまま聞き返す。

「川崎さんも気づいてたんだ。僕も、ちよつと前から様子がおかしいなー、とは思ってたけど……」

ペットボトルのお茶を一口飲んで、沙希と同じく一緒に食べていた彩加も遠慮がちに話す。遊戯部での一件があつてから、結衣は奉仕部に顔を出さなくなっていた。教室での様子も少しおかしい。上の空でいることが多くなり、優美子や隼人達にも心配されていた。

「なんかあつたのは事実ですけど、私のせいじゃありませんよ」

「ふーん……なら、雪ノ下か……」

結衣を横目で見ながら、沙希がお茶に口を付ける。

「気になりますか？」

「そりゃあ……ね。あれから何回か話してるし、元気無いつて分かつて知らんぷりつてのもさ……」

「うん……それとなく話して理由を聞こうとしたけど、はぐらかされちゃったし……。でも無理に聞き出すのもね……」

「それが妥当な判断でしょう。これは当事人の問題ですから。逆に言えば、当事人同士でしか解決できません」

そう言つて八幡は上手く焼けた卵焼きを口へ放り込む。

「そう…。なら、今はほっといた方がいいか」

「賢明な判断です、さきさきさん」

「さきさき言うな」

「あはは…」

沙希が八幡を睨み、彩加が苦笑いを浮かべる。形はどうあれ、結衣の事を心配している三人であった。

くくくくくくく

放課後になり、八幡が部室へ行く前に結衣に声をかける。

「由比ヶ浜さん。今日はどうしますか？」

「あ…えつと…」

話しかけられておどおどした様子の結衣。申し訳なきそうに視線を逸らす結衣を八幡は気遣う。

「無理はしなくてよろしいですよ。どうせ仕事なんてありませんし」

「…………ごめん」

暗い雰囲気をもとつたまま、結衣は教室を出ていった。八幡は大きな溜息を一つ吐くと、奉仕部へと向かった。

部室のドアを開くと、本を読んでいた雪乃がはっとして勢いよく顔を上げる。入ってきたのが八幡だと分かると、あからさまにがっかりして肩を落とした。

「由比ヶ浜さん、今日も来ないんですって」

「…………見れば分かるわ」

少し苛立ちを含めた声で返すと、雪乃は読書に戻る。八幡はそれを少しだけ観察した後、椅子に座って携帯をいじりだした。静寂が部室を包む。しかし、それはいつもの静寂とは明らかに違うものであった。由比ヶ浜結衣がいなくて、この静かな部室の何かが変わってしまった。雪乃も八幡も、何が欠けてしまったのか具体的な言葉は出てこないものの、違和感のはっきりと感じていた。

ふと、雪乃がそわそわしながら八幡の方をちらりと見る。何度も何度も同じことを繰り返すので、流石に気になって八幡が携帯から雪乃に視線を移した。

「何か？」

「……その、由比ヶ浜さんの様子はどうなのかしら」

「ご自分で見に行つてはいかがですか？三浦さんの時みたいに」

「……………それができれば…」

言いかけて、雪乃は慌てて口を閉じる。

「様子はあまりよろしくはありませんね。彼女を知っている方々はその変化に気づいていますよ」

「……………そう」

返事はそつけなかったが、その顔は辛そうに歪んでいる。

「……鍵を取りに行った時、平塚先生から聞かされたのだけれど…」

「はい？」

「もしもこのまま由比ヶ浜さんが部活に来なかつたら、奉仕部を辞めさせることになるって…」

「……………そうですか。まあ、妥当ではないですかね」

自ら入部を希望したのに、ずっと来ないままでは部員とはいえない

い。残酷とも当然とも言える処置を言い渡された事を思い出し、雪乃の手に無意識に力が入る。しわの生まれたブックカバーを見て、八幡は携帯を閉じた。

「……比企谷君、六月十八日って由比ヶ浜さんの誕生日なのかしら」  
「…何ですいきなり」

雪乃は少し不安そうに、脈絡のない話を切り出した。

「アドレスに0618と入っていたから、そうではないかと思ってるのだけれど……知ってる？」

「ええ、まあ確かにそうですよ。前にメールでそんな事言っていました」

自分の推理が正しい事が分かると、安心したようにホッと一息吐いた雪乃。八幡が訝しげに見ている事に気づくと、咳払いをして八幡に向き直る。

「もうすぐ由比ヶ浜さんの誕生日がくるから、そのお祝いをしてあげたいの。……例え奉仕部を辞める事になったとしても、これまでの感謝の気持ちも伝えたいし、この前、怖い思いをさせてしまったお詫びもしたいから…」

「……良いんじゃないでしょうか」

正直、雪乃がこういう提案をするのは八幡にとって意外だった。しかしよく考えれば納得もできる。その性格と能力の高さから常に嫉妬の炎に晒され続けてきた雪乃にとって、結衣は初めてできた友達に違いないのだ。もう来ないかもしれないと暗に言葉に含まれていながらも感謝と謝罪を伝えたいのなら、自分のせいにならなくなってしまったのだから引き止められない。でも離れないでほしいという葛藤が表れているのだろう。

雪乃の心情に納得がいった八幡。そしてふと見ると、雪乃が本を置

いて八幡の傍に歩み寄っていた。潤んだ瞳と腐った瞳が見つめ合い、雪乃がか細い声で絞り出すように声を発した。

「そ、その……っ、付き合ってくれないかしら……？」

「はっ……ああ、プレゼント選びですか？」

「え、ええ……」

言い終ってから、居心地が悪そうに視線を逸らした。普段から毒を吐いている相手に頼み事など、虫がよすぎると自覚しているのだから。

「別に一緒に買いに行く必要はないでしょう。私とあなたのプレゼントが被るとは思えませんし」

これは八幡の本心であり、決して雪乃の頼みを聞きたくないという旨の発言ではなかった。しかし、雪乃は遠回しに自分と一緒に行動したくないと受け取ってしまった。雪乃は若干、シヨックを受けてたじろぎながらも自業自得だと受け入れる。そしてなお、継るように八幡の服の袖をきゅっつつまんだ。

「……ずうずうしいお願いであるのは百も承知しているわ……。でも、私、こういうことであなただけ以外に頼れる人がいないの……。由比ヶ浜さんには色々と迷惑をかけてしまったから、適当な贈り物はしたくないのよ……。未来のお嫁さんがいるあなたなら、普通の女の子に何を贈れば喜んでくれるのか分かるでしょう？……だから……だから……」

懇願する震えた声を聞いて、比企谷八幡は初めて雪ノ下雪乃の偽らない本心をこの目で見た気がした。モノクルに映る雪ノ下雪乃の姿はいつもの堂々とした立ち振る舞いではなく、友達にどんなプレゼントを贈ればいいのか必死で悩む年相応の少女の姿だった。

それはまさしく比企谷八幡がなにより慈しんだものであり、雪ノ下



雪乃に求めていた変化であった。

「いいですよ。では、次の日曜日なららぽーとでプレゼントを選びましょうか。あの青くてでっかい時計のところに十時半くらいに集合ということで」

「…ええ、それで構わないわ。…ありがとうございます」

安心したように表情が穏やかになった雪乃を見て、比企谷八幡の瞳がほんの僅かだけ輝いた。

## 人生、諦めが肝心

日曜日、待ち合わせの場所であるららぽーとの青い時計の下で八幡は携帯を開く。

「…………ふむ」

携帯の時計を確認し、頭上の時計が刻んでいる時刻を見て誤差が無い事を確かめた。待ち合わせの時間は十時半。現在、十一時である。女性の外出は準備に時間がかかるという事を小町から聞いていたのも、多少は遅れる事もあるだろうと踏んでいたが、いくら何でも遅い。急に都合が悪くなったのか、それとも何かに巻き込まれたのか、八幡が雪乃に確認のメールを送ろうとしたところで、黒髪のツイントールを慌ただしく揺らして走ってくる人影が目に入った。誰であろう、雪ノ下雪乃である。

「…………お、お待たせ…」

胸に手を当てて息を切らしながら青い時計を見て、雪乃が申し訳なさそうに目を伏せた。

「ご、ごめんなさい。少し道に迷ってしまっ…」

「そうですか。まあ何もなければよかったです」

雪乃の体力が回復するのを待ち、二人は案内板の前へと移動する。

「ところで、何を買うかはもう決まっていますか?」

「…………いえ、自分でも色々調べてみたのだけれど私にはよく分からないくて…」

小さな溜息を吐いた雪乃を見て、八幡は雪乃が誕生日プレゼントを

何にするか相当悩んでいる姿を簡単に想像できた。

「それに私、友人から誕生日プレゼント貰ったことないから…」

「そもそも友人がいませんからね」

「……そうね」

いつもと違う、弱々しい返事に八幡は少し戸惑った。普段、何かしら言うど噛みついてくる彼女のしおらしい姿に少し庇護欲を抱きながら、八幡は案内板の一角を指さす。

「まあ由比ヶ浜さんへのプレゼントならここら辺で買えば問題ないでしょう」

「そこは…」

雪乃は案内板に備え付けられていたパンフレットを取って開き、納得したように頷いた。若い女の子向けの服屋やアクセサリーショップが集まっているこの場所なら、結衣のプレゼント選びに最適だろう。

「では、早速行きましょうか」

そう言うと、雪乃はくるりと向きを変えて目的地に向かおうと歩き出す。

「お待ちなさい」

しかし、何歩か歩いたところで服の襟首を掴まれた。うつ、と一瞬息が詰まり、雪乃は振り向いて八幡に恨みがましい視線を向けた。

「けほっ…比企谷君。いきなり何をするの」

「それは私の台詞です。一体どこに行こうとしてるんですか？」

「どこって、さっきあなたが指さした場所へ…」

雪乃が自分が歩いてきた方向を指さすと、八幡は呆れるとともに遅刻した原因を理解した。

「……逆方向ですよ。雪ノ下さん、さては方向音痴ですか？」

「そんなことは…」

ない、と言いかけて、自分が遅刻したことを思い出して言うのを止め、代わりに顔を逸らした。八幡は溜息を吐いて、雪乃が指さしたのとは逆の方向を指差した。

「正しい道はこっちですよ。はぐれないようにちゃんとついてきてくださいね」

「……」

見るからに不満そうな雪乃であったが、方向音痴なのは事実なので何も言い返せずに大人しく頷いた。休日のために人が混み合っているモール内を八幡は進んでいく。人混みは好きではないため、人が少ない場所を見つけるのに慣れている八幡は止まることなく進む。途中で雪乃がついてこれているのか確認するために振りむくと、雪乃が真剣な表情で凶悪な目と研ぎ澄まされた爪とぎらりと光る牙を持ったぬいぐるみをぐにぐに触っていた。八幡がその様子を黙って見ていると、その視線に気づいた雪乃が持っていたぬいぐるみをそつと棚に戻す。

「好きなんですか、それ」

八幡が指さしたのは、千葉にあるのに東京の名前がついているテーマパークの人気キャラクター、東京ディズニーランドのパンダのパンさんである。ファンシーとブルタリティーを足して二で割った

ようなデザインのキャラクターで、パンさんのバンブーハントというアトラクションは二時間三時間待ちは当たり前という程の人気アトラクションなのだ。

「別に、そんな事言っていないのだけれど」

「言っていないってことは、思っているんですか？」

八幡の指摘が凶星だったのか、雪乃の目つきが鋭くなった。言われたくないことだったのだろう。

「欲しいんなら買えばいいじゃないですか。別に買うな、なんて言いませんよ」

「……………え？……………で、でも…」

肩を竦めて言った八幡の言葉が意外だったのか雪乃は驚いた顔になり、次の瞬間に躊躇いがちにぬいぐるみを見た。しかし、それをまた手に取ろうとはしなかった。お詫びも兼ねてプレゼントを買いに来ているのに、自分の買い物はできないと思っているのだろう。そんな雪乃の迷いを看破したのか、八幡が助け舟をだした。

「そんなに気負わなくてもいいですよ。私も来たついでに小町さんや信女さんに何か買って帰ろうと思ってますから」

「……………そう」

その言葉に後押しされたのか、雪乃はパンさんのぬいぐるみを素早くレジまで持って行って購入した。買うとなったら迷いの無くなった動きにあっけにとられた八幡の顔を見て、雪乃が仕切りなおすように咳払いを一つする。

「さあ、行きましょう」

「……………ああ、はい」

買い物が終わらせてまた少し歩くと、周囲の雰囲気明らかに変わった。パステルとビビッドが入り混じったいかにも女の子という感じがする空間には、フローラルやシャボンの良い香りが漂っていた。

「着いたようですね。さて、どんなプレゼントに狙いをさだめましようか」

「……そうね、普段から使えてかつ長期間の使用に耐える耐久性を持ったもの、かしら」

「そういう事言ってるんじゃないんですけど。その条件だと事務用品が真っ先に候補に上がるんですけど」

「それも考えたのだけれど」

「考えたんですか……」

「ええ。でも、由比ヶ浜さんが喜びそうなものではないし、流石に万年筆や工具セットをプレゼントしても嬉しがるとは思えないもの」

「そもそもプレゼントしよう、なんて思いませんから。記念品とかならまだしも、誕生日プレゼントにはねエ……」

内心、一緒に来ていて良かったと八幡は安堵していた。雪乃のセンスに任せたプレゼントだと、結衣と仲直りするどころか更にギスギスしかねない。

雪乃が目についた近くの服屋に入り、八幡もそれに続く。男性客が入ってきた事で他の女性客の視線が突き刺さり、服屋の女性店員も八幡の動きを警戒するかのよう移動する。そんな事を気にする素振りも見せず、八幡は店内のマネキンに着せてある服を見て、マネキンを信女に脳内変換して楽しんでた。一方で雪乃は真剣な表情で、並べてある服を手にとって横にグイグイ引っ張ったり縦に伸ばしていた。八幡は脳内着せ替えショーを中断して、雪乃の傍へ行って話しかける。

「何やってんですかきつきから」

「服の耐久性を確かめているのよ。……でも駄目ね。満足いくものが中々見つからないわ」

「駄目なのはあなたの審査基準ですよ。野菜仕入れに来てるんじゃないんですから。耐久性も大事ですけど、品質ばかりにこだわってたら一生決まりませんよ」

「……はあ、だって仕方がないじゃない。材質や縫製くらいでしか判断がつかないもの……」

「女子高生にしてはお堅い判断基準ですねエ」

呆れながらどうしたものかと頭を掻く八幡の横で、雪乃が今までで一番物憂げな溜息を吐いた。

「私、由比ヶ浜さんが何が好きかとか、どんなものが趣味かとか……知らなかったのね」

「知らなくたって推測くらいできるでしょう。携帯がなんかピカピカ飾り付けられていますし、髪だってピンク色に染めている今時のギャルですから、好きそうな物くらい想像できますよ」

「それはそうだけれど、私はその手のものに詳しくないのよ。中途半端な知識で贈ったところで勝ち目は薄いでしょうし、勝つためには弱点を突かなければ……」

「プレゼント一つで随分とバイオレンスな考え方をしますね。ギフトに時限爆弾でも仕込むんですかあなたは。プレゼントするなら、弱点を突くというより弱点を補うものを贈るべきでしょう」

「……そうね、そういうことなら……」

八幡の言葉がヒントになり、雪乃が何かを閃かせて服屋を出る。そして向かったのはキッチン雑貨の店。ドーナツくらいしか作らないとはいえ、数々のユニークな調理器具が並ぶ店内は八幡にとっても興味深い場所であった。

「比企谷君、こっちよ」

輪切り、みじん切り、千切りができるスライサーを眺めていると、雪乃が名前を呼んでこっちこっちと手招きをする。行ってみるとそこにいたのはエプロン姿の雪乃だった。薄手の黒い生地で胸元に猫の足跡があしらわれており、リボン状にぴこつと結ばれた腰ひもが引き締まったくびれを強調している。その場でくるつと一回転をして動きやすさを確かめた後、八幡にエプロンを見せつけるようなポーズで立って首を傾げた。

「どうかしら?」

「良くお似合いです、由比ヶ浜さんのイメージには合いませんね。彼女にはもつとこう、明るい色を基調にしたフリルでもついたものがないのでは?」

「なるほど…」

雪乃は着ていたエプロンを脱いで畳むと、八幡のアドバイスに沿ったエプロンを探しだす。無論、材質のチェックも忘れてはいない。

「これにするわ」

「良いですね」

雪乃が最終的に選んだのは、薄いピンクの生地フリルがあしらわれているエプロン。両脇に小さいポケットが一つずつ、真ん中には大きなポケットが一つ付いていた。結衣のイメージに合うもので八幡も納得して頷き、雪乃はこれとさっきの黒いエプロンをレジへと持っていた。素知らぬ顔で戻ってきた雪乃にツッコむことも無く、今度は八幡が用意するプレゼントを買いに行く事となった。

~~~~~



ペットショップで買い物を買った八幡は、待つ間に子猫と戯れている雪乃の元へと戻る。

「あら、早かったわね」

「買うものは決めていましたから。では帰りましょうか……帰ります？」

「……当然でしょう？もうここに来た目的は済んだのだから」

もつと子猫と一緒にいたいのでは、と気を遣ってみた八幡だったが、雪乃は気遣いを受ける気は無いようだった。それでも名残惜しさはあるらしく、返答に一瞬間が生まれていた。最後に子猫を撫でると、口の形だけで、にゃーと別れの挨拶をして立ち上がった。

帰る時も迷子にならないよう、八幡が先導して歩く。その道すがら、ゲームコーナーを横切ると雪乃が突然足を止めた。雪乃の熱のこもった視線の先にあったのは、クレーンゲームの景品として置いてあるパンダのパンさんのぬいぐるみだった。

「あれ、やってみますか？」

「結構よ。別にゲームがしたいわけではないもの」

「クレーンゲームって景品目当てでやるものなんです……」

どこまでも意固地な雪乃だが、あんなことを言いながらもやる気は十分だった。千円札を両替して百円玉を手にとると、クレーンゲームのコイン投入口の横に九枚の百円玉を積み、残りの一枚を投入した。筐体から流れる音楽が変わってゲームが始まった。……だというのに、雪乃は肝心のクレーンを動かさずにただじっと操作ボタンを睨んでいた。

「……1のボタンで横に、2のボタンで奥に動きます。ボタンを押し

ている間だけ動いて、離すと止まります。やり直しはきかないので、慎重に」

「あ、ありがとう…」

気合いを入れて挑戦したはいいものの、操作の仕方が分からなかったようだ。雪乃は恥ずかしさで顔を赤くしながら、クレーンを動かして一番近いぬいぐるみに狙いを定める。良い位置でクレーンが下りてぬいぐるみを掴み、ゆっくりと持ち上げ始めた。

「……………もらった」

小さな声で勝利を確信した声が聞こえたので八幡が雪乃を見ると、拳をぎゅつと握って、うしつと微かに動かしていた。前に結衣から聞いた、じゃんけんに勝った時もこんな感じだったのかと思っていたと、クレーンがぬいぐるみをぽろつと取り落としてしまった。そのまま所定の位置へ戻ってむなしくアームを一回開閉すると、そのまま動かなくなつた。

「…………ちよつと、今のは完全に掴んでいたでしょう？どうしたらあそこで外れるのかしら？」

結果に納得いかずにガラス越しにクレーンを睨みつける雪乃。

「まあ、簡単には取れませんよ。見たところ、このクレーンは閉じる力はそのままで強くないように調整されているようですし」

「…………調整？そんな事ができるの？」

「ええ。強いアームのままだったらどんどん景品取られて商売あがったりですからね」

「つまり、故意に取りにくくしているという事かしら？そんなの…」

「まあ納得いかないでしょうが、向こうも商売ですからねエ。くじにはずれが沢山入っているのと同じですよ。それに取りにくいだけで

ちやんと取れますし、店員さんに言えば取りやすい位置に動かしてくれたり、アドバイスも貰えますよ。呼びますか？」

「……取れるなら必要ないわ」

八幡の説明をうけて憤る雪乃だが、ひとまず取れるという事でゲームを再開する。積まれてあつた百円玉を一枚投入し、再びクレーンを動かした。

「……くっ、また……」

百円玉を投入。

「この……いい加減に……」

…百円玉を投入。

「……どうしてよ……」

……百円玉を投入。

「っ！……」

次々と百円玉を投入していく雪乃を見かねて、八幡が待ったをかけた。

「そんな馬鹿正直に狙ったって取れませんよ。もつと頭を使わなければね」

「……何ですって？なら、あなたは相当上手いのでしょね」

「勿論。小町さんや信女さんにあれ取ってーこれ取ってーとせがまれると断れませんから、上手くならないと金欠になってしまうのでね」

「嫌な上達の仕方だわ……」

「エリートの取り方を教えてあげますよ。雪ノ下さん、あのちよつと離れている二つのぬいぐるみを見てください」

雪乃が八幡の中指と人差し指が指し示した方向に目を向けるが、特におかしい点は見当たらない。

「ぬいぐるみにはタグが付いてますよね？クレーンゲームの取り方には、このタグにアームを引っ掛けて取るという取り方があります。そしてあの位置ならば、片方ずつ引っ掛けて二個同時に取れますよ」

「……え？」

二個取り。初心者雪乃には想像もできない事を平然と言つてのけた八幡は、自身の財布から百円玉を取りだして投入する。腐った目を細めて狙いを定め、慣れた手つきでクレーンを操作する。雪乃が期待に満ちた目でその様子をじつと見つめる中、クレーンがゆっくりと二個のぬいぐるみに迫る。大きく開いたアームの先がタグに触れると、八幡の口元に僅かな笑みが浮かぶ。

……が、すぐに消えた。閉じる過程でタグに引っ掛ける事が出来ず、何も掴んでいないクレーンが戻ってくる。横の雪乃のジト目の視線が八幡を刺し貫いた。

「……取れていないじゃない」

「……まあ、エリートといえども失敗はしますよ」

気にしていない風を装って、再び財布から百円玉を取り出して投入する。

「……あれ」

百円玉を投入。

「……チツ」

…百円玉を投入。

「何故…エリートのロジックは完璧の筈…」

百円玉を投入…しようとするが、手持ち分が無くなっていた。

「……両替してきます」

「あ、あの…比企谷君？」

目の据わった八幡が千円札を両替機へと突っ込んだ。

「……馬鹿な」

また百円玉を投入。

「ここまでやって、諦めるわけには…」

またまた百円玉を投入。

「比企谷君…二個取りなんて無理なんじゃ…？」

「そんな事ありえませんが。幾多の百円玉の犠牲によって得た経験が間違っているはずがありません」

いつの間にか、ゲームを始めた雪乃よりも意地になっている八幡だった。

~~~~~

「…………ほら、ちゃんと取れました。やはり私は正しかった。エリートは正しかった。エリート万歳。そう思うでしょう雪ノ下さん？」

「…………え、ええ…良かったわね…」

三千円つぎ込んで、見事にパンさんを二個取った八幡。どこか誇らしげなその姿を、雪乃は引きつった笑みを浮かべながら見ていた。

八幡は両手に持ったぬいぐるみを見比べると、ふむ、と唸る。

「なんか流れで取ってしまいましたが、同じ物二個もいませんね。これ、片方差し上げますよ」

片方のパンさんを雪乃に押し付ける八幡。しかし、雪乃はそれを受け取らずに押し返してきた。

「これを手に入れたのはあなたよ。三千円かけて取ったのはあなたなのだし、あなたの功績は認められるべきだわ」

「いや、だから二個もいららないんですって」

「小町さんと今井さん、二人へのプレゼントにすればいいでしょう。クレイニングゲームの腕前が上達したのは二人のおかげと言えるのだし、二人が受け取るのが正当というものよ」

「やってたのあなたなんですから、私がやるきつかけを作ったあなたにこそ相応しいと思うのですが」

「きつかけを作ったのは私でも、結果を出したのはあなたよ。なら、報酬をあなたが受け取るのは当然のことよ」

むぎゆ、むぎゆ、とぬいぐるみを押しあう二人。偏屈な理屈をこねあつて互いに譲らなかつたが、八幡の方が先に折れてぬいぐるみを自分の方へ引き戻した。

「…………分かりましたよ、もう一個取れば良いんでしょう」

「…………え？ひ、比企谷君!？」

雪乃の制止の声も聞かず、八幡は一枚、百円玉を入れる。狙いは二個取りの過程で意図せず出口に少しづつ近づいていったパンさん。八幡はパンさんの頭上に狙いを定め、片方のアームで頭を押し込むような位置へとクレーンを動かした。降りて行ったクレーンのアームは、パンさんの頭を捉えてゆっくりと出口へと押し出し、パンさんはポロツと落ちていった。景品獲得のファンファーレが鳴りやまないうちに八幡はパンさんを取り出し、これで文句は言わせないとばかりに押し付けた。

「ほら、百円で取りましたよ。こんなのマツ缶一本奢るのと変わリませんから、どうぞ遠慮なく受け取ってください」

あつけにとられていた雪乃。しかし、またもやパンさんを押し返してきた。

「たとえば百円といえども、あなたのお金で取ったのだからこれはあなたの功績よ。私が受け取る理由は無いわ」

頑なに受け取ろうとしない雪乃に八幡は焦れたのか、割と投げやりに言い放った。

「…………なら、あなたにあげるために取ったとも言えれば受け取ってくれるんですかねエ……」

意外過ぎた八幡の言葉に、雪乃がパンさんを押し返す力が弱まる。そしてパンさんは雪乃の腕の中にぽすつと納まった。

「あつ…ひ、ひきぎや…比企谷君、今のは……」

「いやもう、めんどくさい性格してますねあなたは。たかがぬいぐる

み一つをどれだけ警戒してるんですか。人の好意を素直に受け取れない人は嫌われますよ」

呆れたようにやれやれと首を振った八幡の態度に雪乃はムツとした表情を見せるが、抱きしめたぬいぐるみに目を落とすと頬を緩ませた。

「…そんなに好きなんですか？そのぬいぐるみ」

「……他のぬいぐるみにはあまり興味がないのだけれど、このパンダのパンさんだけは好きなのよ。……似合わないかしら」

「似合わないというか、意外だっただけですよ。普段が普段だから」

「今はその発言、聞き流してあげるわ」

にっこりと笑う雪乃に対して八幡は嘆息する。どうしてパンさんに向ける笑顔と普段の笑顔がこうも違うのかと…。

雪乃はぬいぐるみの腕を取ってちよこまか動かしてはほっこりと笑う。爪が恐ろしげな音を立てているが、雪乃がどれだけパンさんが好きなのかは八幡にひしひしと伝わっていた。

「ぬいぐるみというか、パンさんが好きなんですネ」

「ええ、小さい頃に貰ったのよ。原作の原書を」

「……原書？」

そんなもの知らないという風に八幡が聞き返すと、雪乃がトランス状態になったのかのようにまくしたて始めた。

「あら、いくらエリートといっても知らない事もあるのね。パンダのパンさんの原題は『ハロー、ミスターパンダ』。改題前のタイトルは『パンダズガーデン』。アメリカの生物学者だったランド・マツキン トツシユがパンダの研究のために家族総出で中国に渡った際、新しい環境に中々馴染めなかった息子のために書いたのが始まりだと言わ



れているわ。デイスティニー版では笹を食べたがるのに食べると酔ってしまう、というコメディ色が強いんだけど、原作ではそういう箇所はごく一部なの。一度読んでみると分かるわ。翻訳も中々の出来栄えだけれど、やっぱり原書で読むのがお勧めね」

「…はあ、それは知りませんでした。あと少し落ち着いてください」

得意げに、楽しそうに語っていた雪乃だったが、八幡の冷静な返事で我に返る。思わず饒舌になってしまった事に雪乃は少し照れてしまい、頬を朱に染めて顔を背けてしまった。

「原書って多分英語ですよ？小さい頃から英語読めたんですか？」

「…まさか、読めないわよ。でも、だからこそ読みたくて辞書を首っぴきで読んだわ。パズルみたいで楽しかった」

「筋金入りですねエ…」

雪乃の瞳は、遠い昔を懐かしむように優しい光を灯していた。そして、小さな声で囁くように呟く。

「……誕生日プレゼント、だったのよ。そのせいで一層愛着があるのかもかもしれないわ」

友人から貰っていないと自分で言っていたから、家族の誰かからプレゼントしてもらったのだろうか？と八幡は推測した。

「……だ、だから、その…」

少しくぐもった声に反応して顔を向けると、雪乃は恥ずかしそうにぬいぐるみに顔をうずめて、自分の表情を隠しながら上目づかいで八幡を見つめている。

「その……わ、私のために取ってもらえて——」

「あれー？雪乃ちゃん？あ、やっぱり雪乃ちゃんだ！」

雪乃の言葉を遮り、よく通る声が八幡の耳に入る。声のした方を振り向くと、肩にかかる位の長さの艶やかな黒髪の女性がこちらに手を振っていた。雪乃の名を呼んだのなら雪乃の知り合いであろうと思つた八幡は、あの美人が誰なのか雪乃に聞こうとする。しかし、先程と違って雪乃は表情を硬くさせ、ぬいぐるみをぎゅっと強く抱きしめていた。一瞬で雰囲気が変わってしまった間違い聞きにくくなつたが、聞きなかつた事は雪乃の口から発せられることとなる。

「姉さん……」

雪ノ下雪乃の姉だという事が分かり、八幡は一人で納得していた。あの雪乃をちゃんづけで呼べる度胸、どこか雪乃と似ている声と顔。

——そして全身からだだ漏れているエリートが、彼女が只者ではない事実を物語っていた。

## 魔王と怪物の会遇

雪ノ下さんのお姉さん。通称姉ノ下さん。そのうち会う事があるかもしれない可能性も無きにしも非ずくらいにしか思っていませんでしたが、こんなところで遭遇するとは予想外でした。

「こんなところでどうしたの？——あ、デートか！デートだな！このこのっ！」

「……」

実に楽しそうに雪ノ下さんを肘で突っついている姉ノ下さん。反対に冷めきった表情で鬱陶しそうにしている雪ノ下さん。あの雪ノ下さんをああしてからかえる人はそうはいません。というか今初めて見ました。恐いものを知らないんでしょうかね？それとも、雪ノ下さんが恐くないのでしょうか。

「ねえねえ、あのモノクルっ子って雪乃ちゃんの彼氏？彼氏？雪乃ちゃんああいうのがタイプなんだ！」

「……彼氏ではないわ。同級生よ」

「まったくまたあ！別に照れなくてもいいのにつ！」  
「……………」

あのゴーゴン張りの眼光を真正面から受けてなお、姉ノ下さんは面白そうにニヤニヤと笑っている。これが姉の貫禄というやつですかね。

しかしまあ性格が悪い。雪ノ下さんの反応を見れば我々がカッパルでない事など分かる筈なのに、姉ノ下さんはうりうりと雪ノ下さんにちよっかいをかけている。分かっていてやっていますね、あれは。

改めて見ると、姉妹とはいえ似ている所と似ていない所がありますね。顔や声や色白な肌はそっくりですが、プロポーシオンは姉ノ下さんの方が上手のようです。有り体に言ってしまうえばおっぱいが大き

い。雪ノ下さんが絶壁なら姉ノ下さんは双丘とでも言いませうか。我ながら下種な例えですが、事実ですから仕方がない。

それに性格も全く違う。クールビューティーで表情があまり変わらない雪ノ下さんと違い、姉ノ下さんはころころと表情を変えて笑っている。もし二人のうち、どちらかに道を聞くかとしたら確実に姉ノ下さんを選ぶでしょうね。美人であるがゆえに話しかけるのには勇気がいりますが、一度話してしまえば自然と会話が続く。そんな空気を形成している事から彼女のコミュニケーション能力の高さがうかがい知れます。

……なのに、何故でしょうね。姉ノ下さんとあまり仲良くなりたくないと思っている私がいる。その原因は恐らく、彼女を一目見た時から感じている違和感でしょうか。姉ノ下さんは雪ノ下さんをからかうのを止めて、私に笑顔を向けてきた。

「雪乃ちゃんの姉の陽乃です。雪乃ちゃんと仲良くしてあげてね」

「同級生の比企谷です。こちらこそ、雪ノ下雪乃さんにはいつもお世話になっております」

気さくにピースサインをしながらの自己紹介に、私も頭を下げて名乗り返す。……ああ、そうか。この人、雪ノ下さんの姉にしては人当たりが良すぎるんでしょう。なんせ数年放置した換気扇の汚れ並みに頑固な性格をしている雪ノ下さんのお姉さんですよ？ いじめられて、人ごと世界を変えるなんてとんでもない発想を生み出す性格を育てた家庭なら、姉ノ下さんの性格も半世紀くらい放置されていた換気扇の汚れの如くどぎついに違くない。川崎さんの件の時の雪ノ下さんの反応からみて、家庭やお姉さんの事は少なくとも彼女にとっては誰かに話しにくいのでしょうか。

なのに出てきたのは人当たりの良いお姉さん。自慢とまではいかなくても、普通に話す事に抵抗があるとは思えません。ならばあれは偽物。あの見た目通りの人間ではないのでしょうか。

私がこうやって思案している間に、姉ノ下さんは私の全身をぎつと

流し見た。ほんの一瞬の出来事でしたが、私の体に寒気が走る。

「比企谷君ね。うん、覚えた！よろしくね♪」

そして、姉ノ下さんが笑うと共に寒気が引いていく。……やれやれ、どうにもやりにくいタイプのようだ。如才ない振る舞いの中に、ほんの僅かだけ本性を覗かせる。変化に気づいたとしても、もう愛想の良さが戻っているから大抵の人間は気のせいだと思いついでしまふ。嘘を吐くとき、少しだけ本当の事を交えることで嘘だとばれにくくなるように。

とりあえず気を落ち着けるために、いつものように携帯をいじくる。姉ノ下さんはそんな私を気にすることなく、雪ノ下さんの抱えているぬいぐるみに目を付けた。

「あ、それ。パンダのパンさんじゃない？いいなー、ふわっふわだなあ。もしかして、彼氏さんからのプレゼント？」

「違います、私があげました」

「違わないじゃーん！君もムキになっちゃってえ。雪乃ちゃんを泣かせたりしたらお姉ちゃん許さないぞっ！」

姉ノ下さんは人差し指を立てると、それを私の頬にぐりぐりと押し当ててきた。ついでにおっぱいも押し当ててきた。これ多分、偶然を装ってわざと当ててますよね。どうやら予想以上に分厚い面の皮……いや、強化外骨格とでも言いましょうか。携帯いじくってる不愛想な男にこうもスキンシップを凶れるとはね。どれだけの場数を踏んできたのかは知りませんが、こうも男の理想を再現できるとは。流石、隠しきれしていないエリートが垂れ流しになっているほどの人は違いますね。

「姉さん、もういいかしら。用が無いなら私達はもう行くけれど」

助け舟を出してくれたのかどうか分かりませんが、雪ノ下さんが姉ノ下さんに向けて言った。まあ、姉ノ下さんがそれに従うわけもなし。いい加減頬が痛いんですけど。

「ほれほれー言っちゃえよー！二人はいつから付き合ってるんですかー？」

「だから彼氏じゃないんですって…」

「またまたー！」

聞く耳を持ちませんねこの人。うりうりと執拗にフィンガードリルを続ける姉ノ下さんに苛立ったのか、雪ノ下さんの目つきが険しくなった。

「……いい加減にして頂戴」

おおよそ、身内にかけるには冷たすぎる声音。これには姉ノ下さんも悪ふざけを止める他なく、すっと私から離れて力なく笑った。

「あ……ごめんね、雪乃ちゃん。お姉ちゃん、ちよつと調子に乗り過ぎたね…」

……違和感が、消えた？これは……もしかして本気でへこんでいるのですかね…。やはり妹は特別なのでしょう。その気持ちはよく分かります。

「どうやら機嫌を損ねてしまわれたようですね。ここは私にメルアドを教えて帰った方がよろしいのでは？」

「……へ？メルアド？」

「……何故、どさくさに紛れて姉さんの連絡先を知ろうとしているのかしら」

雪ノ下さんの顔がこちらへ向いた。不機嫌さがありありと表れている視線を受け流すと、姉ノ下さんがくすくすと笑いながら私に耳打ちをする。

「ごめんね？雪乃ちゃん、繊細な性格の子だから。……だから、比企谷君がちやんと気をつけてあげてね」

「嫌です」

笑顔から一転、虚を突かれたような表情で固まる姉ノ下さん。さつきからやられっぱなしなので、少し仕返しでもしておきましょうか。

「これまで、あなたの言葉にこう返した人はどれくらいいるのでしょうかね。まあ、エリートには通用しませんよ。あなたも同じエリートなら、分かるでしょう？」

「……………へえ」

雪ノ下さんに聞こえないように小さな声で囁くと、姉ノ下さんが笑った。これまでとは質の違う笑顔。例えるなら、新しいおもちゃを見つけて喜んでいる子供のようです。

「その薄ら寒い小芝居を止めて下さるなら、是非ともメル友になりたいものですね」

「……………あつはははは！比企谷君すっごい面白い！」

姉ノ下さんは快活に笑って私の背中を遠慮なしにぱんぱん叩く。初対面の人間に馴れ馴れし過ぎやしませんかね…。それを成せるのが姉ノ下さんなんでしょうけど。雪ノ下さんは我々が何を話していたのかは聞こえていないので、姉ノ下さんの態度に怪訝な目を向けるのみです。

「あ、そうだ比企谷君。よかつたらお茶しない？お姉ちゃんとしては

雪乃ちゃんの彼氏にふさわしいか、よく知っておかないといけな  
いです」

そう言って、むん、と胸を張って私に軽くウインクをしてきた。  
狙ってますねエ、男のハート。残念ながら、エリートのはハートは撃ち  
抜けませんけど。

「お茶よりもメルアドを教えてくださいの方がいいんですけど…」

「またそれ？もぉー、雪乃ちゃんがいるのがつくのは駄目だぞ？  
それにお姉ちゃんのメールアドレスは高いよ？いくら雪乃ちゃんの  
彼氏でも、タダでは教えてあげられないなー？」

「……彼氏ではないと言っているでしょう。比企谷君も、しつこくメ  
ルアドを聞き出すとするのは止めなさい。訴えられるわよ」

刺々しさの増した雪ノ下さんの声を無視して、意地悪くニヤニヤと  
笑う姉ノ下さん。さあ、どうする？という心の声が聞こえてきそう  
です。仕方がない、切り札を出しましょうか。

「無論、タダではありません。あなたにも相応のメリットがあります」  
「ふーん、どんな？」

姉ノ下さんの品定めをするように細められた目に向けて、私は携  
帯の画面を見せつけた。それを見た姉ノ下さんの目があつげにとられ  
て丸くなる。そんな姉ノ下さんの反応が余程珍しかったのか、雪ノ下  
さんも携帯の画面を覗きこむ。そして、その顔がみるみるうちに赤  
くなっていった。

「な、なんでこれが…!？」

「比企谷君！今すぐアドレス交換しよう！そしてその写メお姉ちゃん  
にもちようだい!!」

「姉さん!？」



私が了承するより早く、姉ノ下さんは私の携帯をひったくってアドレス登録をし始めた。雪ノ下さんがなんとか阻止しようと携帯を奪おうとしています。軽やかな動きで避けながらボタンを凄まじい速さで押しまくっています。ひよつとしたら、私より打つの早いかもしれません。

それにしても、ここまで効果覷面とは驚きましたね。やはり破壊力は抜群のようですね——ゆきにゃん写メ。

あの時撮っておいた写真がこんなところで役に立つとは、流石のエンジニアも予想できませんでした。消さないで置いて良かった。

「はい、登録したよ！早く、早くちょうだい！」

「ひ、比企谷君！送ったらどうなるか、分かって…」  
「送信しました」

姉ノ下さんから携帯を受け取り、迫る雪ノ下さんの手が携帯へ触れる前にさっさとあの写メを送ってあげました。自分の携帯を見て幸せそうにほっこりしている姉ノ下さんとは反対に、この世の終わりのように絶望した雪ノ下さんがこちらを睨んでくる。流石にちよつと悪い事しましたかね…。

まあいいか。さて、登録名は…：ゆきのんのお姉ちゃんだからはるのんにしておきましょうか。ん、いや、はるるんも良いかもしれない…：でもやつぱりはるのんにしよう。

電話帳に登録し終ると、雪ノ下姉妹が言い争いを始めていました。といっても、雪ノ下さんの言葉を姉ノ下さんが受け流しているだけなんです。

「…しつこいわ姉さん。ただの同級生だと言っているでしょう」

「だって、雪乃ちゃんが誰かとおでかけしてるの初めて見て、その相手が可愛い雪乃ちゃんの写メを持ってたんなら彼氏だって思うじゃない？それが嬉しくて」

まだその話続けてたんですか。雪ノ下さんも一々噛みついてないで聞き流せばいいものを。どうせ事実無根なんですから、そのうち飽きますよ。

「青春は一度きりなんだし、楽しまなきゃね！あ、でもハメ外しちや駄目だぞ？」

ハメどころか籬とか頭のネジが外れてる人とメル友なんですけどね。私が考えている事などつゆ知らず、姉ノ下さんは腰に片手を当て、前にかがんでもう片方の手の人差し指を立てながら注意した。そして、そのまま雪ノ下さんの耳元へ顔を近づけ、私にもギリギリ聞こえる位の小さな声で呟いた。

「二人暮らしの事だって、お母さんまだ怒ってるんだからね」

お母さん。あの音痴のガキ大将も震えあがる単語を聞いて、雪ノ下さんの体が強張った。一瞬の間を置いて、雪ノ下さんは腕に抱えたままのパンさんのぬいぐるみを強く抱いた。

「……別に、姉さんには関係のないことよ」

姉ノ下さんの顔と抱きしめているぬいぐるみの中間辺りに目をやり、雪ノ下さんは喋っていた。ふーむ、いつも人の目を真つすぐ見て喋っている雪ノ下さんが、叱られている子供のように地面を見ながら喋っている光景は珍しい。それほどまでに、母親の存在が大きいのでしょうか。

……それにあの顔には覚えがあります。川崎太志君との相談の時に、家庭の事情はどこにでもある、と呟いていた陰鬱な顔。ラウンジバーで、私が彼女を追いだすために言った言葉に打ちのめされた時の顔。

「意外ですね。あなた、家出少女だったんですか。まあ家庭環境が嫌で家出するなんてよくあることですから、そこまで深刻に考えなくてもいいのでは？」

現にうちの妹も家出しましたし。雪ノ下家の話だから何か壮大に思えますが、普通によくあることですよね。気休め程度のフオーでも効果はあったようで、雪ノ下さんの俯き気味の顔が少しだけ仰向いた。

「ふふ、そうだね。よくある事だもんね。お姉ちゃん、お節介が過ぎたね、ごめんごめん」

誤魔化すように笑みを浮かべると、姉ノ下さんは私に向き直る。

「比企谷君。雪乃ちゃんの彼氏になったら改めてお茶、行こうね？」

「そうですね。その時はドーナツでもご馳走して頂きましょうか。そのほうがお話もはずみますから。ねエ、陽乃さん？」

「……やっぱり君って面白いなあ♪じゃあ、またね！」

刹那、本性を見せた笑みは一瞬で仮面の中に隠れた。そして華やかな笑顔の仮面を被ったまま、姉ノ下さん改め、陽乃さんは手を振りながら去っていった。

……はあ、疲れた。まったく、誕生日プレゼントを買いに來ただけだというのに、どうしてこう面倒に巻き込まれてしまうのでしょうか。これもエリートの性なんでしょうか。どっと疲れが出てきたので近くのベンチに座ると、雪ノ下さんも隣に座った。

「……いやはや、凄いお姉さんをお持ちのようで」

半ば尊敬、半ば同情で思わず眩くと、雪ノ下さんは静かに頷いた。

「姉に会った人は皆そう言うわね」

「でしようねエ…」

「ええ。容姿端麗、成績最高、文武両道、多芸多才、そのうえ温厚篤実…。およそ人間としてあれほど完璧な存在もないでしょう。誰もがあの人をそうやって褒めそやすわ。…。あなたも、私をだしにしてまで連絡先を知ろうとしていたものね」

「そうですね。一番凄いののは、そういう人間であるかのように振舞い続けられる精神力でしょうかね。同じエリートとして敬意を表しますよ」

「……………え？」

はい？何ですかその反応は。先程まで冷たい目で私を見ていた雪ノ下さんでしたが、急にぼかんとした表情になりました。

「何ですか？まさかエリートがあれしきの外面を見抜けないとでも？やはりあなたは凡人止まりですね。エリートの事を何も分かっていない」

「……………よく分かったわね。私の家のことは知っているでしょうけど、仕事柄、長女である姉は挨拶回りやパーティーに連れまわされていたのよ。…………その結果できたのが、あの仮面よ」

私の発言に噛みつきもせず、素直に感心しているようです。それほどまでに、陽乃さんの仮面に気づける人は少ないのでしょうか。まあ当然ですよ。陽乃さんもエリートですから、凡人に分かるような被り方はしないでしょう。

「…………腐った目でも、いえ腐った目だからこそ見抜けることも、あるのね…」

「薄汚いものを見抜く自信がありますよ。なんせ、薄汚い人間見続けて腐りましたから」

陽乃さんもきつと同じでしょう。いえ、私以上に汚いものを見続けているはず。なのに私のように目が腐っていないのは、あの仮面が隠しているから。とてもじゃありませんが、私にはできない芸当です。

「それに連絡先だって、私的にはあつた方が良いと思いますが」

「…どうして？」

「きつとあの人、これから事あるごとに絡んでくるでしょうから」

その未来が容易に想像できるのか、雪ノ下さんはこめかみを押さえ盛んに溜息を吐いた。むしろ絡んでくるどころか、自分から問題持って来たり引つ掻き回したりまで想像できます。

正直、一度目を付けられたのなら逃げる事は困難でしょう。だってエリートなもの。ああいう人を上から押さえつけようとするのは無謀ですから、わざわざメル友という関係になったんですもの。

前に、坂本さんが言っていたことを思い出す。あの頭空つぽの馬鹿が、珍しく真剣な話をしていた時を。

~~~~~

『コラアアア陸奥ウウウ!!お前、あの商談ばどういうつもりじゃ!!』

『それはわしの台詞じゃき！貴様こそ、何故あそこで止めたんじゃ！』

『……すいません、反省会ならよそでやって頂けませんか？』

『粘ればもつと値切れたきに！もつとわしらが得できたはずじゃ！』

『……いかん。いかなぜよ陸奥、その考えはいかん』

『……何がじゃ？』

『商いっちゅーもんは与えて与えられるもんじゃき。自分らが得することばかり考えておつたら、それは商いとは呼ばんぜよ。そんな考えでおつたら、いつの日か誰とも商いできなくなるぜよ』

『……じゃが』

『商いは一人でやれるもんじゃないきに、相手の得する分の事も考えるぜよ。八〇子<sup>ビ</sup>、お前も聞いちよれ。与えて与えられる、利用し利用される関係つちゅーもんを覚えるぜよ。押さえつけて思い通りにしようとするんじゃないやなか。妥協して、使って使われるぜよ。相手が切れ者なら尚更じゃ。これが一番、得するやり方ぜよ。覚えておくきに、陸奥、八〇子<sup>ビ</sup>』

『……うん。分かったきに』

『あなたはその前に私の名前を覚えてください』

~~~~~

お互いを利用し、利用される。対等な関係を築いた上のその関係が、お互いにとって一番得だと陽乃さんも理解している。別れ際、下の名前で呼んでもそれを咎めなかったのがその証拠です。私を自分と対等の立場と認め、私の意図を察した。

アドレスを交換したら写真が貰えたように、何かを用意すればそれ相応のメリットもあると。

敵対するより健全な関係ですね。私は陽乃さんを敵に回したくはないし、陽乃さんも私が厄介な存在であることは分かっているはず。だからこそ、彼女はこの条件を飲みました。いらない怪我をしたくないから。

……まあ、逆に言えば提案を飲んだ時点で、そのうち我々がちよつかいかけられる事は確定してしまっているんですけどね。はあ、気が重い……。

## 家族とは、人それぞれ

雪ノ下陽乃の来襲により色々と削られたので、ベンチに座って休憩している二人。そこに向かって大きく地面を鳴らしながら走ってくる巨大な物体があつた。最初に気付き、それを目にした雪乃は短い悲鳴を上げて隣の八幡の腕にすがり付く。八幡が何事かと携帯の画面から視線を移すと同時に、走ってきた毛むくじやらの物体が目の前で止まって吠えた。

「わんー！」

「ひっ!?ひ、比企谷君……い、いぬ、おっきな犬が……」

「おや、定春君ではありませんか」

大人の背丈をゆうに越える大きさで、特徴的な眉をした白い犬、定春の頭を八幡は携帯を持っていない方の手で撫でた。気持ち良さそうにしている定春の後ろから、ちぎれたリードを持ったチャイナ服の少女と髪を三つ編みにした少年が走ってくる。

「定春ウー!どうしたネ急に……ん?アレ、ヒツキーアルか?」

「奇遇だね、こんな所で」

「どうも、神楽さん、神威さん」

定春の飼い主で八幡のメル友の神楽と、その兄の神威が笑顔で挨拶をする。神威は八幡の後ろに隠れるように立つ雪乃を見て、笑顔のまま顎に手を当てて首を傾げた。

「信女とデート……って訳じゃなさそうだ。隣の定春にビビってる子、誰?」

「ほら、前にメールしたでしょ?部活仲間の……」

「あ、奉仕部のゆきのんアルか!」

神楽の言葉で雪乃の凍てつくような視線が八幡の背中へと突き刺さる。

「……比企谷君、一体どういう説明をしたのか詳しく…」

「わん」

「ひっ……!」

「アレ?どうしたアルか?」

「すいませんねエ。この人、犬苦手のようでした」

「マジでか。こんなにかわいいのに……ねー定春?」

「なあくにかわいいのに、だ。そのお嬢ちゃん、反応が当たり前なんだったの」

雪乃が定春を怖がっているのが信じられない神楽だったが、その後ろから雪乃の態度を肯定する中年の男が歩いてきた。

「阿伏兔さん…あなたも一緒でしたか」

「よオ、ハチ公。元気してたか?」

「ええ、まあ。阿伏兔さんのほうは…そうでもないようですねエ」

「まあな…」

阿伏兔の左腕は包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「一体どうされたんですか、その有り様は?」

「それがよく、朝にこいつらを迎えに来たら、このワン公にガブリとやられちゃってな…。これでもう何回目?おじさん、このワン公に嫌われてんのかねエ?」

「そんな事ないアル。ただおじちゃんの手が美味しそうだけアルよ、きつと」

「それ、慰めになってないからね?おじさんの手はドッグフードじゃないからね?」



フォローになつていないフォローをする神楽。

「そういや、ハチマンとゆきのんはどうしてここに？まさか浮気？」

「冗談でも止めてくれませんかね、そういう事言うのは」

「ははっ、ゴメンゴメン」

「奉仕部の事を聞いているのなら知っていると思うのだけれど、もう1人の部員の誕生日プレゼントを買うのについてきてもらっていたの。あと、ゆきのんと呼ばないでもらえるかしら」

「へえ、そうなんだ。俺達は家族サービスって事で、あのハゲに遊びに連れてきてもらってたところ」

「お前、自分の父ちゃんをハゲって呼ぶなよ……」

「着いて早々、『俺の腹がアテンションプリーズ』とか訳の分かんない事言つて便所に籠る奴なんて、ハゲで充分だと思わない？」

「……」

神威は笑顔ながらも、若干の不機嫌さを醸し出していた。返す言葉もなく阿伏兎は口をつぐませるが、代わりに雪乃が口を開いた。

「…休日に遊びに連れて行ってくれるお父さんがいるのね。少し、羨ましいわ」

「ゆきのんのパピーは違うアルか？」

「……私はあまりそういう経験は無いわね。姉はよく挨拶回りやパーティに連れまわされていたけれど……。それと、ゆきのんと呼ばないでもらえるかしら」

ふう、と小さく息を吐いた雪乃の横顔を見て、八幡のモノクルが僅かに光る。

「頭はどうアル？フサフサアルか？」

「……あ、頭？髪の話かしら……。まだ若々しい方だと思うけれど……」

「このお嬢ちゃん、キツツイ性格してるなアオイ。まだって言ったぜ、

まだって」

「普段はもつとキレキレなんですけどね」

さりげない雪乃の毒舌に引き気味の阿伏兔。神楽と雪乃はそんな事を気に留める様子も無く、父親についての話を続けていた。

「いいなー、フサフサなんだ。一緒に歩いてても恥ずかしくないアルな。うちのパピー、毛根が絶滅したから一緒に歩くの恥ずかしいアル」

「そう……でも、私はそもそも一緒に歩いた経験すらないから……」

「そうアルか。家族って難しいアルな……」

「ええ、本当にそう思うわ……」

「パピーが聞いたら泣きそうな話だなア」

「そんなもんじゃないの？年頃の女の子の話なんて」

「こんな風に言われる父親にはなりたくありませんねエ」

何故か父親に抱く悩みを共感しあう神楽と雪乃。阿伏兔がこの話が父親にばれない事を内心祈っている中、携帯電話がバイブレーションを始めた。

「ん？お、そのパピーからメール来たぞ」

「ようやくウンコ終わったアルか？」

「……あの、神楽さん。女性がそういう言葉を使うのは止めた方がいいのではないかしら……」

「なんで？ウンコはウンコアルよ？」

「いえ、あの、確かにその通りなのだけれど、そこは表現の仕方を抑えて……」

「言っても無駄ですから気にしないで下さい。それより、メールの内容は何なんですか？」

神楽の下品な言葉づかいを注意する雪乃だが、何を言っても無駄だ

と既に諦めている八幡がメールの内容を阿伏兔に聞く。

「えつとな…紙が無くてケツ拭けない、ヘルプミー。…だとよ」

「元から髪なんてないアル」

「いや、それ字が違うからね?」

「あ、ちよつとあれ見てよ。旨そうな物焼いてるネ」

「おい、父ちゃんからの救難信号は無視か?」

メールの内容を無視して、指さした方向に神威と神楽と定春は走りだした。

「キヤツホオオオイ!!行くよ定春、おじちゃん!」

「わん!」

「じゃあね、ハチマン、ゆきのん」

「おいちよつと待てエ!?なんで二人して左手掴んでるんだ痛でででででででぎれるちぎれるウウウウ!!」

「だから、ゆきのんと呼ばないでと…」

怪我している左手を掴まれ、雪乃の抗議をかき消す悲鳴を上げながら阿伏兔が引きずられていく。

「行ってしまいましたね。私達も帰りましょうか」

「そうね…」

「プレゼント、どうやって渡します?私がメールで呼び出してもいいのですが」

「……いえ、私から話しておくわ」

「そうですか」

慌ただしい休日は終わりを告げ、優秀な凡人少女にとっての分岐点が始まるうとしていた…。

たった一步を踏み出せば、溝はきつと越えられる

休みが明けて月曜日。由比ヶ浜さんへのプレゼントが鞆の中で潰れてしまわないように、荷物を二つに分けて学校へと行く。そういえば、雪ノ下さんが由比ヶ浜さんに話をすると言っていました。どのタイミングで話しかけるつもりなのか。彼女は三浦さんと二回も衝突していますし、学校内でもかなりの知名度ですから、教室に来たらまたひと悶着ありそうですね。

なんてことを考えていたら校門へ着きましたが……おや、僅かながら人だかりができていますね。しかも立ち止まっているのはいるのは男ばかり。微妙な知名度のアイドルでも転校してきたのでしょうか。人と人の僅かな隙間から人だかりの中心を覗いてみると……ここにいるのは雪ノ下さんではありませんか。しかも、相対しているのは葉山君のグループ、の中の由比ヶ浜さんのようです。

……え、まさかあの、校門の前で待ち伏せしてたんでしょ。うかね？だとすれば、周りの野次馬が男ばかりなのも頷けますが……。

親の仇でも見るかのような目で睨みをきかせている三浦さんに、気まずそうに視線を交わす葉山君達。そしてそれらをガン無視して由比ヶ浜さんと何か話している雪ノ下さん。言葉を交わせば十中八九罵り合いに発展するから、無視を決め込むことにしたのでしょうか。残される由比ヶ浜さんが気の毒ですね。

教室で自分の席に着くと、川崎さんと戸塚君が駆け寄ってきました。

「ねえ、なんか校門に雪ノ下がいたんだけど……」

「比企谷君、何か聞いてた？」

「……まあ、仲直りに向けての第一歩とでも言いましょうか」

「仲直り？ふーん、それでか……」

「ちゃんと仲直りできたらいいね」

「それはあの二人次第ですかね」

不穏な空気を纏った葉山君のグループが入ってきたところで、会話を止めて席に戻っていく二人。三浦さんの不機嫌面が酷いですね。葉山君が何やらご機嫌取りをしているようですが、当事者の由比ヶ浜さんが上の空状態なので効果は薄いようです。心中お察しします。

~~~~~

授業が終わって帰り支度を済ませていると、由比ヶ浜さんがおどおどしながら私の隣りへやってきました。

「ひ、ヒツキー…あのさ…」

「由比ヶ浜さん、今日は私は部活を休みます。雪ノ下さんにそう伝えておいてもらえますか？」

「え、あ、えつと…」

「朝、雪ノ下さんに言われたのでしょうか？部室に来てほしいと」

由比ヶ浜さんは無言でこくりと頷いた。

「なら、早く行った方がよろしいですよ。あの人、信じられないくらい早く部室にいますから」

「……………うん…」

教室から廊下に出て、由比ヶ浜さんは部室へと向かう…………と、思いきや反対にこちらに振り向ききました。

「ヒツキー、お願い…一緒に来てくれない…?」

「お断りします」

由比ヶ浜さんの顔には不安の色が見える。きつと仲直りの時に私

にフォローしてもらいたいのでしょう。その気持ちは理解できませんが、今回に限っては私は口出しする気はありません。これはあなた方二人の問題ですから。

お願いをあつさり断られた由比ヶ浜さんは、大きく肩を落とす。その目は若干涙で潤んでいます。そんな目をして私も私は行きませんか。らね。

今回の出来事は二人の関係を大きく変えるものとなる。ただの部活仲間か、それとも、もっと進んだ関係か。私の介入によって左右されず、二人がどうなっていくのか。非常に興味があります。

……彼女らはお互いに、本物という存在になれるのか。

私にとっての信女さんのように、かけがえのない人になれるのか。

本音を言っても逃げなかった相手。

本音を隠さず言える相手。

それぞれ理由は違いますが、求めていたものはきつと同じものなのでしょう。

そして今、見つけかけたものを無くしてしまうのを恐れている。雪ノ下さんも由比ヶ浜さんも、いつの間にごここまで仲良くなったのか……自分でも不思議に思っている事でしょう。

「……」

なおも由比ヶ浜さんは、奉仕部へ向かおうとはしない。雪ノ下さんに拒絶されるのを恐れ、怯えてしまっているのでしょう。

……やれやれ、世話のかかる人だ。

「由比ヶ浜さん」

私が声をかけると、由比ヶ浜さんは俯き気味の顔を上げた。私は鞆の中から丁寧にラッピングされた箱を取り出し、由比ヶ浜さんの顔の前へと差し出した。

「お誕生日おめでとうございます」

「……えっ?」

ぽかんとアホ面をさらす由比ヶ浜さん。箱と私の顔を何度も見てからようやく我に返り、おずおずと両手でプレゼントを受け取ってくれました。

「あ、ありがと…。ヒツキーってあたしの誕生日知ってたんだ…」

「自分でメールしてたの覚えていないんですか?」

「そうだったけ…?」

頭を人差し指でかきながら、嬉しそうにはにかむ由比ヶ浜さん。さつきまでの不安な気持ちは幾分かは吹き飛んだようですね。

「まあ、由比ヶ浜さんの誕生日を祝いたいと提案したのは雪ノ下さんなんですけどね」

「……へ？」

「では、私はこれで」

私は踵を返して歩き出す。そして少し経つと、廊下を慌ただしく走る音が遠ざかっていきました。流石に露骨過ぎたかもしれませんが、あの人の頭の出来だと理解してもらえるか不安でしたからねエ…。

…しかし、エリートとしたことが凡人の手助けをしてしまうとは…。

……。

……まあいいか。認めてしまおう。

まごまご悩んで足踏みをしているなら、一步を踏み出す手助けをしてあげる程度には、あの人達の事を気に入っているみたいですから。

~~~~~

翌日、放課後になった瞬間に由比ヶ浜さんが消えていました。もしや絶交したのでしょうか、と頭の片隅で考えながら部室へと向かう。そして部室の前へ立つと、そんな予想は簡単に碎かれました。中から聞こえる騒がしい声。その主は恐らく彼女でしょう。



「どうも。私が最後のようですね」

「ヒツキーやつはろー!」

「こんにちは。……由比ヶ浜さん、いい加減離れてちょうだい」

扉を開けて私の腐った目に入りこんできたのは、女の子同士のイチャコラでした。実際は由比ヶ浜さんが雪ノ下さんに抱き着いているだけなんですけどね。

「ね、ね、聞いて! ゆきのん、あたしのためにケーキ焼いてくれたんだよ!」

「ほう、さぞや美味だったのでしょうねエ」

「まだ食べてないよ?」

「……はい?」

「だって、昨日ヒツキーいなかったし。ね、ゆきのん」

「……ええ。あなた一人を仲間外れにはできないって、由比ヶ浜さんが……」

「て、わけでき、今日パーティしようよ! 大丈夫! もうお店とか予約してあるから!」

「抜け目ありませんね、こういう時のあなたは……」

「その頭の回転の速さを、日常でも活かせたら……」

「はい、今日は難しい話はナシナシ! ヒツキー、さいちゃんとか誘っておいてね!」

「仕方がありませんね。凡人のあなたが輝ける年に一度の日くらい、顎で使われてあげますよ」

「……ケーキ、足りるかしら……」

彼女らが昨日、何を語り合い、何をぶつけ合ったのかは知る由もありません。ですが、こうして共に誕生日を祝う事が出来るのは喜ばしいことなのでしょう。興奮冷めいらぬ様子ではしゃぐ由比ヶ浜さんと、鬱陶しそうにしながらも時折微笑んでいる雪ノ下さん。きつと彼女らの関係は、友達という簡単な言葉で表す事はできないでしょう。

その答えが何なのかはエリートである私にも分かりませんが、少なくとも答えに一步近づいたのは確かです。

ああ、そうそう。少しだけ成長した由比ヶ浜さんを見て、私はある事を確信しました。

「由比ヶ浜さん。あなたが首にしてるそれ、犬用です」

結論：アホは成長してもアホですね。

ほう・れん・そうは大事だって第一話で言ってたじゃないですか

『おはようございまーすー！本日の天気は快晴、こまめに水分を補給して熱中症に気をつけて過ごしましょう！』

季節は既に夏本番に入り、家にいても聞こえてくるセミの声に辟易しながら比企谷八幡はテレビを見ていた。夏休みの課題は最初の数日でさっさと終わらせてある。それというのも、夏休み明けの模試や受験勉強に追われる妹の小町の勉強を見てあげたり、川崎沙希のスカラシップ取得や戸塚彩加のテニスの練習に付き合ったり、メル友からのヘルプで海の家でもっさりした焼きそばを作ったり肝試しの手伝いをしたりと、予定が山積みだったからだ。エリートの夏は忙しいのである。

幸いと言えるのかどうかは分からないが、メル友のヘルプ要請は夏休みの前半に集中しており、後半にはほとんど予定が入っていない。多忙だったせいで信女とも会えず、少しフラストレーションが溜まっている八幡は、夏休み後半は信女と遊び倒そうと密かに考えていた。ちなみに信女の方も予定があったため、いつものように家を訪ねてはこなかった。

ブラック星座占いという物騒な名前のコーナーを見終わり、いつものように携帯を手取る八幡。しかし、携帯の画面は真っ暗だった。電源ボタンを押しても何の反応もない携帯を見て、充電し忘れていた事に気づく。忙しかったせいか、普段なら絶対にしないミスをしてしまったのだ。

「どしたのお兄ちゃん？携帯見つめて固まっちゃってさ」

「……充電し忘れてしまいまして」

「おお……あの携帯依存症のお兄ちゃんがそんなミスをするなんて……」

リビングのテーブルで学校の課題をやっていた小町が兄の異変に気づき、声をかけた。

「まー、お兄ちゃん色々頑張ってたからね。流石に疲れてたんじゃない？あ、それとも信女さん分が足りなかった？」

「両方ですかねエ…」

「ありや、素直に認めちゃったよ。これは明日は雪が降るかもね。あ、そうなったら涼しくていいよね！小町ってば天才！」

「バカな事言つて弱ってる兄の疲れを増大させないでほしいのです。それよりも、課題の進み具合はどうですか？」

「自由研究と読書感想文以外は殆ど終わってるかな。お兄ちゃんが手伝ってくれたら、もっと早く終わるのに」

「あなたは凡人とはいえ、エリートの妹なんですから学校の課題くらい一人で片づけなさい」

「お兄ちゃんの言うエリートって結局何なのさ…」

シスコンエリートである八幡だが、必要以上に妹を甘やかす事は基本的にしない。小町も兄が忙しい中で時間を割いてくれている事は知っているので、本気で手伝ってもらおうとは思っていなかった。

「さて、お兄ちゃん。小町は頑張つて勉強したのです。課題だけじゃなくて、受験勉強も一生懸命やったのです」

「……はい？」

急に真面目な表情で語りだした小町を、八幡は怪訝な目で見る。

「小町の頑張りには、お兄ちゃんもよく分かってくれていると思うのです」

「まあ、凡人のあなたにしてはよくやっていますよ」

「そうです。そんな頑張った小町には、自分へのご褒美があつてもいいと思うのです。飴と鞭、美味しい飴を貰えば、どんな厳しい愛の

鞭にも耐えられるのです。目の前に人參をぶら下げられたお馬さんは、どこまでも走りぬく事ができるのです」

「あなたそれ、自分を馬と同列に扱ってるって事、分かってます?」

「とにかく!小町にはご褒美が必要です。だからお兄ちゃんは小町と一緒に千葉へ行かないといけないのです」

「はあ、千葉ねえ…」

八幡は顎に手を当てて思考する。メル友からの謝礼という名のバイト代もそれなりの額はあり、二人で出かけて遊ぶくらいはどうという事は無い。金以外の問題はシスコンエリートであるが故に無視できるものだった。

「構いませんが、今すぐという訳にはいきませんよ。しつかり計画を立てなければね」

「もー、お兄ちゃんは固すぎるよ!そこまできっちり考えなくても大丈夫だって!」

「…:では、せめて携帯の充電くらいはさせて頂きたいのですが」

「うん、いいよ。はいこれ、充電器!」

「どうも」

小町は八幡に携帯の充電器を渡すと、スキップしながら自室へ戻る。八幡は早速充電を始め、少し時間が経ったところで電源を入れなおした。自身は大量にメールを送る八幡だが、送られてくるメールは思いの外少ない。何の変哲もない画面を見て小さく溜息を吐いたところで、携帯の着信音が鳴り響く。

「もしもし?」

『八幡?私。あなたのぶたすだお』

「…:久しぶりに声を聞きましたね、信女さん」

愛しい未来の嫁の声を聞き、八幡の表情がほんの僅かに緩む。心境

は信女も同じらしく、声から喜びが感じられた。

「ところで、何の御用でしょうか？」

『あのね、松平のつつあんから連絡がきたの。急な話なんだけど、八百万同好会でキャンプをする事になったから一緒にどうか、つて』  
「キャンプですか…」

やおよろずどうこうかい  
八百万同好会。とある大学のサークルの一つであり、坂田銀時、桂小太郎、坂本辰馬、高杉晋助ら四人を中心としたサークルである。活動内容は主に歴史の研究であるのだが、構成員の誰一人としてそんな事を覚えていない。学ぶときはきっちり学び、遊ぶときはしっかり遊ぶ、をモットーにして活動している自由奔放な集団であった。

八幡にとってこの話は渡りに船だった。小町も八百万同好会の面々と面識があるため、参加する事に反対はしないだろう。二人だけで千葉に行くより、気心の知れた友人達とキャンプをする方が良いに決まっている。話によれば必要な物は松平のつつあんこと松平片栗虎が用意してくれるので、こちらの準備はほぼ必要ない。それに自分も信女に会える。

「分かりました。小町さんにも伝えてきますので、集合場所をメールで送ってください」

『うん。待ってる』

八幡はとりあえず電話を切り、自室で出かける準備をしている小町にキャンプの事を伝えるために部屋へと向かった。部屋の扉をノックし、小町の了承を得てから部屋へと入る。

「小町さ…まだ着替え中ではありませんか」

「や、お兄ちゃんなら別に良いし」

「あのねエ…」

着替え途中の小町を見て、八幡は妹のズボラさに呆れて溜息を吐く。小町はそんな兄に構わず着替えを続けていた。

「で、どしたの?」

「ああ、そうでした。小町さん、朗報ですよ。信女さんから連絡がありました。八百万同好会の皆さんとキャンプに行ける事になりました」

「……えっ?」

きつと諸手を上げて大喜びするだろう、という八幡の予想に反し、小町は着替え途中のまま固まった。予期せぬ反応に八幡も困惑を隠せない。

「…どうしました?あなた、キャンプ嫌いでしたっけ?そもそもキャンプの意味を知ってましたっけ?」

「馬鹿にしすぎでしょ!?!?ていうか、え?キャンプ?信女さん達と?」

「他に誰がいるんです?」

「え?え?お兄ちゃん、奉仕部で合宿があるんじゃないの?」

「……は?いえ、そんな連絡は来ていませんが…」

「でも、結衣さんからお誘いのメールが来たよ?」

「……私には来ていませんが」

「充電切れてたし、届いてないんじゃない?」

「昨日は普通に使えていましたよ。その後に充電が切れたんですから」

「えっ…小町はもつと前からメール貰ってた、けど…」

気まずい空気に言葉を詰まらせながら言う小町と、どういう事なのかを考える八幡。奉仕部の活動だというなら自分に連絡が来ないはずがない。むしろいらぬ事まで色々連絡するまでである。夏休み中は忙しかったため、メールをする機会は目に見えて減っていたのは確かであるが。

「ど、どうしようお兄ちゃん…もうお父さん達に合宿に行くって言うちやった…」

「…とりあえず、平塚先生に連絡してみましよう。何かの手違いという事もありますから」

「う、うん…」

確認を取るために一度、充電中の携帯を取りに行く。そしてリビングに入って耳にしたのは、ひっきりなしに鳴るメールの着信音だった。

「……なんか、携帯鳴りまくってるね」

八幡は無言で携帯を取る。画面には不在着信一件とメール通知が数件。どれも今から連絡しようとしていた平塚静からのものだった。

---

From しずちゃん

Sub 平塚静です。メール確認したら連絡をください

比企谷君、夏休みの奉仕部の活動について至急連絡をとりたいです。折り返し連絡を下さい。

もしかしてまだ寝ていますか（笑）

先程から何度もメールや電話をしています。本当は見ているんじゃないですか？

ねえ、見てるんでしょ？

でんわ だろ

---



「……お、お兄ちゃん……」

メールの内容を見た小町が恐る恐る声をかける。静から来たメールの内容は、長期休暇中に奉仕部でボランティア活動をするというものだった。それで全てを察した八幡は、もはや溜息すら漏らさず濁り切った瞳で携帯の画面を見続けていた。

~~~~~

「さて……電話に出なかった言い訳を」

「充電切れです。それよりも二泊三日の合宿にもかかわらず、私には一切の連絡も無しで妹には連絡が届き、あまつさえ当日になってのこのご連絡を寄越した理由を吐きなさい」

駅のバスロータリーに止めてあるワンボックスカーの前で、サングラスを外して鋭い視線を向ける静。しかし、その台詞は遮られ、苛立ちがありありと表れている口調で逆に問い詰められる。荷物を持つ八幡の隣には、なんとも居づらそうにしている小町の姿もあつた。静は少々たじろぎながら、八幡の質問に答える。

「い、いや……事前に連絡すれば君は何かと理由を付けて逃げるだろうと思つてな……」

「偏見で物を考えないで頂けますか？自分が口で勝てないからつてその言い草は無いでしょう」

「そ、それは……普段の君の態度を鑑みればだな……」

「……お話になりませんね。もう小町さんは行く準備を整えていましたし、部活動の一環という事なら参加しないわけにはいきませんから一緒に行きますが、こういうことする度にご自分の評価が下がっていくのを自覚したほうがよろしいですよ」

言うなりさつさと車のドアを開けて入ってしまう八幡。静はそれを唾然とした表情で見ている。そして小町は八幡が車に入ると、恨みがましい視線を静へと向ける。

「あ、小町ちゃん！やっはろー！」

「こんにちは、小町さん」

「小町ちゃん、やっはろー」

気まずい空気の二人に声をかける結衣と雪乃。そして静に声をかけられて合宿に同行する事になった彩加が合流する。

「あ、どうも…やっはろー、です」

誰が見ても気持ちが悪く沈んでいると分かるような返事に、挨拶をした三人は一瞬固まってしまう。

「えっと、どうかした？」

「結衣さん…どうしてお兄ちゃんに連絡してないんですか…？」

「え、ヒッキーいないの？っているじゃん！来るの遅いし！」

車に先に乗っていた八幡を結衣が指差すが、八幡は横目でちらりと結衣達を見た後すぐに携帯へ視線を戻してしまった。

「……えっと、ヒッキー機嫌悪くない？」

「そりやそうですよ…お兄ちゃんだけ、今日合宿があるって知らなかったみたいですし…」

「えっ!？」

「そうなの？僕は平塚先生に誘われたんだけど。雪ノ下さん達もそうですよ？」

「ええ、先生から連絡を貰ったわ」

「あたしも…。それでゆきのんにメールしたら、同じメールが来てたって…。それで、小町ちゃんも誘おうって話になって…」

「それは嬉しいんですけど…。私は兄がその事知っているものだと思うてましたよ…。今日、信女さん達からキャンプに行かないかって電話が来まして、その後に奉仕部の合宿についてのメールがお兄ちゃんの携帯に…」

「……………」

その場にいた全員が無言で静に顔を向ける。雪乃は冷たく見下すような、結衣達は非難がましい目を向けていた。

「そ、そんなに悪い事をしたのか？」

「当たり前でしょ!?!奉仕部でヒッキーだけハブにされたってことじゃん!」

「しかも、奉仕部じゃない僕や小町ちゃんには連絡が来てたのに…」

「…………部長として、部員全員に確認を取らなかった私にも責任はありますが、いくら何でもこれは…」

「雪乃さんは悪くありませんよ。先生、お兄ちゃんに知らせるとなんだかんだと理由付けて逃げるとか言っていましたし…」

「…先生、彼はこれまでにサボった事はありませんし、休んだ時も連絡はしていましたよ?それなのにどうしてそんな結論に至るのか説明を要求します」

「うぐ…………そ、それよりもだ!もう時間がないから早く出発するぞ!ほら、早く乗りましたまえ!」

静は追及から逃れるように大きな声で乗車を促すと、さっさと運転席に乗り込んでしまった。車の席は真ん中が二人、後ろに三人乗れるスペースになっている。ちょうど男子二人、女子三人なのでそのように分かれて座った。

「八幡、災難だったね…。何度かメールしようとは思っただけけど、忙

しそうだったし…」

「…お気になさらずに。全ては運転席に座ってる馬鹿の責任ですから、あなた方に落ち度はありません」

「比企谷君。あなたは知らされていなかったのだし、無理に参加しなくてもいいのよ」

「まあ、キャンプの電話来たのも今日ですし、両親も小町さんも合宿に行くという事で話が進んでいましたからねエ。一応、部活の方を優先した方が良くかと思いましたが。信女さんとはこの後いくらでも会えると思いますし。それに、あなた方とのキャンプも嫌ではありませんから」

「ほんと、ごめんね…」

「いえ、こちららも空気を悪くして申し訳ありません。こうなつてしまったものは仕方ありませんから、開き直つて楽しむ事にしますよ」

車内の空気がいくらか軽くなったところで車が発進する。駅から千葉に行くには国道十四号に進むのだが、車はインターチェンジの方へと進路を変える。それに気付いた彩加が困惑の声を出した。

「あれ、高速？千葉駅に行くなら国道じゃないの？」

「……フツ」

「どうせ、『いつから千葉駅に向かうと錯覚していた？残念、千葉村でした！』とか言いたかったんでしよう？」

「……」

「お兄ちゃん、そうやって人の発言先読みして潰すの、嫌われるから止めた方が良くって言われたじゃん…」

「分かりやす過ぎるんですよ、この人は」

彩加の疑問に笑って答えようとする静だったが、車が進路を変えたところで既に何を言いたいのか予想できていた八幡が静の持ちネタを潰した。静は誰にもばれないように、後ろを向きかけた顔を前に戻した。

世界は狭いようで広いけどやっぱり狭い

大自然の山々に囲まれた場所にある保養施設、千葉村。駐車場に止めた車から降りた結衣は澄んだ空気をたっぷりと吸い、大きく背伸びをした。

「んーっ！きつもち良いーっ！」

「……人の肩を枕にしてあれだけ寝ていれば、それは気持ちいいでしょうね」

「う……ぶ、ごめんってばー！」

結衣に続いて車を降りた雪乃がちくりと言うと、結衣は両手を合わせて謝っていた。

「わあ……本当に山だなあ……」

「小町は去年来たばっかなんですけどねー。でも、やっぱり気持ちいいなあ……」

「……」

彩加と小町は目の前に広がる大きな山に感動し、八幡は携帯を片手に写メを撮っている。

「ここからは歩いて移動するから、積んである荷物を下しておきたまえ」

自然を堪能する時間は一旦終わり、静の指示に従ってに荷物を下し始める。その最中、もう一台のワンボックスカーが近くに停車し、男女合わせて四人を降ろしていった。何気なしにそちらを見た八幡は、その四人が顔見知りだという事に気づいた。

「……葉山君？」

「やあ、ヒキタニ君」

気さくに片手を挙げながら合流してきたのは、葉山隼人、三浦優美子、戸部翔、海老名姫奈の四人。結衣が所属しているグループのクラスメイト達だった。

「あなた方もボランティア活動に駆り出されたんですか？」

「いや、募集がかけてあったから応募したんだよ。奉仕活動で内申点を加点してもらってるって聞いたからさ」

「え、これって奉仕部の合宿じゃないの？」

「あーしはタダでキャンプできるっつーから来たんですけど？」

「だべ？いやータダとかやばいっしょー」

「葉山君と戸部君がキャンプすると聞いてh s h s」

全員がバラバラの理由を言い出すと、静は軽く頭を抱えて溜息を吐いた。

「まあ、概ね合っているしよかろう。君達にはしばらくボランティア活動をしてもらう。なぜだか私が校長から地域の奉仕活動の監督を申し付けられてな…」

「奉仕部、なんていかにもな名前の部活の顧問ならそうなるでしょうね。残念ながら我が校の校長先生は奉仕部の理念を理解していないようですが」

どこか棘のある八幡の言葉に、静はコホンと咳払いをして続ける。

「君達には小学生の林間学校のサポートスタッフとして働いてもらう。千葉村の職員及び教師陣、児童のサポートが主な役割だ。簡単に言うと雑用ということだな。……端的に言うと奴隷だ」

「奴隷かあ…」

彩加が苦笑いしながら、奴隷という単語を呟く。あまり気持ちの良い気分ではないが、捉えようによってはそう言えなくも無いので複雑なのだろう。

「奉仕部の合宿も兼ねているし、働き如何では内申点が付くかもしれないな。自由時間は遊んでもらって結構だ」

「スケジュールはどうなっているのでしょうか？」

「うむ。一日目はオリエンテーリング：まあ簡単なスポーツみたいなものだが、その後の昼食の準備だ。生徒達の弁当と飲み物の配膳を頼む。二日目は夜に行う肝試しとキャンプファイヤーの準備だ。昼間は小学生達は自由時間だから、準備が終わり次第遊んでくれて構わないぞ」

雪乃が予定を確認すると、静は大まかに今後の動きを説明した。

「では、早速行くとするか。全員、荷物を持って本館に向かうぞ。荷物を置き次第、仕事に取り掛かるからな」

静が先導して歩き出すと、それに付き従う形で全員が後に続く。アスファルトで舗装されている道を歩いている途中で、静のすぐ後ろを歩いていた雪乃が陰鬱な表情で口を開いた。

「あの、……なぜ葉山君達までいるのでしょうか」

「ん？——ああ、私に聞いているのか。葉山がさっき言っていたと思うが、人手が足らなかつたから学校の掲示板で募集をかけていたのだよ。もつとも、そんなものに応募してくる人間がいるとは思わなかつたが……」

「言外に、彼らを物好きと仰っているのでしょうか？」

雪乃の隣を歩いていた八幡が携帯片手に聞くと、静は最後尾にいる隼人達を一度見てから苦笑する。

「そういう訳ではないよ。まあ、これもいい機会だろう。君達は別のコミュニティと上手くやる術を身につけたほうがいい。特に比企谷、君は周りに敵を作りやすいからな。さらっとビジネスライクに無難にやり過ごす術を身につけたまえ」

「それは隣の仏頂面の人に言ったほうがいいのでは？ エリートですから、上手くやる必要があるのならばいくらでもそう振舞いますよ」  
「……」

雪乃は静の言葉にも八幡の言葉にも反応せず、ただ黙っている。八幡はこれ以上は会話が続かないと悟り、歩くスピードを落として列の真ん中あたりを歩く結衣、小町、彩加達の所に混ざった。

「八幡、忙しいのに夏休みにテニスの練習に付き合ってくれてありがとうね」

「いえいえ、メル友の頼みとあれば断れませんから」

「ちよ、さいちゃんのお願いはきいたの!?! あたしが遊びに誘ったら忙しいって断ったくせに!!」

「ならあなたが付き合いますか？ 大体、元はあなたが持ってきた依頼でしょうが」

「うっ…」

夏休み中に送った遊びの誘いのメールを断られた事に腹を立てていた結衣だが、痛いところを突かれて言葉に詰まる。さらなる追及を避けるために、結衣は慌てて話題を変えた。

「い、忙しいって言ってたけど、ヒツキーは夏休み何してたん？」

「私ですか？ 小町さんや川崎さんの勉強の監督をしたり、後はメル友からのヘルプで海の家の手伝いや肝試しに駆り出されました」

「お、肝試しやってたんだ！ じゃ、明日は期待しても良いってことだよね？」



「どうですかねエ…ただボーっと立ってただけなんですけども」  
「立ってるだけでお化けと勘違いされるウチのお兄ちゃんって…」  
「小町ちゃん、ドンマイ…」

がつくりと落ち込む小町を慰める結衣。八幡は特に気にした様子も無く、携帯をいじりながら話を続けた。

「後はそうですね…ラジオ体操のハンコ押す係を引き受けたり、プールの監視員をしたり、稲毛のカラーギャングを殲滅したりしてましたよ」

「へ、へえ…」

「そんなに沢山やってたんだ…大変だったね」

「おかげで私も八幡と全然遊べなかった。だからこれから沢山遊ぼうと思う。いいよね？」

「そうですねエ…えっ」

「やつはろー」

この場にいるはずのない、聞きなれた声。八幡が後ろを振り向くと、ダブルピースをしている今井信女が立っていた。未来の嫁の予期せぬ登場に、八幡だけでなくその場にいた全員の視線が信女に集中する。

「信女さん…あなた、どうしてここに…」

「あれ」

信女が指差した方向を見ると、駐車場の端で沢山の人々が固まって並んでいた。その誰もが、八幡の知っている人物であり、メル友だった。その中の真っ黒いサングラスをかけた中年のおじさんが、人集りに向けて声を張り上げた。

「おいオメーらア！今から点呼を取んぞオ！はい番号オ!!」

「一！」

「よしオツケエエエ!!」

『二と三とその後はアアアアア!?』

「ああ? 知らねエなそんな数字。男はな、一、さえ覚えときや生きていけるんだよ」

「せんせー、私女の子だヨ?」

「いいかチャイナ、イイ女つてのは男を立てるもんだ。ほら良く言うだろ? 女は男より一歩下がって歩けてなア。つまり女も、一、さえ覚えておけば生きていけるんだよ」

神楽の疑問に対して謎理論を展開させて答えるこのおじさんこそ、八百万同好会の顧問である松平片栗虎である。

「えー、オメーらも知ってるだろうが、この千葉村つてのは自然との触れ合いを主にした保養施設だ。どうだ、空気が美味エだろ? おじさんはヘビースモーカーだが、ここにいる間はタバコもおさらばよオ」

「どーせしばらくしたら、体がニコチン求めて暴れまわるでしょ」

「うっせーぞ総悟オ!! こういうのは気の持ちようよオ。都会のコンクリートジャングルで生きる俺達じゃ滅多に来ねえ場所だ。気の済むまで遊び倒せエ! 虫取りでも魚釣りでもビックフット探してもヘンゼルとグレーテルごっこでも森の木陰であの子と○○○○でも好きにしろイー!」

「何つー事を大声で言いやがんだこのオツサン!？」

「つか、そんな事言われたら二人で行動するたびに○○○○してるんじゃないかって思われるじゃねーか!!」

「いや、それは違うぞ新八君。複数人でも3<sup>ピ</sup>○や4<sup>ピ</sup>○というものも…」

「九兵衛さんソレ伏字になってないですから!? 発音同じですからアアア!!」

「ああ、あとアレだ。今日明日は小学校の林間学校とかいうので沢山ガキが来てるからよオ、迷惑かけねエようにしとけ。総武高校つてどこも手伝いで来てるみてエだしな」

「あ？総武？アレ、それって確か…」

「八幡さんの通ってる高校ですよ、銀さん」

「ああ、そういやそうだったな……ん？じゃあアイツもいんのか？」

「旦那ア、信女の奴が消えた時点で察してください」

「噂をすれば、アル」

神楽が信女達の方を指差して八幡の姿を確認すると、八百万同好会の面々はわらわらと八幡を囲むように移動した。

「あら八幡君、奇遇ね」

「どうも、お妙さん。皆さんこそ千葉村でキャンプとは……まさか私と信女さんに気を遣われたのでは……」

「いや、全然そんなんじゃないからねーから。決して喉に脇差突き付けられながらお願いされた訳じゃねーから」

「ホントすいません松平公」

僅かに顔色を悪くさせながら言う片栗虎に対し、八幡は嬉しさと申し訳なさが混じり合った気持ちで頭を下げた。

「ハハハ、まあ本当に気にするなよ。どうせ行き先なんて決まってるかっただしな」

「どっかの学園長みてエに、単なる思い付きだからな……」

「あら、楽しそうでいいじゃない。皆とキャンプなんて、素敵な思い出になると思わない？」

「……否定はしねエよ」

笑いながら肩を叩いて八幡の緊張をほぐす勲。その隣では十四郎がぶつきらぼうな態度をとっていたが、ミツバの言葉には同意していた。

「ま、手伝いで大変だろうが少しは顔出せよ。でないと信女がまた勝

手にいなくなるからな」

「ええ、分かりましたよ坂田さん。逐一メールさせて頂きます」

「いやメールはいいから。お前のメール長すぎて読むの辛いんだよ。あとすげーテンションたけーし」

「じゃあ、キャンプを楽しんで下さいね信女さん。私も後でメールしますから」

「うん。待ってるから」

「八幡君、俺の話聞いてた？メールはいいからね？ねえ、聞いてんの!? 八幡君!?!」

手を振る信女と叫ぶ銀時を置いて、八幡は総武校組と再び合流した。

「ヒ、ヒキタニ君、あの人達は…?」

「私のメル友です。お時間をとらせて申し訳ありません。行きましよう」

笑顔を引きつらせながら聞く隼人に、極めて簡潔な説明をした八幡はすぐに歩き出す。その後すぐに、静が八幡に追いついて隣に着いた。

「驚いたよ、君にあんなに友人がいたとはな…」

「メル友は百人以上いると、前に言ったではありませんか」

「正直、半信半疑だったよ…」

「これで信用できましたか?」

「ああ…。だがな、比企谷。この奉仕部の合宿中は、なるべく彼らとは行動するなよ」

「……何故です?」

八幡が怪訝な目をしながら聞き返すと、静は少し不機嫌そうにしながら口を開く。

「当然だ。私は君に別のコミュニティと上手くやる術を身につけてほしいんだ。あれは君のコミュニティなのは分かったが、それとこれとは別問題だ」

「言われずとも、必要以上に接触する気はありませんよ」  
「うむ、分かっているならいいんだ」

静は八幡の言葉に大きく頷くと、意気揚々と先頭に立つ。

「（自分の思惑通りに事が進まなかったのが気に入らないのか、嫁を持つ私に嫉妬しているのか……両方なのかもしれないねエ……。何にせよ、問題が起きなければいいのですが）」

八幡は内心で静に辛口な評価を下しつつ、この林間学校が無事に終わる事を祈っていた…。

「(……………あの人がいる時点で、何も無いわけがないか…気が思いやられます)」

自分のコミュニティに対する評価も辛口だった。